
NOISE.2

坂津狂鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NOISE . 2

【Nコード】

N9019U

【作者名】

坂津狂鬼

【あらすじ】

俺とシキが出逢って色々あって……………。

夏休みが終わって、新学期が始まる。そして事態は変化する。

二人の遊びに巻き込まれていくように。俺もシキもその渦からは逃れられない。

……………最悪だ。

ある雨の日（前書き）

この話は本編に関係が一切無い話なので、読みたい人だけ読まな
いでください。出来れば全員読まないでください。お願いします。

ある雨の日

「最悪だ……」

夏休みもあと2日。そんな中、一つのこと気がついた。

もしかして俺はエキサイティングな夏休みを送ってはいしたが、普通の夏休みを一日たりとも送ってはいないんじゃないか？

中学時代に補習なんて拷問制度なんてものは無かったし、その補習の最終日にトラックに轢かれかけてシキと出会い、ファミレスで金をむしり取られ、廃墟で野球ボールにされて、魔神に会わされて、よくわからん場所に連れていかれて、なんかよくわからん化け物に殺されかけ、盆休みにジジィン家に帰ったらシキの友達に会って、偽パーティで恥かかされて、オトアに軽く殺されかけて、海に行ったらよくわからんうちに武器手に入れて、よくわからんうちにオトアに半殺しにされて、気がついたらベツトの上で、シキに声をかけたら燃やされて、カツコよく馳せ参じてしまったらオトアの怒りを買って三途の川に浸りかけて、魔神に力を貸してもらってそれを棒に振って、オトアに殺されかけて、シキと逃げて……。

その他シキに振り回される事、大多数。なんやかんやで俺はエキサイティングな夏休みを送ってはいしたが、普通のごく一般的な夏休みを送っていなかったわけだ。

そこで俺は思い出した！ 自分がシキと出会う前は平穏平凡平和を掲げていたことに。まあそんな設定は作者すら忘れて……おつと何でもない。

ともかく、俺は普通の夏休みというものを一応形式的に送ってみようと思った。暇だから。

俺が思いついた普通の夏休みは、ゴロゴロ、かき氷、読書。

その中で俺は読書をチョイスした。

………というのは嘘の言い訳で、本当は国語の読書感想文が終わってないから読書にせざるおえないわけで、結局、今年の夏休みの

最後まで宿題に縛られるのであった。

しかし！ 夏休みはまだ2日ある、すぐに適当な本を借りて適当に感想文を書けばいいのだ！

そして最後の一日をゴロゴロする！！

俺はそう意気込んで、義妹に馬鹿にされながらも、図書館へダツシユ。すぐさま本を借りて、

なんか来ていた台風によってボロクソに濡れているわけだった。

「最悪だ……」

どうにか本は死守（落ちていたビニールでカバー）しているが、俺自体がずぶ濡れだ。

っていうか、絶対に義妹の野郎しっていて馬鹿にしゃがったな。兄に教えてやる優しさはないのか？

はあ……………、風邪ひきそう。

「おい、小月」

「んあ？」

人生を諦めた青年のように俯きながら歩いて俺の名前が、前から不意に呼ばれた。

そこにいたのは片手に開いた傘、片手に閉じた傘を持つシキだった。

「どうしたんだ、シキ？」

「どうしたって、雨だからお前にわざわざ傘を持ってきてやった」

「……………お前ってやつは」

涙が出そうなくらい親切なことしゃがって……………。義妹だったら濡れて帰ってきた俺を汚物と同然に扱うのに。

ホント、お前ってやつは……………なんて優しいんだ！

親切心が身にしてみても、シキを抱きしめたいところだが……………残念ながら、俺はビショビショ。抱きつけん。

「ほら」

シキは俺に向かって閉じていた傘を差し出す。

「ああ、ありがとう」

俺はそれを素直に受け取り、すぐさまに傘を開く。

「それにしても、よくすれ違いとかにならなかったな」
シキの隣を歩きながら、つくづく思う。

多分、図書館までの道は義妹が教えたんであるうけど、それでも俺とすれ違いになる可能性はある。

こうして会える方が確率的には低いだろう。

「まあ、小月を見つけるのは簡単だからな」

「……俺の行動パターンが単純ってこと？」

「いや、そういうことじゃ……無いんだが……」

「んじゃ、どういう事だ？」

「いや、それは……ッ」

隣を歩くシキは、そのまま黙って俯いてしまう。

やっぱり俺の行動パターンは単純なのか？ まあ、自分から行動するのとか俺は得意じゃないけど。

それつきり、シキに話しかけ難い雰囲気になってしまい、二人とも沈黙したまま歩き続ける。

しばらくすると、目の前に大きな水たまりが出来てる小道に入り、前から車が向かってきた。

「危ない！」

このまま歩いていけば、シキは車が撥ねた水にかかって濡れてしまう。

そう思ってシキの手を掴み、俺の方へ引き寄せた。

「ひゃ！？ なんな何するんだ、小月！」

そう言ってシキはいきなり俺を両手で押すが、あんまり力が入っておらず、俺を突き飛ばすというよりも自分が姿勢を崩して俺から少し離れた場所に尻もちをつくような形になってしまった。

丁度その時に車が通り、水しぶきが勢いよくシキに降りかかり……さらには雨に濡れて、その……。

スケスケエーな状態になりました……ね。せめて傘が盾になれば良かったんだけど、神様はいたずら好きだなあー。

服って透けるとエロいよね。密着感を露わにして。下着とかも見え

るし。

「……いや、俺は何も見ていないよ。何も見てない。」

「……ああ、シキが俺をジト目で見てくる。俺は悪くない、濡れないよう気を遣っただけなんだ。」

「……過失は無いんだ。悪意もないんだ。やましい気持なんて一片たりとも無かったんだ。」

「……そうか、こうならないように小月はアタシの体を引っ張ったんだな」

「見てません見てませんから許してください」

「ああ、別に気にしてない。小月はアタシを助けようとしたのだからな」

「シキさん、あなたの口はそう言ってるらしいんですが、あなたの目は殺す殺す殺すと訴えかけてきているんですが。」

「ところで小月」

「なんだシキ？ やっぱり処刑か？」

「お前はその程度しか濡れていなくて、アタシはこれだけ濡れてしまった」

「なんかさあ、濡れるって表現はエロいよね」

「取り敢えず、傘を返せ。ついでに母なる大地に命を返せ」

「あ、はい」

「ヘクシヨンっ！」

「……あれ？ シキが傘を届けていったはずなんだけど？」

「いや、まあ理由は色々ありますねえ……」

「シキに傘を没収されたり、水たまりに蹴り飛ばされたり、そのままシキに置いていかれたり……色々。」

「……？ まあ、いいや。さっさとシャワー浴びてきたら？ 風邪

ひいちゃうし」

「そうだな」

ビツシヨビシヨの服のまま玄関より先の敷居をまたがせてくれない義妹の提案だ。素直に受取ろう。

にしても、マジでこれは風邪を引くんじやないか？

……いや、何度も死にかけた俺の体がたかが風邪ごときに屈するわけがないか。

俺は洗面所に入り、服を脱ごうとしたところで、

「……………こ、づき？」

以下説明略。え？ 許さない？ 無理無理無理、俺見てないもん。

ギリギリ見てないから。

「お前……ここで何してるんだ……………ッ？」

何って言われましたら、死にたくない、と神に祈りを捧げているとしか。

「答える小月い……………ッ！！」

「ちょっと待て！ 落ち着けよシ」

慌てて、両手をシキに向かって出しながら落ち着けようとする俺。

さて質問です。両手を前に…………シキに向けて出す時にはある一つの現象が起こります。何でしょう？

模範的な答え。

アニメとかだと湯気が視界を遮ってくれるけど現実ではそんなに白い湯気はかなりの温度を保ってないと発生しないと思うし、そもそも湯気と違って気温の低い方に移動するからいつまでも風呂場でフリーズなんてしてましたら当然、色々見てしまいましたですね、それで、あの、案外肌が白かったり、予想以上に貧乳じゃなかったり、水滴を垂らす髪が肌に密着してて白と黒とのコントラストがそのええとだからつまり…………、

俺の全身が真っ蒼に燃えたって事です、はい。

「ブ、チ、コ、ロ、ス……………」

宣言すんのがちつとばかり遅いですよ、シキさんや。

気づいたら俺はリビングにいた、なんて事が日常になり始めたらとうとう俺はゾンビの仲間入りを果たしてもいいと思うんだ。

そんな事はどうでもいい。

「秋音、お前の悪意によつて俺は地獄の炎に焼かれたわけだが」

「……忘れてただけ。そもそも責任転嫁は良くない」

「だけど、お前にも3割くらい責任がある」

はあ………、もう焼き殺されるのは嫌だ。いや、今回は断然俺が悪いのだけだ。

……あれ？ そういやシキどこだ？

覗き以降、姿を見ていない。もしかして恥ずかしさでどこかに閉じ籠ったとか？

「……そういえば、シキに客が来てた」

「客？」

「……鑑、とか言う人」

「ああ、あの変な 師匠が来てたのか。それで、何か言ってきた？ セクハラしてきた？」

「……なんか、シキに服を渡してくれって。あとお土産にケーキをくれた」

服はコスプレのやつ。ケーキは……まあご機嫌取りか、もしもの時の命綱か。

いつその事、鑑師匠も焼き殺されてしまえばいいのに。魂の奥底まで。

「……そして多分、今シキはその服を着てると思う」

「ごめん、俺本読まなきゃいけないから自分の部屋戻るわ！！」

これ以上焼き殺されたくないのが本音ですが、何か？

俺にとばかりが来るフラグだつてことくらい分かってんだよ。逃げずにどうする？ 戦うか？ 即敗北決定だぞ、こんちくしょうが。そうやって、自室に戻ろうとした俺の腕を義妹が掴む。

「……二ヒイ」

「おいやめる。本当に愉しそうに笑うな。気色悪いんだよ、気違いが」

「……ちよつとだけ、蒼い景色が見たいだけなの。お願い」

「ちよつとだけ、じゃねえーんだよ！ こちとら命懸ける事になるんだぞゴラツ！」

「……大丈夫、慣れたでしょ？」

「慣れるわけねえーだろ！」

「秋音エ！」

壁越しにシキの怒鳴り声。

あ、もうダメだ。俺も巻き込まれた。蒼い炎に吞まれたなこりゃ。

「こつちに来い！」

「……やだ」

義妹はシキの地獄へのお誘いを断った。っていつか断れるのか、いいなあ。

「……何か文句があるなら、こつちに来ればいい」

わざわざ死を回避したのに自分からお呼びになりますか。

本当に死神ちゃんが来ちゃってあの世に繋がる川で遊泳する事になつちやうぞ。

「うう……そつちに小月はいないか？」

そりゃ、さつき全裸を見られた人間の前にそうそう出たくないよな。

そつちや別にどうでもいいけど、俺、なんか死んだ衝撃なのかどうなのか分かんないけど、見た瞬間の記憶が見事に吹っ飛んでるんだよなー……男として、残念だ。

「……いる。当然」

「ッ！ やっぱりこつちに来い秋音！」

「……やだ」

やっぱ、全裸見られたの気にしてんのかな？

だった一応、覚えてないって言つといた方がいいよな。焼死決定するだろうけど。

「シキ、言っておくけど俺はさつき見たものは覚えてないぞー」

「当たり前だ！ 吹っ飛ぶように燃やしたんだ！」

オブラートに包んで俺は言った結果、シキの炎の利便性が増えている事を知りましたとさ。

死ぬ前の記憶が抜けるのもまた怖いものなんだけどなー……………。

「ともかく秋音はこつちに来て、アタシに殺される！」

……………とんでもない事を言いやがった。普通に殺人鬼っぽいことを言いやがった。

ある意味、さすが死神だ。褒め言葉じゃないけど。

「……………メイド服がそこまで嫌なの？」

そうか、師匠はメイド服を持ってきたのか。

何故、そのセンスなんだろう。この季節はメイド服じゃないと思うんだ。

師匠に限って、メイド服っぽいとかではないと思うんだけど。ちょっと季節を見誤ってないか？

そもそもメイドはあんまりな……………。

「ガーターベルトだもんなあ……………」

「……………ガーターベルト、良いじゃん」

「いや、ニーソックスの方が良いだろ」

「……………ガーターベルト」

「ニーソ」

「……………ガーターベルト！」

「ニーソだっつてんだろ！」

「……………喧嘩売ってるの？ ニーソがガーターベルトに勝てると思ってるの？」

「ハっ！ それこそ、ガーターベルトがニーソに勝てると思いがつてやがるのか？」

「……………上等、表出な」

「ああ、良いぜ！ 徹底的に論破してやるよ」

「お、おい秋音。何を熱くなってるんだ……………？ こ、小月も少しは

「二人とも落ち着こ」

「……レイヤーは黙ってる！」

「二人とも、そこに土下座！」

何故かブチ切れたシキが、リビングへ突入してきた。

まあ当然、シキはメイド服なわけで、白と黒のコントラストが……
つてあれ？ デジャブ？

いや、違うな。シキのメイド服を見たのは初めてだから。どこでだろうか？

まあ、どうでもいい。

「バカ義妹、お前は何故ガーターベルトに加担する？ そちらに何があるというんだ？」

「……相手の意見を否定した上でニーソの良さを語ろうとする手は読んでいる。だがこちらは一撃必殺の切り札があるんだよ、愚兄」

「ふつ、そんな言葉でニーソから逃げ切れると思っているのか？」

「……シキの太ももを見て、萌えないのかい？」

「なん……だと……！！！」

くそっ！ ―撃必殺……一言必殺じゃないか！

俺が萌えると言ったら義妹への敗北を示す。萌えないと言えば、こいつはどうせ近くで見れば分かるやら言っけ出して、風呂場の二の前を起こすつもりだろう。

そもそも見る行動を示す時点で、シキに焼き殺される確率が非常に高い。というか殺される。

そして見ない選択肢は『見たら屈するから見ない』という意味を持つてしまう。つまり義妹への敗北。

俺に残されたルートは焼死エンドか敗北エンド。

そんな……もう詰みじゃないか。俺は終わりだ。

……いや、諦めるものか。考える考える考える考える考える考える
える考える考える考える考える。

まだあるはずだ、第三の隠しルートが。希望の道が！

「シキのメイド服には萌えるしシキの太ももにも萌えるが、それは

直接ガーターベルトを付けたシキに萌えたわけではなく、シキの太ももなら、というかシキなら何でも萌えるのだが、その中でも二ノソを履いたシキの太ももに一番萌える」

途中で思った。これは焼死エンド決定だな、と。

言い終わって思った。そもそも死ぬくらいなら負けたほうが良かったんじゃないか、と。

でもほら、命は死ななくてもプライドが死ぬじゃん。義妹だとなおさら。

まあ一言遺言を残せるんなら、我一生に悔いなし、って事だ。

さあ！ さつさと俺の体を真っ赤に……真っ蒼に染めやがれ！

「~~~~ツ！ うう……………」

反応が無い。というかむしろ俺が真っ蒼になるんじゃないかと、シキが頬が真っ赤に染まっている。

一体何があつたんだ？

「……………負けた」

義妹が敗北宣言をした、有り得ない。っていうか何に負けたんだ。そもそも何で勝負していたんだ俺達は。

「こ、小月い……………あ、あのなそういうな事はな……………思っても口に出さないのが普通であつてな、その……………」

縮こまってブツブツと何かを呟くシキ。一切何を言っているのか分かりません。

っていうか取り敢えず、俺は謝るべきだろう。色々。

「いや、すまんシキ。あれは全て嘘という事で聴かなかつた事にしてくれ」

「嘘なのか……………嘘なのかっ!??」

「な、何だよ。落ち着けてシキ」

取り敢えずその掴んでいる俺の胸倉を離そうか。頼むから。締まるから。締まってるから。

「……………ッ！ そういえばシキ、確かめる方法が一つ思いついた」

義妹よ、お前が思いついたのはどうせ俺を殺す方法だろうが。顔に

出てんだよ、思いつきり。

っていつか今からシキに何させるつもりだ？ よく分からんが俺の死亡フラグは回避されてしまったし。

「…………お帰りなさいませご主人様』たとえば、自然と反応が分かる」

クソ義妹があー！！ お前絶対にボッコボコにしてやるからな！

絶対に死ぬじゃねえーか！ シキが照れでもしたら当て付けに俺が殺されるし、そもそも言われた直後の俺の反応によっては死亡確定じゃねえーか。

っていつか絶対に死ぬ気がする。作者がオチ思いつかないからとかいう理由で俺の命がここで終わる気がする。

「む、無理だ！」

「…………嘘を見抜くためだから。減るもんじゃないし」

「で、でも…………」

「…………そもそも、その衣装を着た時点で言うのが宿命」

「うにゆにやう……………」

オチ確定だ。俺の死がオチとかもうどれだけ作者は鬼畜なんだよ俺に対して。

恨みでもあるのか？ あるんだよな、多分。

クソツ！ 今からどうにか死を回避できな

「こ、小月」

「ん？ 何だ？」

「行くぞ……………」

シキが深呼吸を始めた。死は回避できないようだ。

でもさ、死亡理由として弱くないかこれは。完全に当て付けだろう。作者の羨望による嫉妬だろ俺の今回の死亡理由。多分、いや絶対に。

「お、おお……………おか…おかえ……………」

「ああ、死が近づいてくるよ……………」

死神の鎌……………じゃなくて炎の気配が刻一刻と近付いてくるよお……………。

「お、おかいらにゃしゃいませ、ごじゅしんちゃまつー！ー！」

かつみかみで紅潮しながら台詞を言うシキ。

言い終わると同時に、というか「まっ」の部分で俺の……というよ
りシキの前方直線状に蒼い炎が迸る。

いやまあ、当然俺はその直線状にいて焼かれたわけなのは言うまで
も無いんですけど。

どうにかギリギリ義妹を巻き込む事に成功したのは、一応、言うて
おくべきだろう。

ザアマミロ、人を罵倒するからこうなるんだ。

ある雨の日（後書き）

ええ、私は小月が嫌いです。

投稿しろ投稿しろ、うるさいから途中でぶった切って投稿しましたよ。

続きはありません………すが秋音までがデレる可能性がある物語なんて書きません。

ガチで小月をこの物語から無き存在にしてしまうので。

別に俺は存在消してもいいキャラだと思えますけど。つーか永眠すればいい、小月というキャラは。

………と、まあ本気1割、真実9割の後書きなんて放っておいてこの話はマジで読まなくてもいい、というか読むなというものなんです。

続きが書きたきや書きますが、書くわけありませんので。

あ、本編はしっかりと書きますよ。書きますとも、時間を無駄にかけ

登校直前（前書き）

NOISEを読んでいないと話が理解できないかもしれません。

まあ別に読むほどの文章でもないのですが、NOISEを読んでいない人は戻った方がいいと思います。

何に關しても、まずは体験版からですから。

登校直前

「学校？ 今日から？ 毎日？」

「そう。今日から毎日学校なんだよ、俺は」

目の前に座る黒髪で蒼い瞳の少女がキョトンとした様子で訊いて来たので俺は素直に答えてやる。

少女の名前はシキ。苗字は知らない。苗字を捨てたカッコいい過去を持つてるかもしれないが、知ったこっちゃない。

この少女とは7月の終わり頃に出逢ったのだが、9月1日現在、すっかりとウチの食卓に馴染んでいる。

というか前々から疑問なんだが、こいつは一体いつもどこで寝ているんだ？

義妹にでも訊いてみようか。アイツならば知っているだろうし。

「……ちなみに、ワタシも今日から学校」

「秋音もなのか？ ならアタシは家で一人になるのか？」

秋音。張空秋音。俺の血の繋がりの無い妹、つまりは義妹である。

金髪に灰色の瞳。7年前に両親が突如帰ってきて『今日からこの子はウチの子になります』と訳の分からない宣言と共に紹介された少女。

俺はこの少女について、性別と容姿と年齢と誕生日のことしか知らない。

……って、冷静に考えてみれば俺はおかしな状況にいるんだな。

俺は二人の少女を大して知りもしないのに、何故か同じ屋根の下に暮らしている。

義妹については両親が置いて行ったからであるが、シキに関してはいつの間にか住み着いていた。

野良猫2匹に金蔓一つ。それが現在の我が家の状態であるのか。

ちなみに金蔓の立ち位置の奴は言うまでもなく俺である。悲しいな、せめて植物じゃなくて動物がよかった。

「なら、アタシも小月と一緒に学校に行く」

「そりゃ無理だな諦める」

シキの提案を速攻で批判し、俺は16人前の蕎麦をひたすら食っていた。

伸びる。食っていても伸びて、量が増える。半端じゃなく。

これを食べる奴を人間の部類には入れてはいけないうと思っものも、残念ながらとうに16人前蕎麦を食い終わっている猛者が俺の家に二人は居た。

シキ及び義妹である。こいつら一体どういう食道と胃腸の持ち主なんだよ。本物の化物なのか？

しかしまあ、この二人が食べ終わってしまったら、俺は文句を言えずに16人前蕎麦を完食しなければならない。自ら超人の域に達しなければならぬ。

取り敢えず、胃袋にどうにか押し込んで、あとでトイレで吐いてしまおう。じゃないと俺には到底不可能だ。

いや、胃袋にこれを押し込める時点で不可能だとは思っのだが。

「どうしてだ！」

どうしてお前らはこの16人前蕎麦を食べるのだ！

……ではなく、シキが俺の批判にさっそく口を出してきた。

口を出すなら、蕎麦の方にしてくれ。是非に俺の蕎麦削減を手伝ってくれ。

「……それは、今日が学校見学日じゃないから」

義妹が蕎麦に苦しんでいる俺の代わりにシキの説得を買ってくれた。久しぶりに、いや人生初めて、義妹が優しいと感じた瞬間だった。

「なら、こっそりと」

「……それは、普通に犯罪だから」

「くう……」

シキの短絡的な思考はことごとく義妹に撃破され、事態は無事に解決する事に

「……ただ、一人が嫌だっただけなら解決法がある」

「……………何だ、それは？」

「……………登校時間を過ぎてしまったら面倒臭くて学校に行かないって
いう人間をちよつとの間、眠らせてあげればいいの」

なるわけが無かった。事態は更に悪化を極めそうに
なっている。

…って、あれ？ 俺の危機管理能力が呻きを上げてるよ、もう詰み
だ諦めろ、って。

そんな事はない！ まだ俺には魔神がいるんだ！

ちなみに補足しておくとも魔神というのは詳しくは知らないが、俺の
中にそんな存在が居るらしい。そしてその存在はめっちゃチート能
力を持つているらしい。詳しくは知らないが。

あと言うとなれば、こんな場面ではわざわざ力を貸してくれないっ
て事だ。

さて、頑張れよ俺の胃袋。今日の俺の命運はお前の許容量に託さ
れてしまったんだ。

蕎麦は嚙まなくても直接食道を通る。そう信じ込んで次々口に運ぶ。
途中で吐きそうになったが、正直、シキが義妹の勧誘に負ける前に
完食し家を脱出しなければならぬ。吐いてる暇など俺には残され
ていないのだ。

「…ちよつえ……………」

気合いと根性と精神と理性で完食し、中途半端な言葉を言った後、
俺はすぐさまに家からの脱出を試みる。

「……………あ、逃げた」

「小月、ちよつと待ってくれえ！」

後ろから、俺の背後から死神が手招きをしているイメージ図が思い
浮かんだ。悪夢だ。

幸いな事に、登校の準備を終わらせてから食事を取っていた為、鞆
は玄関に放りだされてた。

何故に玄関に放り出されているのかと言えば、俺がそこに投げ捨て
てから食事を取った為である。

「いつてきまうえっ！」

靴を履き、鞆を持ち、玄関を開け、とても奇妙な挨拶と共に俺は家からの脱出を成功させた。

今思い返せば、ここでシキに捕まっていたほうが良かったのかもしれない。

まあ、大して結果は変わらないだろうが、気分的にはもうちょっと危険な世界を忘れたかった。

しかしながら、引き金を引いたのは俺自身らしい。無自覚ではあったが、俺の行動が引き金となってしまったらしいのだ。

そう。つまりは、仕方が無い事だったわけだ。

9月1日。この日、俺のクラスに転入生が来た。

登校直前（後書き）

この小説のファンタジーなところは作者の頭の中ですので、ご注意ください。

あと、分かってると思いますが趣味で書いてます。更新速度が異常に早くなったり遅くなったりはいつもの事です。

それと、2〜3人しか読者がいないと思いますが、まあ勝者の方々は引き続き読める物なら読んでみやがれ、です。

転校生

校門、昇降口、階段を上り、そして教室へ。

いつも通りの朝、なんて表現になってしまいが、実際そうなのだ。

俺は誰かと一緒に登校することも、登校中誰かと会う事も無いのだ。自然と通学路がそうになっている。まあ時間帯をずらせば俺の学校の生徒とは出会うかもしれないが、いかんせん興味がない。

だってそうだろ。同じ学校でも知らない人には変わりはない。同じ電車に乗った知らない人に話し掛けないのと同じことだ。

さあて、俺は教卓のすぐ前の席に鞆を置く………つまりは俺の席は教卓の前という地獄トクトウセキの席なんだ。

最初の席替えが5月頃だったからもうすぐ席替えをするとは思っただけど……いつになったら俺はこの縛りから解放されるのだろうか？

はあ………と溜息を吐いた後、教室内を見回す。

俺の宿敵ともである古瀬の姿が見当たらない。新学期早々、どこで何やってんだ？

まあ、いい。好都合だ。

これで遠慮なく、トイレに行つて、16人前蕎麦を吐き出せる。

新学期と言えば、まあ集会である。

俺は無駄に大人がぺちやくちゃ喋っているこの集会の意味合いが未だに理解できない。

いやだって、お前らの言葉を聞いて『よし、今学期も頑張ろう！』と思う生徒がいるのかという話だ。

もしかしたら他に目的があつて集会を開いているのかもしれないが、だとしたら尚の事、校長の言葉はいらな**い**と思う。

〳〳を頑張ら**ま**しょう、的な言葉を言われても頑張る生徒と頑張らない生徒の比率は変わらないし、注意なんかは担任が言えば即解決むしる普段会いもしない大人よりも説教の意味がありそうだ。

それに校長本人だつてわざわざ言葉を考えるのは面倒だろう。ならばいつその事、校長の言葉を無くしてしまえば良いのだ。……などと考えているうちに集会は終わって、教室に戻る。その途中で、古瀬に話し掛けられた。

「よう、小月」

「……今日は随分と機嫌が良いんだな、古瀬」

ニヤニヤとした顔で俺の肩に腕を回してきて毒舌を吐かない古瀬なんて、機嫌がイイに決まっている。

世の中単純なものだ。

「実はよ、物凄い情報を掴んだんだ」

「だから今朝は教室に居なかったのか……」

「ああ、その情報の真偽を確かめに行つてたからな」

「それで、その情報とやらは？」

大体予想がつくが、一応古瀬に聞いてやる。

「つーか、古瀬が食いつくネタなど一つしかない。女性関係だ。」

夏休み前までは、古瀬と一緒にそういうネタを追いかけていた俺が言うのだから間違いない。

女性関係で、学校で、今の時期と言つたら……おおよそ、転校生つてところか。

この時期に新任教師が来る理由が無い。となると転校生が一番可能性が高いだろう。

「ウチのクラスに転校生が来るらしい」

ほらやつぱり。転校生だった。

にしても、ウチのクラスに転校生……。

「珍しいな、転校生が来るなんて」

留学生とかが来る学校は多いかもしれない。外国のどこかの学校と姉妹関係を結んでいたら。

しかし転校生自体が珍しい。

高校生なんだから、最悪はバイトして独り暮らしを出来るのだ。

親の都合で転校してきた、なんて事があまり起こらないだろう。ち

なみに俺は働くのが面倒なのであつさり転校してしまうだろう。

まあ基本、自分で高校とかは選ぶものだから転校はありえないと言つても過言ではない。

でも転校生だそうさ。しかもウチのクラスに。

……………ここからは俺の勘で言うが、微妙に嫌な感じする。シキと出逢つて、俺は裏の世界に関わってしまった。

その裏の世界の臭いがするというか、なんというか……………。

「しかもな、けっこう可愛い子だった」

古瀬が嬉しそうに言う。そっぴや性別を聞いてなかったが、まあこれも予想通り女だったか。

「そうか、それは楽しみだ。さっさと教室に戻ろうぜ」

「ああ」

古瀬は頷くと、回してきた腕を元に戻してさっさと移動してしまう。さあて、緊急事態だ。絶対にウチのクラスに来る転校生は裏の世界の関係者だ。

勘でわかる。女の勘ならぬ男の勘だ。

まあ勘以外で説明するなら、さっき言った通りに高校で転校生はあまりない事。

そして美少女という事。とくにこの美少女という所は重要だ。

美少女、それは危険の塊。絶対的な非日常の塊。

んなものに関わったら面倒事になるに決まってる。最悪だ、と呟く事に決まっている。

絶対に関わるものか。

俺はそう心に決め、古瀬の後を追うのだった。

「実はウチのクラスに転入生が来ることになりました」

古瀬の情報は確かであった。まあもう関わらないって決めたんだけど。

俺は机に突っ伏して、寝てるふり……………というか割とマジで意識の半分は寝ていた。

先生の横にいる奴の顔は見えない。というか視界は真っ暗だ。瞼を閉じてるからな。

声だけしか聞こえない。

どうやら転入生とやらが前に出て自己紹介を始めたようだ。

「張空^{つくみ}亜実だ。張空小月の婚約者だから、皆よろしく」

「小月を狩り殺せえ！」

「先生、気分が悪いんで早退しますっ！！」

言うや否や、俺は反射的に鞆を取って教室を飛び出していた。

「……………ごめん、何が起こった？ 正直半分寝てたから、古瀬が『小月を狩り殺せえ！』と言った部分は聞こえたんだが、何が起こった？
ともかく後ろから迫る禍々しい殺意を振り払わなければ、状況整理も出来やしない。」

ああ、何故だが安全安心な学校生活が去っていくような気がする……………。

まったく新学期初日から、最悪だ。

転校生（後書き）

小月の平凡な生活は、一体どこにあるのだろうか？

転校生・2

「……………殺気がやんだか」

学校の中庭で、俺は一人安堵する。

古瀬は俺の下駄箱の中身を入れ替えて実際に校外へ出ない作戦に見事に引つ掛かった。

おそらく下駄箱の中身をすぐさま確認した古瀬は履き替えずに校門へ向かっただろう。そうしたら俺は追いつかれる可能性がある。

俺と古瀬の走力は一緒だが、殺意による強化をした古瀬に既存の情報など無駄。背後に迫る殺気は段々と近くなっていた。靴など履きかえている時間があつたら校門前でデッドエンド確定だ。

だからこそ校門へ行かずに中庭に行つて身を潜めていた。

上履きのまま校門まで行くことも出来たが、後々洗うのが面倒臭かった。

古瀬はその後、数十分間校内に殺気を撒き散らした後……………つまり今、俺の搜索を諦めたようだ。

ともかく、助かった。

……………にしても、一体俺が何をしたんだよ？

俺は半分寝ていた。古瀬に怒りを買うような事はしていなかった。

となると……………もしかして、転校生に原因が？

「凄かったな、あの生徒。本当に一般人なのか？ 一般人が放てる殺気では無かった気がするんだが」

「……………？」

不意に横から声がしたので、振り向いてみる。

そこに居たのはウチの制服を着た、茶髪の女だった。

同年代の女子と言うには少し大人びている。お姉さん、という感じの雰囲気を漂わせていた。

俺が頭の上に？を浮かべていたのを見て、茶髪は自己紹介をし始めた。

「ああ、そう言えばお前はさつき寝ていたからな。アタシの名は張空^{つぐみ}実」

張空！？ 俺はこんな女知らんぞ！

さては両親が秋音の時よろしく、またどこかの国から持ち帰ってきたのか？

国際法で、動物の密輸入は禁止になってんのを知らんのかウチの親は！！

「 に、なるはずだった人間だ。ちょっと驚いたか？」

……あ、冗談だったのね。すまんすまん、クソ両親。誤解をしなければよかったよ。

にしても、なるはずだった、ってどういう意味だ？

「さつきもその冗談を言っつて、ついでにお前が寝ていたから張空小月の婚約者だと付け加えてみたのだが、随分今の世代はノリが良いんだな」

「俺が殺されかけたのは、お前のせいかあ！！」

そりゃ古瀬が殺しに来るわ。そんなに明言されて殺しに掛からなかつたらそいつは古瀬じゃない！

仕方が無い。あとで古瀬を一発殴ろうと思ったが、やめておこう。

「おい、張空弟」

「……あんた、兄貴の知り合いだったのか？」

裏の世界うんぬんを置いて、俺が弟呼ばわりされるって事は兄貴の知り合いの可能性が高い。

「ああ。張空陽介はアタシの婚約者だったからな」

「……………」

……………。

……………。

……………兄貴に彼女？

……………はは、そんな事は無いって。

確かに兄貴は頭がずば抜けて良くて鬼才って呼ばれる程だったけど、それは……………。

「くそおっ!!」

「そんな事より、張空弟。シキは近くに居ないのか？」

俺の叫びを無視して、茶髪は聞いてくる。

しかし自暴自棄になりかけた俺の耳には届かず、視界は青空を向き、体の重心が宙に……………宙に？

って俺投げられてる!?

「ぐぺっ!」

「シキは何処だ、張空弟」

「……………家に、居ます……………」

やべえ、この茶髪。シキより凶暴かもしれない。というより凶暴だ。何だ何だよ、兄貴。アンタ鬼才のわりには女見る目は無かったんだな、ザマアミロ。

ッ? 何故か何処かからか、お前もだ、と聞こえたような……………。
「ちっ……………なら、直接電話掛けた方が早いか」

舌打ちをした後、茶髪は片手で逃げようとする俺の襟首を掴み上げ、片手で携帯でどこかに電話している。

あ、ヤバイヤバイ首締まる!

頸動脈辺りに制服の襟が当たっとなる!!

9秒後

薄れる意識の中、ドタバタと誰かが猛ダツシユしている音が聞こえる。

しかし俺はココまでの様だ。短かった人生だったし、最後の方はバタバタだったし、あんまりよくない俺の生涯はココで幕を閉じ、

「小月い!!」

る直前に俺は唐突に降ろされ、これから先も生きていける権利を獲

得した。

正直、死ぬと思った。いやあ、なんで生きてるんだろつな俺。

「大丈夫か、小月!？」

「あ、ああ………ってシキ、なんでお前はここに居る？」

咳き込む俺の傍に寄ってきたシキに問い掛ける。

「亜実に脅迫電話を掛けられたんだ。来なければ、すぐさまに小月が死ぬと」

あながち間違っちゃいない。あのままだったら確実に俺は死んでいた。

「亜実は有言実行タイプなんだ。自分がやると言ったことは必ずやる、そういう奴なんだ」

「恐ろしいな………、よく兄貴も結婚しよと思ったもんだ」

いや、押されに押された末に了承したのかもしれない。兄貴も鈍感だったからな。俺よりはマシなレベルだったけど。

「こらシキ。亜実じゃなくて亜実さんだろ」

茶髪の声のした方向へ振り向く。そこで目に映ったのは茶髪の姿を遮る蒼い炎。

なるほど、シキのお蔭で俺は助かったわけか。

シキには生命力を操る力といった不思議能力がある。それを使用する際に現れるのが蒼い炎。

アレに燃やされたら、死ぬことも蘇ることもシキに操られてしまう。まあ自分から蘇る奴なんていないだろうけど。

ともかく、生者を殺し死者を蘇らせる事の出来る力。それをシキは持っている。

つまりあの茶髪は蒼い炎の事を知っていて、かわしたのか。だから俺が降ろされたわけだ。

「亜実！いきなり小月にこんな事をして、何がもくふえひなんひや」

「言うこと聞かない口はこの口かなあ？」

蒼い炎で見えなかったが、茶髪はいつの間にかシキに近付いて頬を

片手で挟んでいた。

「まあ、そう急ぐなよ。アタシがココに来た理由はお前ら二人にあるんだから」

「ふひやりに？」

「…………シキ、無理して喋らなくても俺が代わりに言ってるよ。だから喋るな。緊張感を大いに削ぐな、和ませるな。」

「まあ、大雑把に言ってしまうえば」

茶髪は俺に視線を向けた後、再びシキに視線を戻し、言う。

「お前らのせいで、近々大きな戦いが起こる事になった」

転校生・2（後書き）

ツッコミ大歓迎！

嫌なんだよ、こっぴつ展開……………

「お前らのせいで、近々大きな戦いが起こる事になった
った」

……………は？

「……………それって、どういう」

「って言うのが今日のしし座の運勢らしい」

「ぶっ飛ばすぞ、お前！！」

ムカついた。非常にムカついた。

茶髪がシリアスじみた声のトーンで言うから、俺も少しはビビった
のに、星座占いで誤魔化された。

非常にムカついた。というか俺はこの茶髪とは相性が悪い。あとで
一発殴らせる。

「まあ、占いって言うのは嘘だが」

「そうじゃなかったら、本当に今すぐぶっ飛ばしてるよ」

「予言通りに事が進んで、アタシは非常に焦っている」

「予言……………？」

「張空陽介がアタシに言った最後の言葉だよ」

そう言うのと茶髪はシキから手を離し、その場に座り込む。

「陽介はアタシに言った。『いずれ弟が何か大きな事を起こす。そ
れを皮切りに、世界が動き出す』ってな」

「俺が大きな事を起こす？ 言っておくが俺は大した事に巻き込ま
れはしても、起こしたことは」

「張空弟、お前はあのオトアを倒した」

オトア……………俺の中の別名は怪物。

空間を歪める力を持っていて、その力は絶大。

破壊的な使い方と、一切の攻撃を通さない透明な鎧を作りだす使い
方。その二つによってシキがボロボロに追い込まれた。

生命力を操れるあのシキが。それ程に、オトアの力は圧倒的だった。

だが、オトアは8月22日に敗北した。俺達に。そう俺達。オトアを倒したのは俺とシキなのだ。俺が起こした事って言えるのか？

「シキが止めを刺したようなものだから、俺が起こした事というのは……」

「いや、お前がいなければシキはオトアに止めを刺せなかった。お前が動かなければシキは死んでいた。そしてお前は行動し、オトアの力に隙を生み出した。それだけで充分、お前が起こした事と言えるよ」

「そうだぞ小月、そこまで自分を過小評価しなくてもいい。お前は活躍したんだから」

茶髪の言う事に便乗してシキまでそう言う。

まあ、女には分からないんだろうな。男ならばビッシリ敵を倒したってこういうこの気持ちだ。

「まあオトアを倒した事を皮切りとして、世界が動き出す可能性がある。そういう話をしに来たんだ」

「その為にわざわざ転入生のフリまでしたってか？ そんな面倒な事をしなくても」

「話を遮るな、最後まで聞け」

イテツ！ なんで叩いて来るんだよ。

「アタシは世界が動き出すという言葉の意味を、大きな戦争、という風に考えている」

「第3次世界大戦、つてところか……」

「まあ確証は無い。陽介も決して戦争が起こるとは言っていないから。だから。だが裏の世界の人間はもうそろそろ大きく動きだすだろう」

そう言うと茶髪は俺に視線を向け、

「それでまず狙われるのが、お前だ。張空弟」

「……マジかあ」

理由は言われなくても分かっている。

一つはオトアを倒したという経歴。

オトアはあれだけ強力だった。それを倒すとなれば、さらに強力凶暴な力を持つ人間という事に普通はなるだろう。

そうなれば、普通に命を消そうとするのが妥当だ。故に狙われる。

一つは俺の中にいる存在、魔神だ。

詳細は知らないが、俺の中にいる魔神という存在は半端じゃない力を有している。

いつ戦争が起こるか分からない状態でより多くの戦力を欲するのは普通の事だ。故に狙われる。

この二つの理由から俺は狙われる。最悪だ。

けど、シキがいるから暗殺とか狙われるとか全部解決するんじゃない？

「シキ、今のお前に小月は守れない」

茶髪がとんでもない事を言い出した。

今のシキが力不足でも言いたいのか！？ とかではなく、ジャ○プ

とかでは良くあるレベルアップ的な事を言うフラグを立てやがった。

あ、でも俺に立てられた訳じゃないから平気かな？ まあ頑張れよ

シキ。こういうのは俺、嫌いだから。

「張空弟、お前もだ。このままだとシキと一緒に居られないぞ」

「そうはならない。俺は自分の意思でシキの傍に居ると決めたんだ、例え足手纏いでしか無くても」

……………自分でさらりと言った後で分かるんだけど、むず痒いなこの台詞。中二病炸裂だ。

「なら、お前の意思をアタシが砕いてやるよ」

「は？ いきなり何言って」

途端に俺の体が校舎にぶつかる。

……………って、俺と校舎まで何メートルあると思ってるんだよ！

「がはっ！」

衝撃によって、空気を吐き出す事になった。普通は血だと思っんだが。

っていうかあの茶髪何しやがった!？

「今から模擬戦闘を行って、アタシに負けたらお前は一生シキには近付けない」

「……………んだよ、それ」

「安心しろ。お前は？ 鴉とかいう武器が無いと戦闘力が皆無だという事は知っている。だから、代わりの条件を用意した」

いきなり過ぎて頭がついていけない。

模擬戦闘？ 負けたら一生シキに近付けない？ 代わりの条件？

意味が分からん。なんで登校初日から本当にジ○ンプじみた事しなきゃいけないんだよ。

「10分間に、アタシに触れられたら及第点でクリアだ。あ、だけどアタシの攻撃が当たったから触れたというのは無しだ。攻撃を受け止めるとか、受け流す時の触れるも無し。どこでもいいから、アタシの間をついて体を触れたらクリアとする」

「何だよ、そのふざけた条件。なら胸を触ってもOKってか？」

「触れられたのなら、な」

よっぽど自分の力に自信があるようだ。ああーまったく羨ましい。

こっちは頼もしい力が一つもないのに。

ただし、仮にも力ならある。しょぼいけど、その条件下なら上手く使えばもしくは。

「いいぜ。その模擬戦闘、受けてやる」

俺は茶髪の顔を見て、しっかりと言う。

「それは良かった。断っても、シキには一生近付けないようにするつもりだったからな」

茶髪も同様、俺の顔を見て言う。

「シキ、お前は手出しするなよ」

「分かってる、亜実」

シキは傍観を決め込んだようだ。

まあこれは俺の戦いなんだし、当然の事か。

「合図は？」

「学校には、チャイムと言うものがあるだろ？」

確か今は一時間目の授業中。つまりは授業が終わってからの10分
休みの間に決着をつけなきゃいけないのか。

「チャームが、終わりの合図だ。始まりの合図はシキが出す」
俺の予想と違う事を茶髪が言う。

……………一般人には見せられない事をするわけね、つまりは。
これは、死ぬかも。

「それじゃ、よーいドン」

「徒競走のスタートかよ!？」

思わずシキの合図にツッコミを入れてしまったが、和みはここまで
だろう。

もう模擬戦闘は始まった。

今日と言う日はまったく、最悪だ。

模擬戦闘

途中経過から言おう。開始2分で俺ピンチ！

「うりゃ！」

「あつぶねー！」

茶髪が放つ回し蹴りを後ろに下がりながら避ける。

今まではこれで良かったが、そろそろ避ける事すら出来なくなるだろう。

茶髪は最初の方から大雑把で素人……つまりは俺でも避けれる攻撃を繰り返していた。

最初はその大雑把さから、俺がカウンターを狙った時に一気に叩くつもりだと思っていた。

シキの馬鹿力を容赦なく振るう人間。俺は茶髪をそう認識していた。だから長期的な作戦なんて組まないだろうと高を括っていた。

しかし違った。

俺は攻撃を躲しているうちに、学校の敷地の隅へ追い込まれていた。段々と狭まる可動範囲。前に出ようにも、茶髪の攻撃に一発でも当たればちよつと動けなくなる。

俺のしょぼい能力を使うにも……回数制限がある。

「どうした？ 逃げてばかりで、少しは前に出て来ないのか？」

「負けるギャンブルには誰も乗らねえーよ」

茶髪が攻撃の手を止め、俺に聞いてくる。俺は距離を少し詰めながら、言い返す。

しかし、逃げてばかりは居られない。時間制限がある。

まだ半分以上はあるが、それも躊躇っている間に減っていく。

……やるしかない……

「お前の雑音拒絶についてだが」

俺が覚悟を決めると同時に、茶髪が喋り始める。よりによって俺の興味を惹く話を。

「ちよつと異例なんだ」

「異例……?」

「しよぼ過ぎる、お前の雑音拒絶は」

茶髪の言った言葉に俺は絶句。シヨックを受ける。もうそれは凄くだつて、だつて……だつて！ 自分でもしよぼいとは思つてたけど、しよぼ過ぎるつて……くそつ！

あー、ちなみに雑音拒絶とは、他人の女性の血を飲む事で得る力らしい。

飲んだ時に拒絶した事が間接的に能力になるのだが……もう知った事か。どうせ俺の雑音拒絶はしよぼいんだよ！

「本来　つて、おい張空弟。お前アタシの話を聞いてるか？」

「どうせ、しよぼいよ。しよぼ過ぎるんだよ俺の力なんて。しよぼくて何が悪いんだクソつ！」

「聞け」

「ぐふえらつ!!」

茶髪が突如放つた回し蹴りは、見事に俺の胸に入り胃の中の物を吐きかける。

中身が無いから出なかつたのかも。それが茶髪が加減したか。

いや、加減は無いか。茶髪に限つて。

「本来、雑音拒絶には回数制限なんてものはない」

「……うそ、だろ」

「本当だ。どんなに拒絶の度合いが弱かろうと回数制限なんてものはあるわけが無い」

いや、でも有るんですよ。現に俺が。

「しかしお前の雑音拒絶にはそれがある」

「まあ」

「つまりは回数制限の分、能力が上がっているはずだ」

「ウツソだあー」

「ふざけるな」

「危ねっ！」

俺のみぞうちに踵落しなんてものを茶髪は決めようとしやがっていた。

「お前の能力は何だ、言ってみろ」

「んあ？ 相手の行動を歪める力だよ」

その後、俺は自分の能力の詳細を話した。これが細かいんだ、しょぼい分。

受動的だったり、相手が動かそうとした部分しか効力がなかったり、相手が次の行動をしたら簡単に効力が切れたり。それと一人に一日6回までしか使えなかったり。

「しかし、その力には矛盾が生じている」

「矛盾？」

俺の能力に矛盾が生じている？ さっき言ってた回数制限の事か？

「呼吸。それは相手の行動には入らないのか？ 呼吸は立派な行動だろう」

「……………そういや……………」

前に力を5回一気に使って、オトアの動きを無理矢理止めたことがあった。

あの時、オトアはしっかりと呼吸をしていたが能力もしっかり発動していた。

つまり、どういう事だ？ 俺の力にはまだ制限があるのか？

「しかし、張空弟。お前もバカだな」

「うるせえ」

自分の能力の矛盾点を気付けなかった、その点については言い様がない程にバカだ。

だが、茶髪に言われると

「今の話で、5分は削られたぞ」

「にやんと!？」

んなバカな！ 茶髪は時間稼ぎで俺の能力について触れたのか、そして俺はそんな単純な手にまんまと嵌ったのかよ!!

本当にバカだな俺は!

「残り、3分。どうする？」

茶髪が挑発的に笑う。ムカつく、この女マジでムカつく！

一発ぶん殴らなきゃ気がすまねえ！

俺は一步前に出ようととして、やめる。

無策のまま無謀に突っ込んでいったって、ポコポコにされるのがオチだ。

なら、どうする？ 何か策があるか？

行動を歪める力が使えるのは、俺と茶髪のを合わせて12回。12手、俺が狂わす事が出来る。

そして俺の力は一気に連鎖的に使った方が、影響力が大きい。

茶髪の方で使えるのが6回ってところがネックか。

俺自身に力を使う時は、大概が回避の為になっちまうから一気に使ったって意味が無い……っ？

…………… そうだ、回避以外にも使い道がある。

「おいおい、アタシを睨み付けたって事は変わらないぞ」

「…………… あんたはさつき、俺の雑音拒絶が異例って言ったよな。あれは本当か？」

「ああ、さつきの話はすべて本当だ」

「そうか。俺の雑音拒絶が特殊とか何やらの意味は後で教えてくれるんだろっな？」

「及第点まで至ったら、教えてやるよ」

「分かった。なら今すぐに俺の全力でお前を条件をクリアしてやるよ」

俺は突撃体勢を取りながら、そんな事を言っていた。

さあて、この策は茶髪の馬鹿力に通用するかな？

模擬戦闘（後書き）

さあて、どうし逆転させっかなあ
.....

進展

突撃体勢を取ったなら、次にやる事なんて決まってる。

俺は茶髪に突進するために大きく一步踏み出す。

「……は？」

声を出したのは俺じゃない、茶髪の方だ。

まあ、声を出すのも当然だろう。端に追い詰められ、時間にも追い詰められ、大口叩いて、突撃して来た俺が

一步目で大きく不自然に体勢を崩したんだから。少し重心を前に行かせ過ぎたように。

茶髪は俺の力を知っている。当然、対処法も知っている。だから不意打ちの様に1回だけ力を使ったってすぐに解かれてしまう。

その一瞬の隙で俺が茶髪に触れられるなら良いのだが、残念ながら俺の体はそこまで機敏に動けない。

だから最初にオトアに遭った時同様、力を6回一気に使って相手の動きを丸ごと封じるしかない。

だけど、その作戦も1回を連続でやるだけで、長くは保てない。動かれればすべてが一瞬で消える。相手が俺の力を知らないこそ出来る縫い付けなんだ。

つまり、俺の力が知られてる時点で相手の動きを止める選択肢は全部無効になってしまう。

となると、止めるんじゃなくて方向を変えるしかないわけだ。

6回中の1回を使って、相手の体を真逆に向かせる作戦しか。

一步目で大きく不自然に前のめりになった俺の体は、二歩目でこれまた大きく踏み出し不自然に体勢を持ち直す。

これで茶髪との距離は充分詰められた。元々そんなに離れてなかったからな。

しかし今の俺の状態、重心が宙にあるから攻撃されてもかわせないし、体勢が崩れまくったから至るところが隙だらけで、まるで全力

で殴ってください避けませんからって言ってるみたいだよなー。
茶髪が一步足を引き、拳を構える。

そうだ、そうです、それでいい。出来るだけ全力で、全体重を掛けて俺を殴ろうとしろ。

……いや、俺はMとかじゃないですよ。出来れば全力で殴るとかは止めて欲しいですよ。かなりぶつ飛ぶと思うから。

ただ、全体重を掛けるって事はそれだけ全身を動かすって事で、俺の力が使えまくれるって事ですよ。

俺は断じてMじゃない、受けじゃない。能力は受動系だけど。

……って、そんな事はどうだっていい！

茶髪は全体重を掛けて俺を殴ろうとする。この状況が作れた。あとは脚色ゆがめだけだ。

それで俺の勝ちは決定する。

引いた足を前に出して、腰を捻り拳を突き出そうとする茶髪。

だけど腰を捻ったその時、何かに回されたように不自然に後ろを向いてしまう。

これで茶髪の背中は見えた。距離も詰められてる。あとは手を伸ばして触れれば俺の勝ち。

俺の力を使われた事を理解して、瞬時に拳じゃなくて肘打ちに変えて攻撃しようとする茶髪も一瞬ならあと5回止められる。

しかし俺の体は、茶髪に全力で殴ってもらったために体勢を大きく崩しまくったせいで、バランスを保とうとする手を伸ばすのはとてもじゃないが、無理……と言いたくても、すでに俺の手は不自然に茶髪の背中に伸びてるんだけど。

その後、茶髪の背中を押すような形になって、地面に倒した後に俺が三途の川辺りまでボコボコに殴り飛ばされたの言うまでも無い。

「死ぬわっ！」

シキの炎で蘇生(?)した後の俺の一言である。

「いや、お前がアタシの手を止めるから顔面がモロに地面にブチ当たっただろ？ それで鼻を打った。アタシはとても痛い。その苦痛をお前にも味あわせてやっているだけだ」

「鼻打った程度で、地獄の底と天国の門を見たのかお前は!？」

「多分そうじゃないか？ さあ、次こそは綺麗なお花畑をお前に見せてやるう」

「亜実、そろそろ止めにしてくれ。これでも小月はアタシの大切なペットなんだ」

「なら止めるとするか」

「ちよつと待てや馬鹿力コンビ」

誰がペットだ。っていうかペットだったら殴るの止めるのか。茶髪はどういう思考回路の持ち主だよ。

しかし、シキが助け舟を出してくれなければ今頃俺は死後硬直を始めていただろう。よかった、俺まだ生きてる。

「それじゃ次はシキだな」

「おい茶髪。俺の能力うんぬんはどうした？ ありや出任せだったのか？」

出任せ、という事はないだろう。心肺が行動の範疇に含まれれば、どんな相手にも一瞬しか効果が無い。

でもオトアにはしっかりと効いていた。それとも、効いたように俺もオトアも勘違いをしていただけか？

「ああ、その話だな」

茶髪が真相を語るうと…… ってそこまで大袈裟なことじゃないけど…… 真相を語るうとした時、携帯の着信音が鳴った。

俺のではない。学校に来るときはマナーモードにしているから。シキは持つてるかどうか分からないが、多分違う。

となると、茶髪のか？

学校に来るつてのに、というか今日だって授業があるはずなのに、マナーモードにしないなんて…… 少し非常識だろ。

「あー、はいはい。アタシだけど」

女子用制服のスカートから携帯を取り出し、茶髪は電話に出る。
「つていうかスカートにポケットとかあるのか？ 男だから知らんけど。」

茶髪は電話の応答中に「は？ 何言ってる？」「ボケが！」「今すぐそっちに行く」と多分何かトラブルが起こったんだろっとなーっと思わせる事を言っていた。出来れば俺は無関係でありますように。電話を切った茶髪は俺の方を向き、一言。

「大変な事態になった」

聴きたくないです。知りたくないです。俺は無関係だ。何もしてない。

「死者が電話を掛けてきたそうだ。状況が進展するぞ」

「死者？ 使者？ 四者？」

俺はどのシシヤか茶髪にふざけて問いかける。

だって話をまともに訊く気なんてさらさら無いし、そもそも死者なのかそれとも使者なのか分からなかったもの。ややこしいよね同じ読みの漢字って。

まあ、最後のは完全にふざけて言ったけど。

そんな俺に対し、茶髪はまた一言。

「張空陽介が、電話を掛けてきたそうだ」

進展（後書き）

さて、今回もタイトルとは違って何も進展なんかありませんでした
ねえ。

どうでしょう？

義妹

「張空陽介が、電話を掛けてきたそうだ」

「……は？」

おいおい、今なんて言ったこの女？ 火葬された後に残った灰が電話を掛けてきたって言ったのか？

それとも鬼才くんは実は生きていましたって言ったのか？

ふざけんなよ、おい。

「アタシは今すぐそこに行く。お前はどつする？ 張空弟」

「……ふざけるな。どうして俺が行かなきゃいけないんだ」

茶髪の目を見ながら言った……なんて出来る訳がない。俺の視線は地面に釘付けなんだから。

声も小さくて、それこそ俺の矮小さを現すくらいに小さくて。

「代わりにシキを連れて行ってくれ。あとでシキからどういふ事だったのかを訊くから……」

「小月……」

「分かった……張空弟、お前ははこの後どうする？ 授業に戻るのか？」

「……早退って先生には言ったからな。大人しく家に帰るよ」

そう言っつて、俺は下を向いたまま立ち上がった。

「シキ、早く帰って来いよ」

シキの顔も見ずにそう言葉を掛け、俺は早々に帰宅する事にする。

少しばかり自分の手が、震えていた。

「秋音……？」

玄関には、義妹の靴があった。

アイツ、今日は学校だろ……ってそうか。確かアイツも裏の世界に関わってたんだっけ？

狐狩りの時に、確か会ったよな。

俺は自室に逃げ込む前に、リビングへ行った。

理由は何となく……と言いたいが、不透明ながらもしっかりとした理由はあった。

「……やっぱり帰ってきたの」

「俺が帰ってくるのは予想済みだったのかよ」

少しばかり呆れながら、俺はいつつも座ってる椅子に着く。

「……帰ってきたら、シキが居なかったんだけど」

「シキなら俺の代わりに行って」

「……シキに押し付けたんだ」

「失礼な物言いだ。俺には俺のやるべき事がある」

「……帰宅は使命じゃないと思う」

「張空陽介について、知ってることを話してくれ」

俺は義妹の目を見て頼み込む。

義妹は俺の見つめ返してくる。日本人離れた灰色の瞳と金髪……
実際に本当に日本人か分からない。

7年前に両親が勝手に連れてきて勝手に家族にした少女、張空秋音。

コイツは5年間、張空陽介と家族だった。

俺とはまともな会話なんて一切してこなかったが、兄貴とはある程度しただろう。

ほんの少しでも兄貴の事を知っている。

「……そっちの方が、付き合いが長いじゃない。実の兄弟なんだから」

「情報を集めてるんじゃない。張空陽介が俺の知らないところで何かしてたのかを訊いてるんだ」

茶髪には俺が火種になると言っていた。だけど兄貴は一切俺にはそんな事を言っていない。

俺の知ってる張空陽介だけじゃダメだ。ピースが足りない。

シキと出逢ったあの日、廃墟にて姿もない野郎に俺はこう言われた。

『彼の駒になるか、駒にならずに死を選ぶか』

随分とムカつく言葉だったために一応今でも覚えてる。

彼、というのは言うまでもなく張空陽介の事だろう。鬼才の駒になるか死ぬか。

それにあの声は他にも色々と言っていた。

『今、場所を、教えても、ゲームの、最中だから、立ち入る事も、殴る事も、出来ないよ』

『2年前、ココで、殺された、事に、なっている、人物、でしょ』
殺された事になっているという事は、火葬された死体は偽物で本物は……ゲームをしているらしい。

ゲーム……テレビゲームとかそういう類なら別に一発殴ってやれば気が済むのだが、茶髪に教えていた事が気になる。

姿もない野郎は、兄貴に俺の事を聞いたと言っていた。

その兄貴は、俺が火種になって何かが起こる事を知っていて、俺には教えずに茶髪に教えた。

まさかとは思うが、そのゲームっていうのは

「……何を考えたかは知らないけど、陽には悪党じゃないよ」

「それでいい。そのままお前の中にある張空陽介を言っていけ」

「……今のアンタは、危険だと思う」

「俺の事はどうでもいい。張空陽介の事を

「……死ぬ前の陽にいと同じになってる」

「……俺が兄貴と同じ？」

義妹の一言に思わず聞き返してしまった。

兄弟だから同じ事がある、という法則はこの世には無いが、もしも義妹の言った言葉が正しくて今の俺が死ぬ前の兄貴と同じになっていたとしたら。

今の俺の感情と同じものを感じていた可能性がある。今の俺の感情は……疑念とほんの少しばかりの恐怖。

自分の予想が当たっているのかどうかの疑念と、当たっていた時の恐怖。

兄貴は鬼才。解読者とまで言われていたほどの鬼才。予測を確信に

変えるために義妹に何かを訊いたのかもしれない。

同じ感情っていうのは案外あり得るのかも。

「最後の質問だ。その時、兄貴はお前に何を訊いたんだ？」

これ以上、義妹に質問をしない事を前提にしないと答えそうになかった為、仕方が無くそうした。

それに義妹からそんなに多くの情報が取れるとは思っていなかった。義妹に聞くよりも茶髪に聞いた方が、情報が多く取れる。

義妹に聞いたのは、それこそ何となく。無理して聞く事は無かったが、いるならば聞いておいた方がいいだろう。

「……アンタの事を訊いて来たの」

「俺……？」

「……弟がよく悪夢を見るけどその事について何か相談されたりしないかって」

「悪夢、か……」

……兄貴が何をしかけているにしろ、結局は俺が鍵になるわけか。俺自身にヒントがあるってか。

それとも、兄貴がわざわざ俺を鍵にしたのか。

どちらにしろ、次に聞く相手は決まった。どうやって聞かかと思いつかないけど。

「……死ぬの？」

「お前はいきなり何、物騒な事を言ってるんだ」

俺が席を立とうとした時、義妹が本当に物騒な事を言ってきた。

「なんで俺が、兄貴うんぬんで死ななきゃいけないんだよ」

「……一応、聞いただけだから」

「そうかい。まあ一応、心配してくれたって風にとっておくよ。まったく。毎日ゴミのように思っている相手に心配なさるとは、そ

れほど兄貴は義妹の中では大きい存在だったのかな。

その姿を思い出しただけで、俺の事まで心配させるとは……兄貴は本当に凄い野郎だ。

俺は今度こそ席を立ち、部屋を出ようとする。

「……………だから」

「ああ？」

ボソリと言った義妹の一言が気になって、また俺は立ち止まってしまっ。

そもそも考えてみれば、義妹とこつという風な会話をする機会なんて全て棒に振ってきた。

だからその一言が気になったのかもしれない。

「……………一応、アンタみたいなボロクズみたいでヘタレで金づるで弱々しい人間でも家族だから、陽にみたいに勝手にいなくなったりしないか心配はするよ」

絶句。絶句である。

聞きました皆さん。ツンデレですよ！ 散々罵倒した上で心配なんて、しかもあの義妹が！

きつと変なお薬でも飲まされてしまったんでしょう。それともこれが兄貴の実力か！？

くそっ！ 鬼才で婚約者がいるなんて、そんな奴にこの小月さんが勝てるわきゃ無いっすよ！

むしろ感謝を……………っど何でもない。

それよりも返答をしてやらないとな。仕方が無い。

あれでも一応、俺の家族なんだから。

「俺を兄貴と一緒にするなよ。何も言わずに勝手に勝手に死んだり、家出したりはしなねえーよ。ちゃんとお前に言っからくたばるよ」

「……………陽にいとアンタが一緒なわけがないでしょ。下衆が」

思わずコケそうになる。一言余計なんだよ、一言！ 下衆とは何だよこの野郎！

つたく。結局デレは幻か、兄貴が仕掛けた罠か。

俺は少しムカつきながら部屋を出て行く。

ともかく、いつまでも義妹にムカついてるわけにはいかない。次の相手の事を考えないと。

多分もう、世界は進み始めてるんだから。

義妹（後書き）

タイトルなんかの意味はない

牢獄（前書き）

引き続き、タイトルなんかに意味は無い

牢獄

暗い牢獄。オレにお似合いな場所だ。

そして今現在、オレはそこに居る。行動範囲は牢内のみ。

8月22日。オレは、オレが塵屑ゴミクズと罵った奴と【蒼い死神】によって昏睡状態にされた……つまりは二人に倒された。

その為にオレは今、どこにあるかも分からない牢獄にブチ込まれ、捕縛されている。

禁錮刑なのか、それとも処刑までの間だけこの状態なのかは知らないが、今のオレには特にする事も何もない。二トと同類だ。

オレの力……空間を歪める力を使えば脱獄など簡単に出来るだろう。しかし脱獄した所で、オレには特にやる事が無い。

なら世界平和のために、オレはこの牢獄で大人しくクタバルとするか。

「起きてる〜？」

能天気な声が前方からする。しかし確かこの牢獄内にはオレ以外の人は居なかつたはずだ。

なら、一体誰だ？ この癪しのがみに障る声を出してるヤロウは？

「ね〜、起きてるの？ 篠守音亜君？」

「……………一体、誰だオマエ？」

オレのフルネームまで知ってるなんて。このヤロウは本当に一体誰なんだ？

「あ、起きてたか。よかったよかった」

「誰だつて訊いてんだよ、答える」

「おー。さすがに光も差し込まないこんなジメジメした所にいたら音亜君の悪そうな口調も直つちゃうんだ。それとも元々はそういう口調だったり？」

「誰だつて訊いてんだろが、答えるよ」

「いやー、暗いから顔見えないね。本当に君は篠守音亜君なの？」

「……用が無いなら、帰れ」

このヤロウと話しているとムカついて仕方ない。さっさと消えればいいのに。

「用ならあるよ。篠守音亜の扱いについてね」

「んア？ オレの扱いだア？」

「おお！ 本物だ本物。それじゃ君の命について話そうか音亜君」

「……明日、死刑つて訳か？」

「それなら明日来てるよ。そうじゃなくて、君は場合によっちゃ釈放ね」

「……今なんて言った？ 釈放？ アホか？」

「音亜くん、ちよつと協力してくれない？ 僕らに」

「お前らにコキ使われると？」

「そうなんだよー、困った事に即戦力が欲しんだよ」

「……壊すのは構わないが、何が起こったんだ？」

自分で言うのもなんだが、オレは特級の危険人物だ。牢獄の外へ出すのは言語道断。

しかし、それをしなければいけないという事は、それほどの事態が起こったという事だ。

オレがココでのんびりと捕縛されてる間に、外で一体何が起こったんだ？

「解読者つて知ってる？」

「張空陽介の事か。聞いたことがある程度だ」

「そう……、その張空陽介が宣戦布告してきたんだよ」

「宣戦布告？ それがどうした？」

その程度じゃオレを出す理由としては不十分過ぎる。

たかが一人が戦争をしたいっていう宣言をしたところで即戦力を必要とはしない。

「その宣戦布告が普通じゃない点が三つあるんだよ。一つは張空陽介は2年前に死んでいる事。一つはこっちに攻撃される時を細かく説明してきた事。一つはそれが予言である事」

「意味が分かるように言ってみる」

「張空陽介はすでに死んでいる事になつてゐるのに、こっちに電話掛けてきて、相手がそっちに戦争仕掛けるよつて忠告してきたつてわけなんだよ」

「それを宣戦布告とは言わねえよ」

「そうかな？　戦争が起こるよつて言つてゐるから宣戦布告だと思つたんだけど」

「それで、その予言通りに事を進めない為にお前らはオレを出すのか？」

「ま、そういう事だね。なんせ物凄く血生臭い事をやるつてんだから場馴れしてる奴が必要でしょ？」

「それで即戦力つてわけか」

「メンドウな事だ。まあいい具合に暇潰しにはなりそうだが。」

「牢獄を出るにあたつて、色々制限を受けるけど……それでもおk？」

「まともな英語で了解を取れ。協力はしてやるが」

「そうかいそうかい、そりゃ良かった」

「代わりに条件がある」

ただ一方的にオレがコキ使われるのは癪に障る。

こつちだつて条件つてものをだしてやるうじゃねえか。

「条件？　何、言つてごらん」

「週休二日。ボーナス有り。昼食休憩2時間。残業なし。勤務時間は9時から5時まで。時給は5000円」

「ええーと…時給5000円の8時間労働が週5日の4週間で…80万!？」

「安い方だろ。これでも妥協した」

雇用保険に入れないんだ。これが最低ラインだろ。

「別に日給4万の20日労働でも構わない」

「言い方変えただけで結局は月給が80万じゃん!」

「こつちは命が掛かつた仕事をやるんだ。それで、オレを出すのか」

？ 出さないのか？」

「雇用主と相談してみるよ……」

その言葉を最後に会話は終わった。

そしてムカつくヤロウは出ていき、牢獄内は静寂を迎えた。

別に外に出たいとは思わない。むしろ一生涯この牢獄に捕縛されてもいいと思っている。

わざわざ外に出てやる事などオレにはないのだから。

ただ、この暗い牢獄内にいる特級の危険人物に話を持ち掛けてきたという事は。

このままだと世界は大きく変動するという事か。

牢獄（後書き）

こちら辺からおかしくなってきましたんで、説明されてない事が説明されてる事になってたりそんな事があるんで、そういう時は一応報告してくれたらいいな。
まあ読者なんていないのだけど

死の代わりに……（前書き）

引き続きまくり、タイトルなんかには意味は無い

死の代わりに……

「ただいま」

「……おかえり」

夕食中にシキがやつと帰ってきた。

行ったのが10時前だから、随分と遅い帰宅である。

「ただいま」

「……おかえり」

しかし、義妹とシキ。お前らそのやり取り何回目だよ。シキが帰ってきてからずっとやつてるよな。

飽きないのか？ それとも何かの信号なのか？

俺は夕食を黙々と口に運びながら考える。

って違う。俺が考えてたのはそんな事じゃない。だいたい信号ってなんだよ。

「ただいまっ！」

「……おかえり」

まったく、なんで飽きないんだこの二人は？ もう何が面白くてやってるのかさえ忘れたとかか？

まあ、いいや。女の子同士の事に男は首を突っ込みませんよ。

さて俺は自分の考え事を続行させ

「ただいまと言っているだろ、何故反応しない小月！」

「うおっ！ 痛っ！ いきなりどうしたんだよシキ」

「お前の代わりにわざわざ行ってやって、帰ってきたら無視か！

随分な態度を取るじゃないか、小月のくせに！ 勸善懲悪だ、今す

ぐ天罰を与えてやる」

いきなり俺の首を背後から腕で締め上げてきて喚いているシキ。

「っていつかお前、勸善懲悪の意味分かってんのか？」

「ペットに主人が誰だかを教えるための躰けをする。そういう意味だろ？」

「全然違うわ！」

「ともかく、お前に罰を与える事に変わりはない！」

段々と締め上げられていく俺の首。遠のく意識。見えてくる綺麗な綺麗なお花畑と白い服の人達。

今日は首締めとかに嫌な縁がある日だな。

さて、こういう時はなんて言えば拘束を解けるのだろうか？

誰か知っていたらここまでハガキを送ってくれ………って、さっそくお便りが！

よし、そのままやってみよう。

「シキ…む、胸が当たってる」

「アタシを侮辱して何が楽しいんだコツキイイツ！！」

さらに締め上げる力が強くなる。このままだと窒息より先に首が折れる。グツキつといっちゃう。

何だ、何が悪かったんだ？ 棒読みだったからか？ 棒読みだから

失敗したのか？

ってヤバい！ 苦しい、頭に血が溜まってきた、呼吸が出来ない、

首痛い、死ぬ！

くそっ！ 次のお便りは……… 『何でも言う事聞くから』、か。

ダメだ、危険すぎる。

俺は今日ようやく残金20円の生活から脱出したというのに、そんな事を言ったらたちまち福沢さんがどこかへ消えちゃう！

そんな事をするなら自分の命を捨てた方がマシだ！

「シキ、何でも言うこと聞くから離してくれ。頼む！」

…… あつれー？ おかしいな、誰だろこんな事を言ったのは？

まさかだとは思っけど、俺の口が命欲しさにそんな事を言ったのかなあ？

ははっ！ そんな事は

「何でも？ 何でもとはどの程度までなんだ小月？」

「何でもって言ったたら何でもだ！ ケーキを買えでも洋服を買えでも逆立ちで校庭10周でも遊園地に連れて行けでも水族館に連れて

行けでも俺に出来る事は何でもする。言う事聞くからこの腕をどけてくれえ！」

おいおい我が口よ。いくらなんでもシキが力を緩めた瞬間、命惜しさにそこまで言う事は無いだろ。

さすがにやり過ぎだし、責任取るのは俺だし、いいよな口は何でも言い放題で！

しかしまあ、このままだと案外死なずに済むかも。

「本当に、何でも言う事を聞くんだな？」

「はい、そうでございます」

媚を売るな、俺の口。いい加減に俺の支配下に戻るんだ。

お前は誰の口だ？ 俺の口だろうが。戻って来いよ口。

「そうか、なら」

口が媚を売ったお蔭で、首がボツキリ折れる事は無くなったようだがシキよ、いい加減俺の体から離れる。腕の力を抜いただけで俺から離れてないじゃないか。

これじゃ、シキに何かを言われる前に自室に立て籠もって出てきた時には何もかも忘れたふりをする作戦が実行できないじゃないか。

「明後日、デートをしたい」

「嫌だ。っていうかダメだ」

おお。口がやっと俺の支配下に戻ってきたか。

「何故だ、さつき何でも言う事を聞くって言ったじゃないか」

後ろから顔を出してきて、息が当たるほど近い距離でシキが俺を見てくる。

っていうか俺に体重を乗せるな。それと当然だけど顔が近い。ちゃんと離れてから抗議しろ。

「俺に出来る事は、な。明日も明後日も学校なんだ。だから無理」

「学校とはそれ程に大事なのか？」

「ああ。学校とデートを天秤に掛けたら学校の方に傾くほどだ」

何故だろう。胸がズキッと痛んだ。

嘘を吐いた時に今までこんなもの感じた事は無かったのにな。

大体、俺の人生においてデートなんて甘美な言葉が出てきた展開があっただろうか？ いや、ない……。

「……アンタ、何言ってるの？」
突然義妹が口を挟んできた。

おっと、俺の口から洩れていたのか今の心境が。それはちょっと恥ずかしい……。

「……明後日は土曜日よ」

「え？」

「……土曜日は学校が休みでしょ」

「本当か！」

シキが目を輝かしながら義妹の方を見る。

考える俺。考える！ まだ逆転の一手があるはずだ。

「えっと……私立校だと、土曜日も学校が」

「……アンタは公立でしょ」

チエックメイト。俺の完全敗北である。

くそっ！ シキには口で勝っても義妹には未だ勝てないのか俺は！？

「それじゃ、明後日デートだぞ小月！」

「そーですね……」

俺の背中で騒ぐシキ。その俺の背中には暗い影を背負っていた。

いや、俺だっけ喜んでべきことですよ。普通なら。

けど普通に考えてデートって事は、あのデザート死神の昼食代を支払わなきゃいけないのですよ？

デザートだけで俺の財布を軽く……っっていうか財布の意味を無くしてくれるようなシキの相手を一日掛けてしなきゃいけないんですよ？

一日中、シキに振り回されるんですよ？

……。
……。
……。なんかそれっけいつも通りな気がしてきた。

ともかく、明後日以降に俺の財布が意味を成している事をただただ祈るばかりであった

魔神（前書き）

タイトルなんかに（ry

魔神

「あ、デートうんぬんとかで忘れてたんだけど」

夕食後、俺はテレビの動物番組に夢中になってらっしゃるシキに話しかける。

「ん、何だ？ 出来れば後にしてくれ」

「魔神と話がしたいんだけど、どうすればいいか知ってる？」

義妹と話を終えた後も、夕食前も夕食中もずっとその事を考えていた。

死ぬ前に兄貴は義妹に俺の悪夢について聞いたそうだ。その悪夢に一番深く関わっているのは間違いない魔神だろう。

俺が悪夢を連続で見えるようになった時と魔神が失踪した時が一致していることなどの根拠すらある。

最悪、兄貴が魔神に何か仕掛けている可能性すらあるから、俺は魔神と話さなきゃいけない。

まあ別に義務じゃないけど。

「魔神だと！？ バカかアホか血迷ったか小月！ なにか悩み事があるならアタシがしっかり聞いてやるから魔神だけは止めておけ！」画面の向こうの白くまの赤ちゃんを見入って今まで一切こちらを見なかったシキが、突如こちらに視線を移して、ぎゃあぎゃああと騒いでいる。

そこまで魔神が嫌いなんですか、シキさん……。

っていうか俺は自分の中にいる存在にしか悩み事を打ち明けられないほど話し相手が少なく寂しい奴だと思われているのか！？

「別に血迷っても悩み事があるわけでもねえーよ。ただ魔神に聞きたい事があるだけだ。っていうかお前はそこまで魔神が嫌いなのか？」

「嫌いという言葉のみでは、というよりもこの世にある言語のみでは言い表せない程にアタシは魔神が嫌いだ」

そこまで……一体、魔神とシキの間では何があつたんだよ。

魔神の方は、そこまでシキを嫌いそうでもなかったんだけど……。あ、でも最初に俺が魔神に会った時にはシキと口論してたっけか？

「いいか小月。魔神は鑑以上にヤバい奴だ」

鏡師匠と比べてヤバい奴って……つまりはそういう事を魔神にされたのかシキは？

本当にシキと魔神の間には一体、何があつたんだろうか？ 少し気になる。

「そもそも鑑をあんなのにしたのは魔神だ！」

「なんと!？」

「しかも再会した時にはアタシにあんな悪夢を見せつけてきて……。あ、ヤバい。シキがガクブルと震えてらっしやる、しかも涙目だ！」

これは相当にヤバいぞ魔神ってやつは！

「小月も二度とアイツとは関わるな！ お前も芯まで犯されて元に戻れなくなるぞ！」

「そ、それでも俺は魔神ともう一度話さなきゃいけないんだ」

涙目でこちらを上目遣いで見てくるシキに、俺は上ずった声と恐怖で引き攣った顔で答える。

正直な話、いやです。話したくないです。芯まで犯されたくありません。

鑑師匠には憧れてますけど、あそこまで道を究めたくありません。

それでも俺は魔神と話さなければいけない運命なんですコンチキシヨウ。

「そうか……そこまでお前の意志が固いのなら止めはしない」

「つまり俺はシキに見捨てられたって事が……」

「魔神とは寝れば会えると思う」

「……え？」

寝れば会える？ 俺がほぼ一日中考えていた答えはそんなにあっさりとしたものなのかよ!？」

「確証はないが……多分、お前が会いたいと思っっているなら魔神も

出て来るだろう。夢の中に」

「そうか……………なら、もう寝るわ。おやすみ」

「ああ……………乗っ取られるなよ、小月」

最後に不気味な一言を掛けられて、俺は自室へ直行。そのままベツトに倒れこみ、眠ってしまった。

白と黒とがきつぱりと二つに分かれ、その間に透明な鑑がある世界。俺は白側にいて、黒側には腰まで伸ばした白髪で顔を隠している少女……………魔神が居る。

互いは鏡越しに互いの姿を見合っている。

「それで、何の用なの？」

「お前の事について知りたい」

最初に話し掛けてきたのは魔神。俺は質問に答えるように言葉を投げかけた。

「最初に会った時に言ったでしょ？ 私は二度と自分のことについて言いたくないって」

「なら、どうしてお前は俺の中に居る？」

「それも最初の時に言った。貴方自身、本当は知っているって」
そんなの覚えてねえーよ。ってというか質問に答えるよ、俺の中に居候してるくせに。

「じゃあ、悪夢はお前が見せてるのか」

「そうだけど？」

「……………8年間365日毎晩欠かさずに合計連続2920回も見せた意味は、あるのか？」

「嫌がらせ？」

くそっ！ 鏡が邪魔で俺の拳が魔神に届かない！ 俺は今すぐはこのふざけた性悪魔神を殴り殺さなければならぬ使命と本能と宿命と感情と運命と理性があるというのに！！

大体、可愛らしく首を傾げて言う辺りが一番ムカつく！ ああ今す

ぐに殴り飛ばして次元の彼方へ葬り去りたい！」

「悪夢には意味が無いよ。あれは副作用みたいなものだから」
魔神の一言によって俺は冷静さを取り戻す……わけもなく、拳で何
度も鏡をぶつ叩きながら魔神の言葉を聞くことにした。

「あの悪夢は、私が貴方の中にいるから見るようなものなの。だから悪夢自体に意味は無いようなものだし、私の意思も関係ないの」
「だからどうした！」

中々壊れないこの鏡。強固ってわけではないのに。

夢の中の物だからか？ だから壊れないのか？ 壊れなきゃ魔神を殴り殺せないのに。

「張空陽介が張空秋音に実際に聞きたかったのは、今のこの状態って事」

「……………この状態？」

とうとう俺は鏡を壊すのを諦め、魔神の話を書くことにする。

「私が貴方が見る悪夢に干渉して、こうやって会話する事。その状態であるかどうかを張空陽介は知りたかったの」

「どうして？ つーか今の状態だと何かが起こりやすいのか？」

「私の力を貴方が簡単に借りられる」

……………ああ、そういう。

狐狩りの時、俺は今のこの状態で魔神から力を貸された。俺が暴走する結果だったけど。

でも、もしもガキの時から魔神とこの状態で話していたりしたら暴走しない程度の力が借りられたかもしれない。

兄貴は俺がそういう状態かどうかを知りたくて、義妹に聞いたわけだ。

俺が義妹とまともに話しているわけが無い事は知ってたけど、一応の確認で兄貴は聞いてみたわけか。

つまりあの野郎は元々俺を引き金や駒にするつもりだったってことかよ。

……………それじゃ、兄貴は何に恐れてた？

義妹は今の俺と死ぬ前の兄貴が似ている心境だと感じた。予測と恐怖。

予測はもう検討がついた。俺が戦力になるかどうかだ。じゃあ何に恐怖していた？

俺が戦力にならない事？ それとも俺が戦力になる事？ それとも別の何かか？

「……………まあ、そんな事より」

俺の思考が行き詰ったところで、魔神が話題を変えるように話し掛けてきた。

一体なんだよ、俺は考え中なんだよ。魔神なんかと雑談する気なんて

「ねえねえ、シキとのデートはどこ巡るの!？」

「黙れよこの性悪魔神があ!！」

さらさら無いが、一応釘を刺しておく事は必要だ。

というより何でその事で魔神が首を突っ込んでくる？

っていうか何で前髪で顔が隠れてるはずなのに何で俺は魔神の目がキラキラしてる事が分かるんだ!？

一時的に透視能力を身に着けたか？ それとも目の輝きが尋常じゃないからか？

「私はね、買い物とかより遊園地とか動物園の方がシキの可愛い顔が見れると思うの!！」

限界まで身を乗り出して魔神は意見する。

その際に顔を隠している前髪がちよこつとばかり移動して、眩しいくらいの金色の目の輝きと嬉しそうな顔の綻びが見えた。

何を嬉しそうにしてるのか？ 多分、遊園地とか動物園とかに行つた時のシキの顔を妄想して喜んでるんじゃないか？

前にあんな顔をした鑑師匠を見た事がある。確か初めて会った日、シキに巫女服着せて撮影してた時も一瞬あんな顔をしていたような気がする。

「そういえば、さっきの涙目のシキも可愛かったよね 私あれで

「ごはん10杯はいける」

「黙ってくださいお願いします」

マジ引きである。もう敬語である。っていつかさっさと目覚めたい、これって一応夢なんだろう？

そういやシキが鑑師匠をあんなのにしたのは魔神だとかなんとか言っただけど、こりゃ比じゃないぞ。

この魔神は生粋のシキマニアだ。鑑師匠を上回る。シキの天敵だ。

「あ、でも買いい物でもいいかもしれない！ 可愛い服着て笑ってるシキが見れちゃうきゃー！」

「俺、もう聞きたい事は聞けたんで帰りますね」

「何言ってるの。私が何で夢に出てきたと思ってるの？」

「……一応聞いてみますけど、何故でしょうか？」

「私のシキギャラリーの拡大の為のデートプランを貴方に実行させるため」

「キャラ崩壊が著しいんだよこのクソ魔神が！」

なんだよこの変態、誰だよこの変態！ この変態、廃棄汚染物と同じ場所に捨てておけ！

「私は元からこうだった。それを隠していただけ」

「俺が最初にココに来た時、シキと口論してたよな！？」

「だって怒ってるシキは可愛くないんだもん」

「だもん！？ もう喋るな！ これ以上キャラ崩壊するな！ とにかく黙ってくれ！」

「大体、私が狐狩りの時とかに貴方に力貸したのだから9割方シキの為だよ」

「俺の事は1割しか考えられてないのかあ！？」

「大丈夫。その時は1割たりとも考えてなかったから」

「出てけ！ 今すぐ俺の中から出て行け！」

「でも一応、言葉上だけは貴方の為的な風にしたつもりだし、それに今ではちゃんと貴方の事も思ってる」

「また何で？」

「このまま貴方とシキが付き合つて、二人だけの時間とかを過ごしてる時も私はココからシキの表情が全て見れる！ だから私は貴方とシキの恋路を応援してるよ」

「やっぱり出て行けえ！」

これが魔神の本性か……シキマニアの頂点だな、もう。

「っていつか俺とシキが付き合つとか、有り得ないから」

「何言ってるの？ 私が貴方の体に乗っ取つても、私は貴方とシキの恋路を応援するって言ってるんじゃない」

「お前はそこまでしてデレシキが見たいのかよ！」

俺の背中に悪寒が走った。

『乗っ取られるなよ、小月』

何故だろう。シキに最後に掛けられた言葉が突然フラッシュバックした。

「さあ、こつちにおいで。こつちにはロリシキの映像があるよお」

「俺とお前を一緒にするな！」

黒側から何本もの触手的な手がニョロニョロと俺に向かってやってくる。

その触手は俺の体に絡みつき、力強く黒側へ俺の引きずっていく。

確か、俺は狐狩りの時にあの黒側に呑みこまれて暴走した。つまり

あの黒側は魔神の領域なのだろう。

嫌だ。黒側に行きたくない。魔神と同類に成り下がりがりたくない！

俺は必死に抵抗をするが、絡みついた触手はその程度では解けもしないし、時間稼ぎにすらならなかった。

「さあ、今こそシキが私のものになる時だ！」

「それに俺を利用するなー！」

俺の叫びも抵抗も虚しく、俺は徐々に黒へと呑み込まれていく。

最後に、急に真っ蒼に染まる世界とどこかから俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

魔神（後書き）

多分、ここら辺から辻褄がさらに合わなくなると思っているのであしからず。

放課後（前書き）

だから、タイトルに意味はない

放課後

「つてあれ？ まだ俺が在る？」

実におかしな一言と共に俺は目覚めた。

俺の視界には、いつもの天井とシキの心配に俺を覗く顔だった。

「大丈夫か、小月？」

「ああ……どうしてシキがここに？」

起き上がり、シキに問う。

「心配で様子を見に来たんだ。そしたらお前が寝言で『キャラ崩壊が著しいんだよこのクソ魔神が！』とか『お前はそこまでしてデレシキが見たいのかよ！』とか、拳句の果てには体を揺らして『それに俺を利用するなー！』と叫び出してな。それでアタシが小月を燃やして、無理矢理起こしたんだ」

「それは助かった……ありがとな、シキ」

俺はまたシキに助けられちゃまったのか。

などと感傷に浸りたいが、魔神に取り込まれそうになった恐怖でまだ体の震えが止まっていないのが現状だ。

「つーか、もう朝なのか？」

「そうだが？」

……夢を見てると、若干自分の体感時計と実際の時刻とに時差が出る事ってしょっちゅうある。

最近、死んだら朝という感覚だったから何となくズレが大きい。

デッドエンド慣れしすぎたか。

「取り敢えず、朝飯でも食って落ち着くか」

「大丈夫か小月？ 腰が抜けて足が震えているが」

「ちよつとお前が魔神を嫌いになる理由が分かっただけさ。出来れば肩を貸してくれ」

言われなくても自分でも分かっているさ。今の自分がとてつもなく情けないってことくらい。

今日の朝食は、誰かの寝言がうるさかったせいで熟睡できなかった義妹が適当に作った料理だった。

実に美味かったし、量が最適だった。これなら吐く事もない。幸せだ。

そして学校である。

よくよく思い出せば、古瀬に追いかけて昨日は早退した。

教室に入った途端に奇襲されないかと警戒していたが、そんな事はなく、古瀬は茶髪のところ溜まっている生徒の一団の中に居た。

………そういや、茶髪は俺と同じクラスだったっけ。

つまりは、兄貴は俺と同年代の婚約者が居たという事になる。ああ恨めしい妬ましい。

それとも茶髪が年齢詐称してこのクラスにいるとか？

まあ、1歳や2歳違う程度ならバレやしないと思うけど………それでも恨めしい妬ましい。

ともかくそんな気分が始まった新学期2日目は別に大したことも起きず、むしろ起こったら困る、平穩に平凡に平和に授業を受け、昼飯を食い、午後の授業を受け、掃除をし、下校となった。

そういや、俺って平穩に平凡に平和にを掲げていたような気がする。シキと出逢ってからそんなものは遠い星の彼方へ消えてしまったが。

俺は教科書やらを鞆に入れずに机の中において行ってる為、鞆には筆箱と弁当とその他学校には持ってきてはいけない物しか詰まっていらない。

俺はその無駄な鞆を持ち、教室を見渡す。

教室には朝と同じく茶髪を囲む一団が残っていた。お前らまだ聞きたい事があるのかよ。

その一団の中に古瀬の姿は無かった。

まあ、アイツが先にどこかに行ったんなら教室に残って雑談をする

相手も居ない。

なんせ雑談の内容が残念なものばかりだから、普通の友達とは話せ合えないんだよなあ。

そんな事より、俺もさっさと帰るか。

そう思い教室を出ようとしたところで、

「小月、一緒に帰ろうではないか」

災厄が到来した。茶髪がよりもよって話し掛けてきた。

ざわめく一団、どこからか感じる関係を探るような視線、そして古瀬に電話を掛けて現状を知らせようと携帯を出す音。

俺がやる事なんて一つ。

無言と全力逃走を胸に掲げ、貫き通す事のみ。

「お前は俺を死に至らしめたいのか？」

「すまない張空弟、アタシもあの集団に困っていたんだ」

あ、小月から張空弟に戻った。

まあ、確かにあの一団はウザかったろう。ある程度同感できてしまう理由だからこれ以上責められない。

「それにお前に話したい事がある」

「俺に？」

「お前、シキから昨日電話の詳細は聞いたのか？」

「……………すっかり忘れてました」

自分なりに探りを入れてました、なんて事が言える程成果は無い。だからココは素直に言うとしよう。別に本当に忘れてたわけじゃないんだからねっ、と言った方が効果的だったろうか？

「それに、お前の能力について」

「ああ、そっぴや聞いてない」

「あと最後にシキの事について、お前に話が聞きたいシキについて？ どういう生活を送っているとかか？

「ともかく、話す事が多い。どこか座って話せるところは無いか？」

「ん……………ファミレスとかなら近くに有るけど」

「ならそこでいい。案内しろ」

茶髪はそう言い、俺の後に着いて来る。

そついや、茶髪から兄貴を事を聞いていない。これは聞けるチャンスかも。

って言いたいけど止めておこう。一応茶髪の婚約者だった人間を俺は疑っている。その疑いを確信づけるための質問なんてあんまずベキじゃないだろ。

まあ、こんな心配は無用なほどにガサツな人間かもしれないけど。

内側の行動（前書き）

何度言っても収まらない、タイトルなんかには意味は無い

内側の行動

ファミレスで俺はドリンクバーを、茶髪は肉の類の料理全てを注文した。

俺は最近思う。裏の世界に関わっている女性は大食漢になる呪いでもかけられてるんだろうか？

シキシキ義妹シキ茶髪シキ。絶対に食ってる量が胃袋の大きさと合っていない。

「それで、昨日の事だが」

「何言っただ、張空陽介は？」

俺はコーラを啜りながら茶髪に問う。

茶髪は、両手に骨付きチキンを持ち、そのまま食いながら答える。

「またもや予言をしてくださったよ」

「予言？」

「こちらが何時何処で誰が誰に奇襲を受けるかという、予言だったよ」

「……………意図は？ 予言をわざわざ伝えに来た意図は？」

「そんなものを言っと思ったか？」

「そうか……………」

兄貴は今、どこかで生きている。そのどこかで誰かとゲームをしている。

そのゲームの内容は多分だけど、戦争。

多分、今回の予言はそのゲームの中での兄貴の一手。

相手の手を錯乱させるためか、潰すためか、相手に対する攻撃か。どれにしろ、今は兄貴の手の通りに流されるしかない。

「おい、どうした張空弟？」

「……………何でも無い。それより俺の能力についてだ」

ともかく今のところは兄貴は味方らしい。なら今のところはこれ以上疑わなくていい。

今のところは。

それよりも自分の能力についてだ。

なんか他の事を考えすぎててずっと忘れてたが、これもこれで謎の塊である。

相手の行動を歪める力が俺の能力なのだが、まあしょぼい。

受動的だし、回数制限あるし、相手の動かそうとした部分しか効果が無いし、効果も簡単に切れる。

その上、能力に矛盾まで発生している。呼吸などは行動に含まれないという矛盾。

まあ、別にそんな俺的にはよろしいのだけど、一応茶髪はその矛盾の答えをしってそんな事を言いやがった。

「まあ、アタシの予測なんだが」

予測かい。答え知ってるんじゃないのかい。

………とは言いたいが、さすがに他人の能力の全てを知ってますなんて図書館みたいな奴には見えないし、兄貴のような何でも解けちゃいますよという化物にも見えない。

だけど茶髪は矛盾に気付いた。その上でその答えを推測した。

天才では無いんだろうけど、無知な凡人からしたら凄い事である。

「お前の能力は、外側の行動以外の……内側の行動も歪められるんじゃないか？」

「内側の行動？ なんだ、それ？」

多分だけど、茶髪の言ってる外側の行動って言うのは目に見える行動の事を指してるんだらう。

となると内側の行動って言うのは……心の行動って言う事か？

「そうだ。心理的な部分も歪められる可能性がある」

「行動原理っていうか……動機を歪められると？」

そんな事が出来たら強力過ぎる。動く理由をこっちで勝手に歪められるんだから。

「お前の実際の能力は、相手の外側と内側の行動を歪める能力。しかしその強力さにお前の拒絶の度合いがついていかずに、回数制限

や効力の短さなどの欠点が出てきたとアタシは思うんだ」

「確かに……それなら道理が通っているような気がしなくもない」
俺の拒絶の度合いは小さい。だから能力もしょぼいと思っていた。
しかし相手の行動理由まで歪められるんなら、このしょぼい能力も
最強能力に早変わりだぜ！

……と、言いたいのは山々なんだが。

「どうやるんだ、それ？」

「知らん」

「ですよねえー………はあ」

受動的で相手の動かそうとした部分しか歪められない、という欠点
は有効だ。

相手の心理状態が分かる様な天才さんじゃない俺に、この能力って
……。

「しかしまあ、宝の持ち腐れだな」

「言うな！」

まったく茶髪の言う通りである。

結局のところ、俺の能力がしょぼいままという事は変わらない。

何だよ、期待させやがって。結局はこういうオチかよ。

「最後に、アタシからも聞きたい事があるんだが」

「そういうやシキがなんたら言ってたな」

いつの間にか、頼んだ料理を全て食い終わっていた茶髪に俺は若干
引きながら話を聞く。

「明日、シキの奴に特訓をしようと思ったんだが用事があって無理
だという」

「へえー」

「用事は張空弟、お前とのデートだと言ってるのだが」

「そついや、そんな事もありましたねー」

つていうかデートうんぬんはサボりの為の理由だったんかい。

わざわざ面倒な理由を立て並べやがって、お蔭で俺は魔神に吞まれ
かけたんだぞ。

「つか茶髪に対してデートなんて言い訳したってサボれるわけが無いだろ。」

それとも俺の考え方が少しおかしいのか？ 女にとっちゃデートは物凄く大事な用事の部類に入るのか？

「本当なのか？」

「ええ、まあ」

「シキの奴に無理に言わされてるわけではないのだな？」

「微妙ですが、まあ話を合わせてるとかではないです」

「そうか」

何だ、茶髪の奴。こんなに詳しく聞いて来て……もしかして、こいつもシキ病患者の一人か？

魔神に芯まで汚染された一人だったのか？

「ならば、仕方ないな。シキとの約束だから」

「約束？」

どうやら茶髪はシキ病患者では無いみたいだ。しかし約束って何なんだ？

「幼い頃にシキと約束してな。お互いの幸せには邪魔をしない、と」

「何なんだよ、そのおかしな約束」

「そうしないと陽介との時間が作れなくてな」

なんだ、のろけ話だったのか。ああーあ、気分悪くなってきた。

気分悪いし、帰ろうかな？ いや帰るべきだな。うん。

「んじゃ俺、帰るわ」

そのまま俺は席を立ち、外に出る。

さあて、茶髪の野郎がドリンクバー代請求する前に家に帰るとするか。

っていうか、自分のドリンクバーの料金すら払う気が無いって……

俺ってつくづく器の小さな男だな。

いや、違うか。

明日は、あのシキに大量に有り金を食われる日なんだ。この位の節約はしなければ。

.....節約？節約なのかこれって？

内側の行動（後書き）

一応、このクソ小説を読んでいらっしやる御方たちに言っておきま
すけど。

あと3日間は不定期に一日一話更新するんで。

その後の更新は、宿題という悪夢に立ち向かうか現実逃避するか
よってきまるので。

多分、現実逃避して最悪な事態になって更新出来なくなると思っ
んで

デート当日(前書き)

タイトルなんかの意味は無い

デート当日

さて来ましたよ、土曜日です！

デートですよデート！ シキとデートです、俺の有り金は多分全部なくなりませう！！

なんか自ら破滅への道を突き進んでる時って、気分がおかしくなっちゃうな！

あはははは、楽しいなー！

しかし、そろそろ通常運転に戻らないと。暴走しすぎなのは良くないぞ。

よし。それじゃ、

「何でお前がいるんだよ、秋音！」

「……さあ？ むしろこつちが聞きたい」

本当に、何故自分が今ココにいるのかを義妹は知らないらしい。

「……シキに拉致られた？」

ありえそうな話だから闇雲に否定は出来ない。

しかし義妹をつれてきてきてシキに何の得があるんだ？ そもそも俺とのデートなんて死んでも嫌だったとか？

義妹をつれてきてシキが得する点と言えば……。

・俺が論破出来なくなる。

・正しく歪んだ知識を教えてくれる。

この2点くらいで、他に得になるような事は無いはずなんだが。

「待たせたな、二人とも」

そんな事を考えていたら、遠くからシキがやってきた。

ちなみに今俺達が居る場所は最寄の駅で、何故そこに居るかと言われれば、そこで待ち合わせするなんて事をシキが言い出したためだ。デートは待ち合わせかららしい。どこで学んだそんな知識。また義妹ですかい？

「それでシキ、今日はどこに行くんだ？」

「動物園！」

……よかったね魔神さん。アンタが直接やらなくても、シキの気持ち
ちは最初から動物にあつたみたいだよ。

どうせこの前に動物番組に影響されたに違いないけど。

でもここら辺の近くで動物園なんてあつたか？

近くで俺が知ってる動物園と言えば……………。

「上野か」

「……遠いじゃない」

義妹が冷たく俺を睨む視線が痛い。心にズツサリ突き刺さる。

っていうか仕方が無いじゃん。俺が知ってる動物園なんて、上野と
旭山しか知らないんだから。

その二つのうちのなるべく近い方を言っただけ、まだ良いじゃねえ
ーか。

「さあ秋音。近くの動物園に案内してくれ」

「……ようはナビ代わりに呼ばれたのね」

秋音が大層深いため息を吐く。まあ、俺じゃ役に立ちませんからね。
そんな訳で俺とシキと秋音のデート……じゃなくて多分、お出掛け
が始まったのであつた。

ちなみに全員の電車代は俺が払った。予測通りだよ……………。

動物園に到着。入園料は俺が全員分を支払った。はあ……………。

しかしまあ、動物園というのは楽だ。

俺は何もしなくてもいい。シキが離れすぎないように見張っていれ
ば。

あとは勝手にシキがはしゃいで終わり。いやあー楽だ。突っ立って
るだけでお金が減らない！

「それで、秋音さんや」

「……何？」

「ありやなんだ？」

「…………観覧車」

義妹の言う通りである。俺が指差した所には観覧車。グルグル回るだけのアトラクションがそこにはあった。

…………何故に？ 今俺が居るのは動物園だよな？

「…………一番近い動物園は、一番近い遊園地と合併したみたい」

「うん。よく分からない！」

「小月！ 白くまが居ないぞ、どういう事だ!？」

「俺が知ってるわけが無いだろ。残暑だからじゃないか？」

「残暑だと、白くまが居ないのか…………」

ああ、シキよ頼むから観覧車だけは見るな。あれに乗りたいたかは絶対に言いだすなよ。

つていうか俺、どさくさに紛れてシキに間違った知識を…………まあいいか。

「そうか…………それなら小月、今度は遊園地とやらに行ってみよう」

「もうすでに知っていたーっ!?!？」

ダメだ。チェックメイトだ。大敗だ。ゲームオーバーだ。

遊園地に行くという事は、正直、あまり金が掛からないという事だ。しかし並ぶ。アトラクション一つ乗るのに大層並ぶ。立ち並ぶ。足が疲れる。

もう嫌だ。疲れるのも金が無くなるのも嫌だ。最悪だ。

「ほら、行くぞ小月」

「…………がんばれー」

目をキラキラ輝かせて興奮しているシキと、棒読みで俺に励ましをくれる義妹。

今一度よく分かった。

この二人が組めば俺が苦しむことになる。大層苦しむことになる。最悪だ。

「はあ……………」

俺は溜息を吐きながらも渋々シキの後について行くしかなかったのである。

「ん？ あれは……オトア！？」
「は？」

直後、シキが何かを凝視した後に騒ぎ出した。視線の先には…俺がさつき指差した観覧車？

いやいやいや、視力的にまず見えない。常人の視力で観覧車に誰が乗ってるかなんて。

しかもよりもよってオトアだと？ まず似合わない。何の冗談なんだ？

つーかオトアは俺達二人が苦戦しながらも倒して、今は投獄中って聞いた。

投獄中のやつが出てきてるわけ無いだろうが。シキの奴はいきなり何を言いだすんだか。

俺が理論的に常識的にそう説明してやると、シキは、

「オンナのカンという奴だ！ なんかビビッとセンサー的なものが反応してるんだ！」

「どんなセンサーだよ。っていうか観覧車に乗りたいたいなら正直に言えよ」

「違う！ アタシが乗りたいのはアッチだ！ アッチの方がカッコいい！！」

げっ、ジェットコースター。俺史上、もっとも列に並ぶ時間が長いアトラクションじゃないか。

しかもアレ急に落ちるから嫌いなんだよ。あの浮遊感が気色悪い。

「まあオトアはどうでもいいか。さあ行くぞ小月、秋音」

「……いや」

はははっ！ 甘いな義妹よ。そんな拒絶はシキの馬鹿力の前では無意味に等しいんだよ！

第一、今の俺がその状態だ！

俺達兄妹はシキに引きずられる形で、ジェットコースターの列に加わるのだった。

観覧車（前書き）

だから、タイトルなんかには意味は無い

観覧車

シキが凝視した観覧車。

その中には灰色のジーンズに半袖ワイシャツに黒のアンダーを着た赤黒い髪に黒眼の青年が：篠守音亜が確かにそこに居た。来させられていた、と言った方が正しいが。

彼をココに来させたのは、対面に座る少女。

白のワンピースに緑の薄めのパーカーを羽織った、赤い猫のような目と無邪気で無垢な顔立ち少女がオトアをここまで来させたのだ。

「で、何でオレはわざわざこんな物に乗せられてんだ？」

オトアは対面に座るその少女を睨み付けながら問いかける。

「仕方ないじゃない。ゆっくりと出来るアトラクションがこれしか無いんだもの」

少女は視線を外に向けながら適当な調子で答え、オトアの苛立ちを静かに増させていた。

オトアがココにいる理由は極めて単純。雇われたのだ、この少女に数日前、牢獄で話を持ちかけられ、オトアはそれを条件付きで承諾した。

承諾から数時間後、話を持ち掛けてきた者と今現在目の前にいる少女がオトアの前に姿を現し、彼を牢獄から出したのだ。

「オレがオメエに雇われてるのは理解している。この首輪がある限り逆らったら死ぬ事もな」

オトアはそう言い、自分の首に付けられている銀色の少し厚めの首輪を指で軽く突く。

「ええー、別に逆らっても死ぬわけじゃないよ。ただ無断で能力使用すれば頸動脈に直接毒をブチ込むし、行方が分からなくなったり無理矢理その首輪を外そうとすれば爆発するような仕組みがされてるだけだよ」

少女はまたもや適当な調子で答え、外の景色をご満悦している。

どうにか苛立ちを抑えつけながら、オトアは少女にまた話を振る。

「……まア、オレがわざわざオメエらに逆らう理由なんてまず無いんだがな。それよりも仕事の話だ」

「そんなの後でいいじゃん」

我慢の限界というものを迎える前にオトアはジーンズのポケットからMP3プレーヤーを取り出し、イヤホンによって耳を塞ぐ。

相手も話す気が無いのだ。これ以上、少女と話す気は無い。

そう判断したところで、今度は少女の方からオトアに話を振ってくる。

「そう言えば、篠守君って【蒼い死神】に倒されて投獄されたんだよね」

「正確には、【蒼い死神】達だ」

少女は外に、オトアは手元にあるプレーヤーに視線を向け互いに顔を見合わないまま話が進んでいく。

「2対1だったから負けたの？」

「オレがそんな言い訳をする？ あれは完全にもう一人のガキの策に嵌ったから負けたんだ」

「そのガキについて、知りたくない？」

「どうでもいい」

「篠守君を策に嵌めて負かしたガキね、中に魔神がいるんだって」
「は？」

思わずオトアの視線が少女へ向けられる。

少女の表情は笑い、外に視線を向けたまま話を続ける。

「予想通り、食いついたね」

「……あのガキに魔神がいるってのは、どついう事だ？」

少女の言葉によって不貞腐れたような顔になるが、オトアはそのまま真相を聞こうとする。

「どうしてそうなったのかは知らないよ、当事者じゃないから。でも張空小月…篠守君を負かしたガキの中には魔神の魂？ が存在するらしいよ。一応言っておくけど確かな情報だから」

「……………」

オトアはそのまま会話を切り、少女と同じく外に視線を向ける。

「プレーヤーの電源つけないの？」

「こっちの勝手だろオが」

「ねえねえ、篠守君。もしかしてコレってあなたを縛る鎖に成りうる情報だったりする？」

「んな訳ねエだろ。何故、そんな事を聞く？」

「いや、そうだったらあなたが裏切る理由は先に潰しておく方がいいなーと思って」

「……………くだらねエ」

「じゃっ、そろそろ色々とお話をしようか」

そう言っつて、少女は外に向けていた視線をオトアへ向ける事にした。オトアも同様に視線を少女に向け、イヤホンを取った。

「そんなにお行儀よくしなくてもいいのに。ただの雑談だよ？」

「その雑談の中に、仕事も含まれてんだろ？」

「まっいいや。それじゃ何かからお話する？」

「ご自由にどうぞ。雇い主はそっちだからな」

少女は顎に人差し指を当てながら、譲られた権利をどう行使するかを考える。

その間、オトアはまた窓の外に視線を向けていた。

見つけたのだ。

ジエットコースターの列に並ぶ二人の人物を。

二人とも黒髪で、片方は【蒼い死神】と呼ばれる少女。もう片方はその中に魔神という存在を気付かぬうちに匿っている少年だ。

(……………アイツの中に『アレ』が在る、か……………)

オトアは何かを疑うような視線でその二人を見続けていた。

そんなオトアの様子に気付いた少女はこう話を切り出す。

「そう言えば、篠守君の能力って皮肉だよな」

「……………んア？」

二人から少女に視線を映すオトア。その視線は先程とは違い何を言

っているか分からないような視線だった。

「篠守君の力って本来、空間を隔てて歪める力なんだよ。知らなかった？」

「隔てて？」

眉をひそめるオトアに少女は笑いながら話を進める。

「歪めるって言ったって、篠守君の場合は自分の空間を作るように見えない壁で隔てる力なんだよ。空間をぐんにやり歪めてるわけじゃない」

「証拠は？」

「拒絶したもの」

「……………間接的に、ってわけか」

少女の言葉に納得したような様子でオトアが言う。

オトアが雑音拒絶を得る時に拒絶したものは、世界だ。

世界を拒絶したその結果、空間を隔て歪める力が手に入ったんだと少女は言っている。

しかしそれでは、間接的では無く直接的なものになってしまう。

それでもオトアは納得した。自分の力が空間が隔て歪める力だと他人に言われ納得した。

考えられる要因は

「まさか篠守君が超絶破壊主義者だとは、思いたくないな」

「残念ながらその通りだな」

世界ともなれば、色々な拒絶がある。

色々なものに干渉されたくない、縛られたくない。こんな世界よりも他の世界がいい、どこか別の世界に行きたい。

こんな世界の全てを破壊したい、殺したい。

色々な拒絶がある。その中でオトアは世界と壁を作る拒絶ではなかったという事だ。

その中で、全てを壊し殺したいと願った…………世界を拒絶しただけだ。

「壊したいと願ったら守る力が与えられるとか、本当に皮肉だよ。ね。そう思わない篠守君？」

「どオでもいい事だ」

「ところで篠守君。その力に名前はあるのかな？」

「名前？」

いきなり何を言い出すんだコイツは頭大丈夫か、という視線をオトアは少女に送る。

しかしそんな視線は無視して、少女は話を身勝手に進める。

「篠守君って【蒼い死神】みたいな通り名が無いじゃん？ それに加えて能力名も無いんなら呼び名とかが定まらないよ。皮肉も言い難くなるし、何より篠守君みたいな中二病丸出しの野郎が能力に名前付けてないなんて有り得ない！」

「……ブツコロスって言ってもいいのか？」

「さあ考えて篠守君！ これは今後の仕事にも会話にも関わる事だから」

そんなバカな事がありえてたまるか、とは思いつつも一応オトアも考えてみる。

しかしそんな事を考えてるのは生まれて初めての経験なので中々思いつきはしない。

大体、先程少女に能力の詳細のようなものを言われてきたばかりなのだ。

それは今までの乱暴な使い方ほとんど全てを否定されたようなもので、唯一否定されていない力の使い方と言えば。

「鎧、か」

「鎧！ 何それ聞かせて！」

自分の雇い主は結構なバカなのか？ と思いつつもオトアは詳細を説明する。

「オレの力で防御の使い方一つだ。空間を身に纏う形で歪めて鎧のような感じにする。無重量で相手には見えない、その上、相手の攻撃は全て逸らす。死神の蒼い炎であれだ。まあオメエが俺の力が空間を隔て歪める力だっというんだから間違った使い方かもしれねエがな」

「それだよ！」

「どれだよ」

「思いついた！ 今から篠守君は能力の事を《不可視の鎧》インビジブル ロックって言うて。言わなかったら首輪爆発するから」

「不条理な……… インビジブル ロックって透明な錠だよな？ それだと不可視は意味として合ってるが鎧の部分が意味として」

「篠守君、細かい。いいの中二病的センスには意味なんて言葉は無用のカッコ良ければ何でもいいの。分かった？ まだ文句言うなら首輪爆発だから」

「無茶苦茶だな。まア、雇い主がそオしろというならオレは異論はもうねエよ」

そう言うてオトアは外を見る。彼は口に出さずとも思っていた。インビジブルロックって少しダサいな少し気に食わないなー、と。

筋書き（前書き）

タイトルなんかは、意味は無い

筋書き

引き続き、観覧車内。

オトアも能力名について不貞腐れるのを止め、少女に視線を戻していた。

少女は次の話を切り出す。

「さて、ここから先はこれからの篠守君のお仕事の話よ」

「やっとか……」

オトアは少し溜息を吐き、少女はクスクスと笑う。

「篠守君にやって貰うお仕事は、予言潰し、ね」

「予言潰し……張空陽介が言ってきた予言ってやつを潰すのか？」

「そう。何時何処で誰が誰に奇襲を受けるかっていう予言なんだけど、誰によって部分が分かっているからそいつらとそいつらの所属している裏の組織の全員ぶっ殺してもらうのが篠守君の仕事ね」

「随分とオレらしい仕事だな。隠密にやった方が良いのか？」

「別に、ド派手にやろうとコソコソやろうと篠守君の自由。とにかくこっちは第三勢力となりうる組織が全滅したっていう状況が作れば満足だから」

少女の言葉にオトアは眉をひそめた。

今現在オトアを雇っているこの少女は、狐狩りを行う……ようは裏と表の世界の平和を守っている側に所属しているはずだ。

それなのに、ド派手にやっても良いと言う。

言い方を変えれば、表の世界の人間にバレても構わないと言っている。狐狩りの起因を作ってしまったても構わないという。

オトアからしてみても、それは異常だった。

それ程に事態が重いのか、それともこの少女の独断か。

「当然、独断よ。上のお偉いさん方がそんなの許すわけ無いじゃない。それでも篠守君に責任が及ぶような事は起こさせないから、安心してぶっ殺したりぶっ壊したりしていいからね」

「オメエ、何を目論んでる？」

笑顔で言う少女に、剣呑な光を帯びた目でオトアは睨み付け、問う。
「目論んでるのは、張空陽介の方だよ」

少女の笑顔は消え、そのまま淡々と話し始める。

「おかしいと思わない。何故このタイミングで予言なんかを提唱したの？ さらに話を聞けば張空陽介は死ぬ前に今回とは違う予言をしたらしいじゃない」

「内容は？」

「『いずれ弟が何か大きな事を起こす。それを皮切りに、世界が動き出す』。そしてそれは起こった。篠守君との激突、そして篠守君の敗北の事ね。それで世界が動き出す。そのはずだった」

「そのはずだった？」

「確かに今、世界は密かに動き始めてる。何のせいだと思おう？」

「……張空陽介の予言のせいかな」

「そう。弟ではなくて兄が世界を動かしたの。最初の張空陽介の予言とはズレてる。まあ捉え方によっては自分がまた予言を言い出す時期を示しているとも考えられるけど」

「普通に考えりゃ、オレとあのガキが原因で世界が動き出すという風に捉えるな」

「本来なら今このタイミング予言なんてするはずじゃ無かった。最低限、張空陽介の筋書きシナリオではそうなってはいなかった。でも」

「……オレとあのガキが無意識のうちに最初の予言を潰した？」

少女は無言で頷き、そのまま話を続ける。

「だから張空陽介はテコ入れしなきゃいけなくなった。それが今回の予言。しかし最初のと今回のじゃ目的が違う。今回の予言は、潰させる事が目的。根拠は」

「オメエらに不利な事を言ったから、だな」

「それと目的がもしかしたらもう一つあるかもしれない」

「もう一つ？」

「またも少女は無言で頷き、もう一つの目的に向かって指差す。」

「それは、こちらに在る戦力オトアを引きずり出す為
指差されたオトアは、しばらく無言のままだった。

「……つまり張空陽介はオレを駒にしたいが為に予言をしたと？」
「あくまで可能性の一つだけど。でも『奴ら』の思い通りにはさせ
ない」

「『奴ら』？」
「張空陽介の筋書きシナリオじゃ、まるで誰かと戦う準備をするみたいにな
っている。つまりは張空陽介は誰かと戦ってると思うの。しかも世
界規模で」

「……チエスでも気取ってるつもりか？」

「知らないわよ。でも許せない」

そう言つて、少女は親指の爪を噛みながら憎々しそう顔を歪めて続
きを言う。

「わたしの住んでる世界をおもちゃにするなんて。わたしの狙つて
た駒を先取りしようなんて。わたしを除け者にして世界を掛けて勝
負するなんて。わたしの世界なのに、わたしの世界なのに、わたし
の世界なのに、わたしの為だけに存在する世界なのに……ッ!!」
「……………」

オトアは思った。

この少女は子供だ。見た目通りのお子様。自分の思い通りにならな
い事がある度に何かを壊し潰す。

自分の本性と同じ子供。傲慢で無垢な子供。
言い方を変えれば、悪魔。

それがこの少女の本質。自分と似ている、超絶破壊主義。

「だから売られた喧嘩を買う事にしたの」
爪を噛むのを止め、笑顔で少女は言った。

「張空陽介の思惑通りに、途中まで動く？」

「その通り。そして途中から狂わせてやるの。『奴ら』の演奏ゲームに
雑音バグを発生させて滅茶苦茶にしてやるの。そして『奴ら』二人とも
敗北させてやる。わたしが勝つの、絶対に」

「……アンタの様な危険思考の奴を雇い主にした事を酷く後悔しそ
オだ」

「そうかな？ わたしの犬になれば、充分楽しめると思うけど？」

少女は笑顔でそうオトアに告げ、

「……そりゃ良かった。オレもそろそろコロシアム楽しみたいと思ってた所だ」

口を割くような笑みで、オトアはそれに答えた。

筋書き（後書き）

しばらく更新しないかも

一生（前書き）

言わずとも、タイトルなんかに意味は無い

一生

「小月、大丈夫か」

「んなわけあるかあ!!」

シキよ。心配する前に限度を知れ、限度を!

ジェットコースタはまだいいとして、コーヒーカップはいけない。

シキの野郎、限度を知らない。危うくカップが回転に耐えきれず壊れるところだった。

俺の三半規管は多分もうぶっ壊れてしまったけど。

「……早かった。見てるこっちも酔うほどに」

「乗ってるこっちは脳味噌シェイクされてる感覚だったよ……」

秋音はまだ乗っていないからいいんだ。酔って吐く程度ならまだまだ良い方だよ。

吐くと言う概念が存在しない世界なんて、俺は初めて見たよ。

とにかく近くの席に座りたい。座らせてください、お願いします。

「……まるでゾンビみたいな動き」

「本当に大丈夫か、小月？」

だから大丈夫じゃないって言ってるんだろ。というか大丈夫なわけがないだろ、あのスピードで!

俺は逆様に歩き……歩き? 逆様? 俺はどこに進んでいる?

というかココはどこだ? 地球か? 霊界か? 素晴らしいか、この世界は?

「取り敢えず、座ってくれ小月」

「ああ……」

シキの言葉に従っているつもりだが、まるで座っている感覚が無い。浮遊感マックスだ。浮遊している、俺は今、浮遊してしまっている!

「……ダメだ、コイツ使い物にならない」

「小月の目の焦点が一切合っていない……」

「……仕方ない、ジューズでも買って来るからソイツ見張ってて」

「分かった」

うげえ、気もち悪いげえ、げえげえげえ。

げえげえげえげえげえげえ、まちで吐くってこれ。どこだよ地上は？

「小月い…………… 本当にすまない」

しばらく俺が下を俯いてげえげえ言ってたら、シキが心配そうに覗き見しながらそう言ってきた。

なら、出来れば加減してくれよ。もう遅いからどうでもいいけど。

「本当に…………… 巻き込んですまない」

「巻き込んでつて、大袈裟…………… でもないか」

若干話せる程度に脳味噌が落ち着いてきたので、シキの言葉を肯定する。

「アタシのせいで、裏の世界に巻き込んでしまった」

そっちの巻き込んだかよ。そっちは良いからコーヒークップの事を反省してほしい。

「その…………… それで…………… 実は小月に」

「どうでもいい」

どうせくだらない事だろう。

俺はシキの言葉を遮るように言い、そのまま席を立つ。

まだ多少ふらつくが、まあ歩けるかな。

「おい、小月。アタシの話を」

ああ、うるさいな。

シキの奴、いきなり裏の世界の話なんかもちだして。どうせまた『もうお前は関わるな』とか言い出すんだろ。

そんな話に俺がもう耳を貸すわけ無いだろ。まったく。

「いいか、シキ。俺はこれから裏の世界で何度死にかけようとも、お前に何度ウザいと言われようとも、俺はシキの傍にいる。一生な」

「……………」

俺の言葉が意外だったのか、キョトンとした顔でシキは見てくる。

もしかしてシキが話そうとしたのはそういう事では無かったのか!?

だとした俺、少し恥ずかしい事言ってる！ しかも遊園地なんて人の多い場所で！

アホか俺は！ 大バカか！！

「すまん、そういう話だと思ったからこういう態度を取ったんだ！ 違う話だったら是非聞けぞ！ さあ、なんの話だ？ 何か食べたものがあるのか？ 世界征服の話か？」

最近、自分の口からとんでも無い事が出てきてる気がしなくもないんだが。

まあそんな事はどうでもいい。

焦った俺は適当な言葉を次々と口から出し、シキの様子を見る。

シキはといえば、しばらくぼけーっとした後には笑い出しながらこう言った。

「いや、合ってる。アタシが話そうとしたのはそういう事だ」

なんだよ、合ってたのかよ。ビビらせやがって。

……じゃあ、あの間は何だったんだ？

「お前の意思を確認しようと思ったんだ。しかしアタシが聞く前に勝手に喋りだしたんでな、驚いた」

「そういう事が……心配損だよ、まったく」

「それはすまなかった」

安心した俺はそのまま歩き出す。

「どこへ行く？」

「トイレ」

短く答えながら俺はその場にシキを残して一時撤退。

トイレに行った後にそこら辺を適当にぶらつく予定だ。

……いやだって、少しばかり恥をかけたような気がしてあの場に居られないんですもん。

仕方が無いことなんだ。

「そうか……一生か」

「……シキって、もしかしなくてもアイツの事が好きなの？」
不意に隣から聞こえてきた声に、思わずシキは椅子から飛び退いてしまふ。

声の主は、大きめの紙コップを両手に一つずつ持った張空秋音だった。

「なんだ、秋音か」

「……オレンジとアップル、どっちがいい？」

正体を確認し、安心したシキは先程まで座っていた自分の椅子へと戻り、秋音は先程まで小月が座っていた椅子に座る。

二つの紙コップを見比べたシキは少し悩み、その後右手にあった紙コップを取り、

「アタシはどちらでも構わない」

そう言っつて、中身を飲み始めた。

「ちなみにそれはコーラ」

「げげげほっ！」

直後、咽た。

「秋音の嘘つき！」

「……嘘は吐いてない」

「オレンジジュースとアップルジュースどちらがいいか聞いてきたじゃないか！ それともジュースとは言っていないという叙述トリックとでも言う気か！ オレンジコーラとアップルコーラとでも言うのか！」

「……二つの内どちらかにオレンジとアップルが必ず入っていると
は言っつてない。そういう叙述トリック」

「結局、アタシを騙したんじゃないか！」

「……そっちが勝手に取ったから、こっちだけが悪いわけじゃない
「うう」

確かに、取る前に中身を確認する事は出来た。

しかしシキはそれをせずに勝手に秋音からジュースを取った。

それに秋音はコーラが飲みたくて一つ自分の為を買ったのかもしれない

ない。

そんな事を考え、黙り込んでしまったシキに秋音は一言。

「……ちなみに、こっちもコーラ」

「ならアタシに始めから選択権なんて無いじゃないか！」

「まったく……、と言いながらシキはまたコーラを飲み始める。

そんなシキをしばらく見た後、秋音はまた一言。

「……シキってもしかなくても、アイツの事が好きなの？」

「げほげほっ！！」

直後、咽た。

「いきなり秋音は何を言い出すんだ！」

「……シキってもしかなくてもアイツの事が好きなの」

「何を言ったかを聞いてるんじゃない！」

うるさいなあ、という顔をしながらも秋音は口には決して出さずに

(顔には出しているが)シキの問いに答える。

「……『うふふ、小月がアタシの傍に一生居てくれるって言うてく

れたよ。きゃー、嬉しくて死にそう！』って言うてたから」

「そ、そんなことは言っていない！！」

「……顔には出してた、絶対に」

「うっうっ……」

顔を赤らめ、シキは下に俯いてしまった。

そんな様子を見ても秋音は言葉を止めず、事情聴取を続行する。

「……どんな所に惹かれたの？」

「ど、どんな所について…別にアタシは小月の事………ペットにし

か思っていない！」

「……キスはした？」

「きききききき、キスなんてするわけ無いだろお！」

「……戻ってきたらしたら？ っていうかアイツはどこへ行ったの

？」

「こ、小月はトイレに行ったそうだ。それと小月が戻ってきててもき

ききキスはしないからな！」

「……それじゃ、続けましょう」

「あ、アタシもちよつとトイレに」
席を立ちあがるうとしたシキの腕を秋音はぎつしりと掴んだ。

「秋音え………なんでこんなイジメをするんだああ？」

「……ナビ替わりに連れて来られて、使い物にならなくなったアイツの代わりに飲み物買いに行つた仕返し？」

涙声で言つたシキの質問に笑顔で答えた秋音。その笑顔にシキはただ戦慄するしかなかった。

その後、10分以上にわたつて秋音による詰問にシキは恥ずかし…
…苦しめられた。

一生（後書き）

なかなかバトらない、どうなるんだろっ？

急変（前書き）

タイトルなんかの意味は無い、って前書きに書くのが癖になってきた

急変

オトアと雇い主の少女が乗る観覧車も頂点を過ぎ、ゆっくりと下降を始めていた。

「篠守君に聞きたいんだけど、魔神とはどういう関係？」

「それは言う義務があるのか、雇い主^{オーナー}？」

「あるよ、場合によっては」

「場合もクソもあるか。大体、オメエは知ってるんじゃないのか？」

「篠守音亜が魔神の情報に食いつく程度しか、知らないけど？」

「まア、そオだろうな。詳しく知りたきゃ鑑優斗に聞け」

「鑑優斗？ 篠守君を騙したガキが持っていた武器を作った人のことだよな？」

「やっぱりか…………… あア、その鑑優斗だ。アイツならオレと魔神の関係を知っている」

「何で??？」

「昔馴染みのよオなもんだ。魔神の件で出会った」

「????？」

「ともかく、詳しく聞きたきゃ鑑優斗に聞け。オレは言う気は無い」

「え、でも」

少女の声を遮る様に、爆音が鳴り響き、観覧車が動きを止める。眉をひそめながらオトアは窓から下の様子を窺う。

「おい、何だアレは？」

「アレって?」

爆音にも動じずに、先程と変わらぬ表情で少女は問い返す。

「裏の世界の連中が数名…………… しかも完全にオメエら側の人間じゃない奴らが居るんだが？」

「知ってるよ」

少女の言葉に、オトアは表情をより一層険しくする。

そんなオトアの表情を見て笑い、少女は説明する。

「何で、こんな似合わない場所に連れてきたと思ってるの？ 手始めにアイツらを駆逐して貰う為だよ」

「オレの仕事は、予言潰しじゃなかったのかア？」

「信用無いんだよ、篠守君は元々敵だったから。また寝返っちゃうんじゃないのかどうか、お偉いさんから疑われてるの」

「……それで、信頼を得るために殺し合えと」

「まあ、簡単に言えばそういう事だね」

思わずオトアは頭を抱えなくなったが、そんな行動をする前に少女が続けて説明する。

「相手の狙いは【蒼い死神】の傍に居る、篠守君を追い詰めた少年の捕獲だと思うの」

「思うの、とはア随分と適当なんだな」

「だって、わたしは敵サイドの人間じゃないもの。正確な情報は分からない」

と、両手を上げながら少女は困ったような顔をする。

「分かっているのは、狙いは【蒼い死神】の傍にいる誰かって事だよ」

「中途半端は嫌いなんだが？」

「ともかく、篠守君のやる事は簡単」

そう言うと、少女は不気味に笑いながら言葉を続ける。

「自身の能力を使ってこの遊園地内で、いっぱい楽しめばいいの」

「分かり易くて何よりだ」

オトアがそう言った次の瞬間、観覧車のドアが外へ吹き飛ぶ。

静かに立ち上がり、開いたドアから身を乗り出したオトアは少女へ最終確認する。

「加減はしたほうがいいのか？」

「別にしてもいいけど、ちゃんと楽しんでよ？」

「了才解」

直後、オトアは観覧車から降りた。

「何だッ!?!」

今、すつげー爆発音がしたぞ!?! 何が起こったんだ!?!?

って考えてる暇は無いか。取り敢えずシキと義妹に合流しないと。

俺は今、? 鴉を持ってないから、相手の動きを少しの間止めるくらいしか出来ない。

当然、腕力も常人並みかそれ以下だから止めてる間に殴るとかそんな事をして意味は無い。

さっきの爆発が事故だったらいけど、もしも裏の世界が関連しているんなら確実にヤバイ。

シキには蒼い炎があるから平気だろうけど、義妹の方は分からない。取り敢えず、二人ともさっきの場所に居てくれよ。頼むから。

俺は来た道を走って戻りながら、そう祈る事しか出来なかった。

「ッ!?!?!」

突然の爆音にアタシは席を立ちあがった。

もしかしてこれはオトアがやったのか……………?!

いやでも、音のした方向に観覧車は無い。というと違つのか?!

ああー! 分からない、とにかく小月と合流しよう。

「秋音、一緒に」

隣の席にいた秋音に声を掛けようとした時、斜め後ろから何かが猛スピードでこちらに向かってくるのが見えた。

あれは確か……………名前覚えてないが、動物園にいた鳥だった気がする。

まあ何であれ、敵意を見せるなら退けるしかない。

アタシはこちらに向かってくる鳥を蒼い炎で容赦なく燃やす。

一応死なない程度に加減はしておいたが、燃やされた鳥は失速しまるで死んだように地面へ落下していく。

やっぱり不気味だ。

こんな風に生物を一瞬のうちに殺す……正しく言えば、生気を無くさせる力なんてやっぱり不気味だ。

小月はこの力のお蔭で助けられたとは言っていたが、アタシはやっぱりこの力は……嫌いだ。

……今は、そんな事どうでもいい。

「秋音、一緒に小月と合流しよ……秋音？」

あれ？ さっきまで隣の席で座っていたはずなのに、どうして居ない？

どうして、居ないんだ？

「秋音え！！」

考えるより先に足が動いていた。

よく分からない。秋音が勝手に移動したのか、それとも誰かに。

「秋音え！」

アタシに深く考えるのは向いていない。そもそも考える事なんて後回しでいい。

それより先に秋音を見つける。それしか無い。

行く当てはないが走り出すしかアタシには道が無い。

「さアて」

地に降り立ったオトアは肩を回しながら、辺りを見渡し様子を窺う。

（さっきまで居た奴らは、どこかへ移動しやがった………つまりは、かくれんぼってわけか）

オトアは片足の踵を浮かせ、そこに自らの力で空気を圧縮した球を作る。

それを踏むようにして爆発させ、水平方向へ高速移動する。

目まぐるしく変わる景色の中、オトアは違和感を感じ、ブレーキ代わりに目の前に空間を歪めて作った壁を設置し、それに突撃する事で無理矢理自身の体を止めた。

(空間を隔て歪める力……まあ壁が主体って事で認識すればいいかア……………)

首を傾げるようにして関節を鳴らしながら、オトアは違和感のした方向へ先程と同じ移動方法を取る。

その方向には、少女を肩に担いだ男性が一人どこかへ移動している最中であつた。

つまり違和感の正体は、裏の世界の人物を一瞬見たからであつたようだ。

「見イイつけたッ！」

今度はブレーキ代わりに壁を作るのでは無く、男の背中に飛び膝蹴りを入れるような形で無理矢理止まつた。

男に担がれていた少女は、男がオトアの膝蹴りで吹き飛ぶと同時に空中に投げ飛ばされる。

オトアは少女に一瞬視線を向けると《不可視の鎧》を発動させ、鎧で少女の体を包む。

地面に落ちた少女に掛かる衝撃は全て鎧が逃がし、奇跡的に少女は無事であつた。

少女を見てオトアは少しばかり眉をひそめたが、男を吹き飛ばした方向へ不気味に笑い掛け、言う。

「さアて、誘拐犯さん。少しオレとお話していかねエかア？」

対峙

「篠守音亜！？ 何でここに！？」

「細けエ事は良いんだよ」

一歩一歩、少女を誘拐していた男に近付くオトア。

男は尻餅をついた様な状態のまままで退こうとするが、直後、体が硬直したように身動きが取れなくなる。

「な、何で……ッ！？？」

「《不可視の鎧》応用、名付けるならア……縫い付けっ所か。オメエの体をオレの力で包んで、その場に拘束しただけだ。これでゆつくり話が出来るなア」

男を見下ろす形でオトアが問いかける。

「何故、少年じゃなく少女なんだ？」

「……はあ！？ 知らねエよ！ 俺達のボスが今回の計画はそこにいるガキを攫う事だって」

「そオカ、下っ端じゃ役に立たねエか」

溜息混じりにそう言うと、オトアは男に背を向け、少女の方へ行こうとする。

「み、見逃してくれんのか……？」

「見逃すだア？」

首だけを動かし、男に視線を向けたオトアは、

「死ぬに決まッてんだろ」

指を鳴らし、男の頭部が圧縮され破裂する。

死体に目もくれず、オトアは少女の方へ向かう。

金髪である容姿からして、日本人では無いだろう。

オトアはそう予測しながら、何か少女の身分が分かる物を探ろうと手を伸ばした瞬間。

突如現れたライオンと熊と虎に襲われた。正確には、《不可視の鎧》を一応纏っていた為、襲われかけたが。

空振りをした、三体の獣にオトアは空間を破裂させ吹き飛ばした。

「……ツたく、何で遊園地に来てまで物騒なネコ共に襲われなきゃいけないんだよ」

頭を掻きながら立ち上がり、オトアは吹き飛ばした獣達の方へ視線を向ける。

獣たちは、もうすでに次の突撃を仕掛けようとオトアに向かって走り出していた。

「ハア……無駄に活気に満ち溢れやがって。止めるコツチの身にもなつて欲しいもんだ」

ぼやきながらオトアは指を鳴らし、《不可視の鎧》で先程の男と同じように獣達の動きを止める。

動きを止められても尚、抵抗の意思を見せつけるように雄叫びを上げオトアを威嚇する獣たち。

騒音にウンザリしたオトアは、ある発想を思いつき、また指を鳴らす。

次の瞬間、抗うような雄叫びは微塵も無く消え去った。

「空間を隔てる能力って事は、音の遮断も出来るってわけか……案内、便利なもんだなア」

自らの能力に感心しつつ、今度こそ少女の身分を証明するものを探ろうとする。

が、少女はもうすでにいなかった。
無言でオトアは辺りを見回し、舌打ちする。

（……糞共の目的を連れまわせば、簡単にぶち殺せまくれるとは思つただけだなア………）

溜息を吐きながら、オトアは適当に歩き出す。

少女が勝手に逃げたとしたら、まだこの近くに居るはずだ。

つまりは、この近くに敵が寄ってくる可能性が高いという事。

少女に会うのが先か、敵に遭うのが先か、はたまた誰とも会わずに時間を潰す事になるのか。

欠伸をしながら、オトアは頭を掻く。

そんなオトアに獣の群れが向かってくるのは数十秒後の事だった。

「はぁ……はぁ……」

と若干息切れしかけている俺だけでも、実際はまだまだ走れるような気がする。

なんだろう。前までは結構キツイ部類まで行ってると思うんだけど、裏の世界に関わって死にかけまくったからか？

慣れって怖い。

にしても、二人とも見つからない。

シキと義妹はちゃんと無事なんだろうか？　というか義妹の方が心配だ。

裏の世界に関わっているからと言って、オトアやシキのように強いってわけじゃないと思うんだ。

第一、鑑師匠なんかは戦闘員じゃなくて物作りが専門だった。

そんな風に、義妹も戦ってめっちゃ強いつてわけにはならない。だから心配だ。

そして次に心配なのは俺自身。正直言って、俺は弱すぎる。

だから早くシキに逢って、保護して貰いたい。独りで行動するより確実に安全だ。

義妹がシキに保護されてて、そこに俺が合流するのがベストなんだから……。

どうにも胸騒ぎがする。嫌な予感というやつか……。

「おい、お前」

突然、後ろから声を掛けられた。

止まるしか無いだろうな。普通に考えて。

今の状況からして、今俺に声を掛ける奴なんて裏の世界の……敵しかいないわけだ。

「んだよ、俺は今忙しいんだ」

「こっちもだよ。こんな面倒事さっさと終わらせたい」

「ところで聞くけど、その面倒事ってのは？」

「人殺し」

もうヤダ、殺しとか俺の専門外だから。

基本俺はかませ犬以下の存在なんだぞ、こんちきしょう。

相手の顔も見たくない俺としては、このまま走り去って見逃して欲しいんだけども。

「フーことで、死ね」

と、言う事ですね。俺の人生がいきなりクライマックス？

って疑問詞つけてる場合じゃねえ！

俺は適当に横に全力で飛び退くが、何かの衝撃に当たり、そのまま近くにあつたベンチまで吹き飛ばされる。

「痛ッてえ……………」

ベンチにモロに頭ぶつけた。

ああ、もう最悪だ。

っていうか今、何で俺は吹き飛ばされたんだよ。

「ああー、避けるなよ。面倒だろ」

「……………たく、何でまた俺が殺されなきゃあかんのよ」

頭を擦りながら、立ち上がる俺の視界に攻撃してきた奴の姿が映る。中学生……………いや小学生か？

ともかく割とまだ身長も高くなく、帽子を被った童顔のガキが居やがった。

っていうか童顔ってわりと女だか男だか分からない時が無いか？

帽子なんか被ってやがると。

「一応確認しておくが、張空小月だな」

声変わりもしてないし、普通に男女どっちだか分からんね。

まあどっちにしろ、俺を殺すんだらうけど。

対峙（後書老）

0.00 0.00

夢

第二、第三、第四、第五。

次々に爆発が各地……主に俺の数秒前まで居た場所で起こる。

「ぐッ……………つくしようが……………ッ！」

「チツ……………ちよこまかちよこまかと」

爆風に煽られながらも、俺は必死に帽子のガキから逃げようとする。徐々にだが足も体も重くなってきている。いい加減シキに保護されたい。

……………それにしても、おかしい。

爆発は最初の一回から全て、単発で行われている。

一回爆発したら、数秒の間は爆発しない。

まあ逃げる分には問題は無いけど……………わざとか？ それとも、そうしなければダメなのか？

ともかく俺が言えることは一つ。

シキに早く会って、この命懸けの状態を脱したい！

もう無理！ 風圧で体中が痛い！

直撃してないだけで、ダメージは蓄積していくって鬼な設定だ。こんちきしよう！

俺はスーパー一般人なんだぞ！

「しゃーない」

帽子のガキがそう言ったのが後ろから聞こえた。

だからといって重たい足を止めるわけにはいかない。むしろ、もっと無理してスピード上げなきゃヤバい気がする！

ああ、せめて？ 鴉があつたら完全に逃げれる気がするのに。

「……………せーのッ！！」

ガキの掛け声と共に、俺を囲むように（それと俺自身に向かって）連続的に爆発が起こる。

爆発と共に、撥ね飛ばされる感覚と万力に体全身を潰されるような

感覚のダブル激痛にブツツと何かが途切れる音がした気がした。つまり爆発の直撃、それと辺りの爆風による圧迫で俺の意識は一瞬にして途切れた。

同じくブツツ！ と何かが途切れる音を聞いた気がした人物が同じ遊園地内に一人いた。

しかし小月の意識が途切れるとは違う意味で、ブチ切れるという意味であった。

「クソ共、土下座ア！」

乱暴に腕を振り下ろすと同時に、オトアを囲んでいた鳥類達と哺乳類達と爬虫類達は地面上からの圧迫によりアスファルトの地面に叩きつけられる。

総数を合わせれば100近くに達するであろう動物達を地面に平伏せさせながら、オトアは面倒臭そうに頭を掻く。

《インビジブルロック不可視の鎧》でオトアに攻撃が入る事は無いが、100に至りかける動物たちに囲まれ完全に視界を塞がれギャーギャーうるさく喚く状況にオトアのしよばい忍耐が持つわけも無かった。

「何なんだよ、まったく……………」

動物を踏みつけながらオトアはその場を離れる。

(……………敵は見つからない、助けた標的には逃げられる、どうすっかなア……………)

当てもなく、フラフラと園内を徒歩で巡るオトアは先程から遠くの方角で鳴り響いている爆音を無視して考え耽る。

そんなオトアのズボンで何かが鳴り始めた。

(……………そーいや、雇い主オーナーに持ち歩くように言われてたな……………ズボンのポケットから携帯を取り出し、適当なボタンを押す。

『どう？ お仕事捗ってる？』

「そオだな、それならイイんだが」

『ダメダメなんだー、使えないね篠守君』

「ウォームアップ中だ、文句を言うな」

『言い訳なんか聞きたくないよ。わたしは使えない犬はすぐに捨てる主義なんだけど?』

「そりゃ助かる。早めにオメエの元を離れたいもんだ」

『躰けのなつてない犬……………お兄ちゃんとか言ったらわたしの言う事聞いてくれるのかな?』

「ブツ殺されたいのか?」

『これからは篠守君じゃなくて音亜お兄ちゃんって呼ぶから、さっさと仕事終わらせてくれない?』

「絶対にあとでブツコロスから覚悟しとけ」

『分かったから音亜お兄ちゃん早くお仕事終わらせてよ』

「これ以上、そのネタを引っ張ったら本当にブツコロスけど文句なんて一つたりともねエよなア?」

『ツンデレだなー、お兄ちゃんつたら』

「確実にコロス……………それよりも」

『ん? なになにに音亜お兄ちゃん?』

「……………標的が少年じゃなく少女だったんだが?」

『……………それはどういう事かな、篠守君?』

「オレが聞きたい。オメエの言う通り【蒼い死神】の傍にいる誰かつて事で間違いないのなら、今すぐ調べとけ」

『……………今、調べがついたよ』

「随分と早いんだな」

『篠守君もこれくらい早く相手の要求をこなすべきだと思つよ』

「それで、誰なんだ?」

『張空秋音。張空小月……………篠守君を追い詰めたガキの義妹だね』

「秋音……………随分と……………懐かしい名前だな」

『え? 知り合いなの?』

「いいや、昔、考えさせられた名前だ」

『?????』

「関係は、無いと思うが……………張空秋音の情報をもう少し集めてくれ

ないか？」

『言われなくても。その娘が相手の標的なんでしょ？ 狙う意味は
確実にある』

「ああ。その間、オレは敵を殲滅してる」

『こんなにお仕事のペースが遅いのに、殲滅なんて言葉を使ってい
いの？ 日本語間違ってる？』

「お勉強には向かない性格なんでね」

そう言うと、オトアは通話を切り、上を向く。

「さアて、オレの力はお空を飛ぶ事は出来んのかなア？」

両踵を浮かせ、その間に空気を圧縮した球を作る。

そしてそれを爆発させ、オトアは自らの体を垂直に飛び上がらせた。

「で、俺は死にかけたらここに来ると」

「まあ私にとつて、貴方が死ぬことは困るからね」

白と黒、そしてその間に一枚の鏡がある空間。気付いたらそこに居
た。

鏡の向こうには腰まで伸びた白い髪で顔を隠している少女が一人。
魔神であるらしい。

「私、思っただけど」

「何だよ？」

「貴方つて極上に弱いし、バカだよね」

「言っつなよ。俺が一番自覚してるんだから」

オトアの様に強い力は持っていないし、兄貴の様に鬼才と呼ばれる
ほど有能であるわけでもない。

それが俺なんだから。

「力、貸してあげよつか？」

「暴走しろと？」

「……言っておくけど、暴走したのは私が悪いんじゃないからね」

「いや、そういう事じゃなくて」

「鴉が無い今の俺が魔神の力を借り受けたって、暴走するだけだろって話だ。」

「ってかさ、魔神の力って何なんだ？」

「え、今頃？」

魔神の力を借り受けたのは二回。

一回目は暴走。

二回目は捨てた。

つまり、俺は今まで一度たりとも魔神の力を拝んだ………というか理解して使ったことが無いのだ。

本当に俺ってバカだよな。

「シキが命を司るように、私は夢を司るの」

「夢？」

「無い事を有る事にして、有った事を無かった事にする力かな？」

「何それ！？ 最強じゃん！」

「だから魔神って呼ばれてるんだけどね」

「なあ、それって人の死も無かった事に出来るのか？」

「それは無理。死神じゃないんだから」

別に誰かを生き返らせたいわけじゃないけどな。

魔神一人で全てが出来る程、現実には甘くないか。

「そしてシキと違って私の力には副作用がある」

「……悪夢か？」

「そう。力を使おうが使わなかつても自分が惨殺される悪夢を見る」

「慣れれば、大したデメリットでも無いな」

「……普通の人は、そうとは考えないと思うんだけど」

そうなのか？

8年間かかさずに自分が殺される悪夢を見れば、案外平気なもんだろ。

あ、でも目覚めが悪いな。しかしそれだけだ。

「多分ね、睡眠不足になるっていう風に普通の人はなると思うんだ。目覚めが悪いだけじゃ済まないと思うんだ」

「いや、俺はスーパー一般人だけど割とそれだけだ」

現実が悪夢よりも苦なり、って事かな。俺にとつては。

「ともかく、俺が今その力を借りたって暴走するだけだろ」

「だから、創ればいいじゃん？ 鴉」

「……創れるの？」

「其処になれば創りだせばいいだけでしょ？」

「恐ろしくどこかで聞いたような台詞を言っただなお前は」

「ただの既存の大型拳銃ごときを呼び寄せるなんて私の力を持ってしたら朝飯前だから」

なんて頼もしい魔神なんだ。

「その代り、あとでシキの水着姿の」

「黙れよ変態。さっさと力貸さんかボケ」

なんて残念な魔神なんだ。

夢（後書き）

gdgdな展開しか書けない俺がもう嫌だ。誤字脱字ばかりに違いないんだ……

まったく関係ないですけど。

【蒼い死神】と魔神を戦わせたらどっちが強いんですかね？

っていうか魔神の力を持つてすれば、オトア自慢の《不可視の鎧》も消えるんじゃない？

じゃあ、魔神とオトアを戦わせたどっちが強いんですかね？

シキとオトアではオトアの方が強かったけど。魔神の強さはどのくらい？

一歩手前(前書き)

タイトルなんかの意味はない

一歩手前

そついや、本当に今頃だけど。

魔神と精神世界で逢う度に現実に戻ってきたら傷とか治ってたけど、あれって魔神の力のお蔭だったのか。

なんて事を思いつつ、俯せたまま聴覚を頼りに状況を探る。

もう右手には重くて金属の感じがする何かが握られている。というか目覚めたら握ってた。

魔神の言ったことは本当だったらしい。既存の大型拳銃ごときを創りだすなんて造作もない。

「死んだか……？」

帽子のガキの声と共に俺の背中が足で踏みつけられる。

絶対に、ただでは済まさねえ。このガキさつきから生意気なんだよ。ガキは俺の近くにいます。だとしたら俺の相手の行動を歪める力で止めておいて零距离で？ 鴉を使うのが一番手っ取り早いかな。

「まあ、ミンチにしておけって言われたから念入りに爆散させておくか」

そんなタイミングいつ来るんだよー！

ガキの台詞を聞いて命を危機を感じた途端に、俺は？ 鴉のスライドを引きながら上半身を反転させる。

いきなり動いた俺から距離を取ろうと退くガキに銃口を向け、4〜5回引き金を引く。

「ちっ……まだ生きてたのかよ」

「しぶとくなかったら、オトアにボコられ死んでるよ」

そう言いながらも一度？ 鴉のスライドを引き、引き金を4〜5回引く。

同時に、俺の真上の空間が爆発し、熱と圧迫によって呼吸が止まる。

「力っ……あ………！」

「ッ!？」

突然、5ヶ所に銃弾で撃たれた様な痛みを感じたガキはその場に動き、何が起こったか分からず動揺する。

俺は俺で、呼吸困難の影響が脳がパニックを起こし事態を掴み損ねている。

一旦冷静になれ。ともかく今は追撃。出来得る限り、ガキに追撃。普通に考えれば、あと少し時間を稼ぐだけでいい。後はアイツが何とかしてくれる。

眼球でガキを捉える。未だに蹲っている。どいつもこいつも銃弾で貫かれる痛みを我慢できるような精神力があるわけじゃないか。子供ならなおさらだろう。多分。

「畜生、畜生畜生畜生畜生畜生」

動き、蹲りながらガキが念仏のように唱え始めた。

「ぶっ殺してやる、ぶっ殺してやる、ぶっ殺してやる!」

台詞が終わると共に、気付かぬうちに俺の体が宙を舞っていた。

「がはっ……………!!」

そのまま自由落下で地面に叩きつけられ、衝撃によって肺の中のわずかな空気が吐き出される。

頭を打たなかっただけ、まだマシな部類だろうか? いや、マシじゃないな。うん。

「……………つくしように……………何が……………?」

締め付けられるような胸の痛みを我慢しながら、体を無理に起こし状況を確認する。

辺り一面は、地面も空中もいたる所が次々と爆発し、鼓膜と視覚がおかしくなりそうだった。

「あの、ガキ……………ッ!」

爆炎でどこにいるのかは見えないが、明らかに原因は帽子のガキ。

さっきまでは一ヶ所一ヶ所を慎重に爆発させていたのに……………一種の暴走という奴か?

それともこれが本来?

まあ、どっちでもいいか。
どうしようか、この状況。

ガキの行動を歪めたところで多分爆発は止まらない。？鴉の零距离での無効化は相手の場所が分からないから無理。啄みも同じ理由で却下。

打つ手無し、詰み状態。

……………つまりはゲームセット。

バラバラに無差別に起こっていた爆発が段々と一ヶ所……俺の元へと集ってくる。

そして、とうとう

蒼い炎が防壁のように俺の視界を遮った。

「遅いんだよ、どんだけ音鳴らしたと思ってるんだ」

「悪かったな。来る途中に何度も妨害されたんだ」

俺の文句に、後ろから言い訳が返ってきた。

「まったく、妨害を言い訳にするなんてそれでも【蒼い死神】か。

「なんだ、これは？」

「暴走」

俺に近づきながら問うシキに、俺は出来るだけ簡素な回答をする。

「面倒だな」

そう言っていると、蒼い炎が拡散し始め、辺り一帯を焼き尽くす。

「大胆」

「普通だ」

熱のない蒼い炎は、しばらく燃え盛った後、静かにゆっくりと消え始めた。

「……………いない？」

しかしながら、ガキの姿は焼かれた一帯には残っていなかった。つまりは、直前で逃げられたということか。

『篠守君、お仕事ちよつとは終わった？』

「9割方な」

両足が無く内臓が腹部から飛び出ている死体を踏みながら、オトアは電話に出る。

『早いね、さすが死神を圧倒するだけはある』

「調べはついたのでか？」

『張空秋音の経歴から言えばいいかな？』

「あア」

『8歳までは児童施設で育って、8歳の時に張空小月の両親が養子にして、そこからはずっと張空家で過ごしてる。裏の世界に関わったのは』

「裏の経歴はいい」

『……………何で？』

「必要が無いからだ」

『へー…………、それで何か分かったの？』

「まだ足りねエ」

『今度は何を調べるといいますかあー、あんまり仕事が多いとわたし疲れちゃうー』

「ふざけてる場合か？」

『篠守君、お仕事遅いのに人に求めすぎだって言ってるんだよ』

「張空陽介、確かアイツは2年前に死んだんだよな？」

『それが？』

「そいつの死で、何か不審な点は無かったか？」

『あつたけど？』

「具体的には、死体が不審そのものだった、ということか？」

『篠守君、知ってるの？』

「いや。ただこれで調べてもらうことは最後になる」

『調べ終わったら結論を聞かせてよ？』

「了解だ」

『それで、何を調べればいいの？』

「8年前のある事件において、張空陽介および張空小月が巻き込ま

れたかどうか」

『ある事件？』

「ああ。これが当たりなら最悪、張空陽介の狙いの一部ぐらいは見えるかもしれない」

『……その事件って？』

「それは

」

一歩手前（後書き）

事件に名前なんて普通はありませんよね？

まあカッコいい名前を付けられる才能は作者には無いために、事件の部分は線で誤魔化しましたけど。

あ、誤字脱字が必ずあるんで（分かってんなら直せよ）できれば見つけて注意してください。

集結、直後分散（前書き）

タイトルなんか統一性がない……

集結、直後分散

『分かった、調べておく』

「オレは引き続き仕事を終わらせる」

『そう、じゃあ早く終わらせてね』

「オメエもさつさと調べろ」

そう言っただけで通話を切るオトア。

しばらくその場に立ち止まった後、片方の踵を浮かせそこに歪めた空気の球を作る。

(……………優先すべきは張空秋音の安全か、それとも敵の全滅か……………)

作りだした球を軽く何度か踏みながら思案する。

(……………張空秋音の安全の方が優先だな……………)

彼は珍しく人を守る選択をし、球を爆発させ水平方向へ一気に移動する。

「んじゃ、秋音が勝手にどっかに行っただっていつのか？」

「ああ……………すまない、一瞬のうちに消えたんだ」

「別に責めるつもりはねえーよ」

どうせ義妹なら俺と違っていきなり殺すやら言われなと思うしな。「でも、どうすっかなあ……………合流したくても場所が分からないし」

「いや、頑張れば場所は分かると思う」

「どうやって？」

まさか走り回ればとか荒唐無稽な事を言い出す気じゃないよな？

「アタシの力を使って」

「シキの……………？ でも」

シキの力は、生命力を自在に操る力。

使用方法としては生者を殺し、死者を蘇らせるみたいな感じだ。

それがどうやったたら、人探しに繋がるんだ？

「遊園地内を一瞬全て燃やして、園内の何処に何人いるかを把握する」

「出来れば止めといた方が良いんじゃないかな、走って探した方が安全な気がする！」

絶対に誤って園内の人が一瞬で死んじまうって！

無理だ、シキにただ普通に蒼い炎を一瞬だけ出して何もしないなんて！

「大丈夫だ。亜実に教えられた技術だから」

「亜実……ああ、あの茶髪か。でもいつの間に？ 初日の特訓サボるために今日遊園地にいるんじゃない？」

「知っていたのか……張空陽介が宣戦布告してきた日に、無理矢理やらされたんだ。だからサボるといふ発想が出てきたんだ」

へー、シキもシキで大変なわけだ。

でも何で茶髪は、一瞬だけ燃やすっていう危険な発想をシキに与えたのかな。

探索にしたって危険すぎるだろ。人を一瞬で殺せる炎なんだから。

「それじゃ、やるから周りに注意してくれ」

「注意？」

「殺しもせず活かしもせず、ただ炎を出すだけはある意味集中しなきゃいけないんだ。規模も大きいしな」

「……つまり、敵が来ないか見張ってるって事か」

「ああ。頼んだ」

そう言い、シキは静かに目を瞑りながら集中し始めた。

「んア？」

オトアが身に纏っていた《不可視の鎧》が一瞬だけ蒼く輝き、瞬く間に元の無色透明に戻った。

(……………【蒼い死神】か……………オレへの……………いや無差別か、それも攻撃じゃねエな……………)

とにかく自分への害は無い。

そう判断したオトアは高速そのまま移動を続ける。

(……………居た)

相手の標的で、今の自分の優先事項。

金髪の少女を見つけたオトアは、そのまま少女の元へ移動しようとした所から降り注いできた鉄骨に通路を塞がれた。

《不可視の鎧》によって直撃は免れたが、強制的に止まらなければならなくなってしまった。

「動物園にいた動物達を無理矢理ひれ伏させるなんて、動物愛護団体に訴えられますよ」

「訴えられんのが怖くて、人殺しがやっていけるとでも思ってたのかア？」

声のした方向へ振り返りながら、オトアはそう言う。

「篠守音亜。なんでそんな災厄のような人物がここに居るんですか？」

声の主は、普通のどこにでも居そうな人柄の良さそうな優男の風の人物だった。

「バイトだよ、ただのアルバイト」

「ただの、の一言で人殺しを許容されたくは無いですね」

「オメエこそ、なんでココにいる？」

「バイトですね、どこにでもあるアルバイト」

「テロの間違いじゃねエのか？」

「さあ。そうかもしれません」

しばらくの沈黙。徐々に緊迫した空気に変わっていく。

「生物の……………いや、物の操作がオメエの力か」

「物って、大雑把にまとめちゃうんですね」

「正確には、可動する物体の操作か」

「もっと正確に言ってしまうえば、人以外の生物と可動な機械なんで

すけどね」

「おいおい、自分の力の詳細なんて教えちまってるいいのかア？」

「教えようが教えまいが、自分の力は貴方の前では無に等しいでしょうから」

優男の発言に、オトアは眉をひそめた。

「何か手でもあるよオだな」

「ええ。悪名高き篠守音亜が相手ですから。自分が手を下さなくても他の人が相手を引き受けてくれます」

「ヤバい！ やっぱりアイツは居たんだ！」

「何だどうしたシキ？」

発狂したか？ いつもは集中なんてしてなさそうな奴だもんなお前は。は。

「オトアだ！ オトアが高速でどこかに向かっている！」

「へー、お前の炎は誰だかまで分かるのか」

「……いや、そんな事は分からない」

俺の冷めた発言に、シキも連られて冷静になる。

シキの探索は聞いた話だと、あくまで何処に何人いるかを把握するだけ。

誰が、までは分からないだろう。

「でも！ あの速度はオトアだ！」

オトアが高速移動するところなら俺も見た事がある。でも、

「オトアの移動速度をお前は知ってるのか？」

「……知らない」

この世に高速移動できる人間がオトアの他にも居ると言われてもおかしくない。

雑音^{パソナルノイズ}拒絶は拒絶の度合いで力が変わる。スピードだってそれで補えると言われてもおかしくない。

「ッ！！ いい事を思いついた！」

「却下だ」

「直接確かめに行けばいい！」

「人の話を聞け」

「分かつたら早く行くぞ小月、もしかしたら秋音もそっちにいるかもしれない！」

「んな都合のいい展開があるわけねえーだ無理矢理引つ張んな腕が千切れるってマジで！」

こっちの意見など聞く耳を持たずに、腕を引き千切る様に俺を引つ張りながらシキはどこかへ走り出した。

「オトアっ！」

「……………そオいう事か」

「本当に居やがった……………」

三者三様の態度を取りながら、シキ、小月、オトアは園内のある一ヶ所に集った。

「……………張空アアツ！」

「ひゃいッツ！？」

威嚇するような態度を取るシキを見て、オトアは状況を判断。

不可能な【蒼い死神】の説得を諦め、冷静に判断できる人間にこの場を託すことにした。

いきなり名前を呼ばれた本人は、小心者の様に驚き、何事が起こるのかと動揺しながらも身構える。

「あの鉄骨の山の向こうに張空秋音が居る。そしてそこに張空秋音を攫おうとする男がいる」

優男を顎で指しながら、オトアは続ける。

「この状況で自分が取れる最適な行動を取れ。オレはこの場から退く」

そう言うと、オトアは浮かせた踵の間に空気の球を作り、それを爆

発させその場から高速移動で立ち退く。

「……シキ。オトアを追いかける」

「でも……あの鉄骨の山の向こうに秋音が居るとか」

「オトアの言葉だぞ、信じるのか……？」

「いや、それは……」

「……俺はオトアの言葉を信じてあの山の向こうを調べてみる。シキはオトアの言葉を疑って追いかけて行ってくれ」

「逆の方が、適任じゃないのか？」

「いや、俺だとオトアに追いつけない。速度的に」

「……分かった」

そう言うと、シキもオトアを追いかける為にその場を退く。

残ったのは二人。優男と小月だけ。

「本当、逆のほうが適任じゃなかったんですか？」

「シキは少し単純だからな。簡単にお前を倒してしまっ」

「返す言葉も無い。でもそれで問題無いでしょ？ なんせ敵なんだから」

「いや、俺的には問題ある。聞けなくなっちまうだろ」

「何を？」

「張空秋音を攫った理由。まあ、あんまり期待はしていないがな」

「それを聞くためだけに自分とタイムンですか。張空小月は殺しておけと追加で依頼が来ているんで、簡単にぶっ殺してしまえますけど、貴方は強いんですか？」

「弱いよ」

簡単に自虐した後、小月は少し頬を緩ませる。

「ただ、実験台がちょうど欲しかったんだ。ある事を証明するための」

「証明？」

「気にするなよ。それが証明できたら、お前は俺に勝てなくなるだけだから」

集結、直後分散（後書き）

小月の癖に余裕ぶりやがって、そこまでぶっ殺されたいか。ともかく後2話以内に遊園地の一件は終わらせるつもりです。

ようは、次で小月は勝たなきゃいけないという制約が。

？鴉が手元にあるから、まあ勝てない事は無いとは思ってますけどね

証明結果

さつき気付いたが、魔神の野郎は親切に？鴉の弾倉を別に3つポケットに入れておいてくれたようだ。

21回。？鴉の無力化が使える。

まあ、絶対に余るんだらうけど、回数制限は無視していい。

純粹に、あれを試せる。

？鴉を握り直しながら優男風の奴に近付いて行く。

直後、横から高速で低空飛行する何かが突進してきた。

反射的に？鴉の銃口を向け、何かが当たった感触がすると共に引き金を引く。

「それは？」

何かがゆるりと落ちている光景を見て、優男が問う。

「答える義務は無いね」

というか説明するのが面倒なだけだった。

そのまま俺は優男に歩いて近付いて行く。

優男と言えば、？鴉の威力を見たためか少し警戒している様子だ。また横から、今度は左右連続で何かが低空飛行しながら突進してくる。

「チツ……………」

何とか？鴉で対応できたが、数が多くなればきつくなってくる。

しかも未だに証明は終わってない。

俺が考え付いた駄策が通用しているか分らない。

「その銃器、生物を無力化する力があるみたいですね」

その上、相手にも？鴉の性能の一部が分られた。

今すぐ走り出して優男に止めを刺したいが焦ってはいけない。

ゆっくりと、まだ証明が終わっていないんだ。海の時のように焦って駆け出して敵にやられるなんて事態を起こしちゃいけない。

今、この状況には俺一人しかないんだ。

あくまで証明が失敗したときの次の手がメイン。今は段々と距離を詰めることだけに集中しろ。

焦るな。焦るな。焦るな。

「じゃあ機械では対応できるのでしょうか？」

「ッ！？」

前方三ヶ所からそれぞれジェットコースター、なんか回転ブランコとかの座る部分、暴走キッズカートがどれも早い速度で俺に近付いてくる。

っていうかこれは当たれば死ぬし、？鴉じゃ対応できないし、俺のしょぼい力でも対応出来ない！

反射的に退こうとした足を行動を歪める力で強制的に止め、無理矢理自分をコケさせる。

それだけじゃカートは避けきれないし、ジェットコースターは地面すれすれで飛んできてから同じく避けきれない。

コケた直後、横に転がるように移動しどうにかジェットコースターとの接触は避けられる。

が、暴走カートは俺を追尾するかのように追い回してくる。

「……………つくしよう……………ッ！」

手をつき、起き上がってカートに向き直る。わりと早めの速度で近づいてくるカート。

横に避けたところで追い回してくる繰り返しだし、今の俺に壊す力など無い。

俺に壊す力はないが、追尾の原因を断ち切ることでぐらいは出来る。

カートがかなり近付いてきたところで横に飛び退き、？鴉のスライドを引き優男に銃口を向け引き金を引く。

銃口を向けられ引き金まで引かれたのに実弾や発砲音が無いことに優男は眉をひそめ、俺はもう一度スライドを引きながらその位置で

カートの追撃を待つ。

地面とゴムが高速で擦れる不快な音を発しながら急カーブしてきたカートは、出来るだけ勢いを殺さずに俺に向かって突っ込んでくる。

無茶だなー、なんて事を思いながらまた俺は横に飛び退き（その時に姿勢を崩して足を挫きかけたが）？鴉の引き金を引く。

優男が突然右手で左肩を強く握りしめながら苦しそうに表情を歪め、カートはそのまま直進し続け、姿を消した。

というか姿を消した直後に何か激突したような音が聞こえた。

啄み。？鴉の無力化以外の性能。

あらゆる障害、空間を無視して衝撃を伝える殺傷性は皆無の撃ち方。相手に説明するのは面倒だ。

俺はそのまま無言でまた相手に歩いて近付いて行く。

優男の表情にも変化が現れた。

今までは少し余裕が残っていたが、今は完全に？鴉の性能を嫌悪しているかのような表情だ。

わざわざ自分から餌に掛かってくれた。これで証明の下準備は揃った。

あとは、自分の考えが当たっているかどうか。

「面倒な武器ですね」

「これが有るだけでお前には勝てるよ。オトアですら苦戦したほどの武器だからな」

そうだ、もつと？鴉を意識しろ。もつと思考を単純にしろ。

相手の心理の一つすら分かれば、あとはこっちのターンだ。

「お前ごときじゃ、この銃には勝てやしない。お前にこの銃を上回るだけの策があるか？」

距離も詰められた。間隔7メートルほど。

これなら証明が失敗しても、全力で走って無理に幕引きが出来る。

優男の表情にも若干の焦りみたいなものが見える。どうにかこの場から立ち去る事が出来るだろうが、？鴉に距離は関係無い。

足を撃ち抜かれでもしたら、おおよそ、もう動けなくなる。そうなれば逃げれない。

完全に優男の視線は俺ではなく？鴉に向けられていた。

それで余計な誤算は無くなっただろう。

「ッ！」

突如俺は走りだした事に驚き、優男が後ろに退こうとする。退こうとしたかった。

だが、体は一切動いていない。

つまり。

「証明完了だ」

走る足を止めて、俺は言う。勝利宣言。

「《不協和音》カオス ツイスト。俺の本来の力、相手の内側の行動を歪める力」

もう優男は動けない。なら走る必要も無いだろ。

「茶髪に相手の内側を歪める力って言われて、いまいちピンツと来るものが無かったがさつき死にかけた時に思いついた。まあこれやるのに6回分の力を一気に使い切っちゃうけどな」

発想は実にくだらない。魔神との最後の会話で、俺が思った事。

使えるというか凄い魔神の時とシキコンの魔神の時の印象の違い。

それが発想の原因。

印象が違うという事は思考が違う。思考が違うという事は行動パターンが違う。行動パターンを決めるのが思考だというのなら、それが内側の行動では無いのか？

連想ゲームのような考えの先に思いついたのが《不協和音》。

相手の思考を歪める、もつと言えば適当に巻き合わせる。

何かを食べたいという思考と運動がしたいという思考と眠たいという思考と何かを視たいという思考をごちゃまぜに巻き合わせる。

今、意識している事と無意識の事を巻き合わせる。

それが《不協和音》。一気に力を使ってそれを6回同時に行い、相手の思考をリリースさせる。

思考が止まれば、動けなくなる。今の優男のように。

「宣言通りだろ？　これが証明できたら、お前は動けなくなり俺には勝てなくなる」

俺の力の弱点は、歪めた部分とは違う箇所を動かされたら能力が無効にされる事。

だが《不協和音》は、そもそも動くことという考えが無くなるのだ。
解除される事はほぼ在り得ない。

優男の額に？鴉の銃口を突きつけ、

「つまり、俺の勝ちだ」

引き金を引く。

証明結果（後書き）

えっ？ 小月の力がチートになっちまった？
大丈夫です、このチートではシキにもオトアにも勝てませんから。

結論3つ

「畜生、畜生……なんで【蒼い死神】なんかが介入してくるんだよクソツ」

そんな事を呟きながら逃げようとする帽子を被った子供の前に何か
が通り過ぎる。

それはオトアが作りだした剃刀のような縦型の刃だった。

「自分だけ逃げて助かるうってかア？ 人生そんな上手くいくもん
じゃねエぞ」

シキを振り切ったオトアは、最後の仕事に取り掛かる。

「……篠守音亜………なんでそんな怪物がココにいるんだよお………」

「全員揃って同じこと言いやがって、つまんねエ奴らだな」

「クソツクソツクソツツッ！！ 死ねえ！！」

そう子供が叫ぶと、蛇のように連続して爆発が起き、最終地点であるオトアの居る場所において取り囲むように爆発、それが更なる大爆発を呼び寄せる。

が、

「変わった遺言だなア」

《不可視の鎧》の前にはそんなもの通用しない。

爆炎の中からこちらに歩いて来るオトアを見て、子供は呆然としその場に膝を付く。

「……ガキを苦しめて殺すのも目覚めが悪い」

オトアは子供を見下ろす形で、そう言うのと右手を上げる。

「だからせめて、楽にスパツと殺してやるよ」

上げた右手を手刀の形にすると、前腕部から手刀のさらに先までの空間が歪み始める。

「なんだよ………それ」

「《不可視の鎧 処刑刃》^{キロチン}。まあ簡単に説明すれば、隔てる力その

ものだ」

歪み始めた空間は、段々と右手を包みながら出刃包丁の様に變形していく。

「つまり、コイツの効力つてのは」
「なんの躊躇いも無く振るわれた右手の軌道に沿うように子供の体なんの抵抗も無く二分割に切断される。」

「空間切断だ。肉や骨による抵抗も無しに人体をスパッと切れちまう」

出刃包丁の様に變形していた空間は元に戻り、オトアは自分に掛かった返り血を拭う。

(……昔に作りだしたもんだったが、結局、すべての原理は空間を隔てる事にあるってわけか。無意識のうちに理解してたのかもなア……………)

しばらくその場に止まり、携帯のバイブルが鳴るのを待つ。

数分後、少女からの電話があった。

『調べ終わったよ。ビンゴだった』

「そオカ……………」

『それで、篠守君。結論を聞かせてよ』

「……………今から言う事はオレの勝手な推論だ。理論的に有っているだけで、実際にそオナのかは分からねエ」

そう言いながら、オトアは独りでに歩き出す。

「魔神の力は知ってツか？」

『夢、だっけ？』

「あア。正確には事象の有無。無い事を有る事にして、有った事を無かった事にする力だ」

『それが？』

「8年前の魔神の死体。それと2年前の張空陽介の死体。この二つには同じ共通点がある」

『外傷が無い事、死後硬直が無かった事、死神の力でも生き返らなかった事でしょ？』

「違う」

即座に否定したオトアはそのまま言葉を続ける。

「死体が偽物だって事だ」

『……………偽物？』

「まア、こつからは順を追って説明する」

『出来るだけ分かり易くね』

「魔神の力は、『蒼い死神』とは違って湯水のようにには振るえねエし代償も存在する」

『それは知ってる』

「魔神が事象を変える際に、既存する物体や空想の物体、負った傷などは簡単に変更できるが規模によっては話は別だ」

『リスクが生じるの？』

「いいや、リスクは生じねエ。生じるのはタイムラグだ」

『変えるのに時間が掛かるっていうの？』

「あア、人の過去の経歴や容姿を変えるのには時間が掛かっちゃう。他人の記憶をすり替えたりするのにもな。そういう関係で、人の死は変更する事が出来ない」

『へー、でもそれがどうしたの？ っていうか説明ダルい』

「とんでもない事を言い始めるなア。聞かせるツつてきのはオメエだろ」

『もう結論から説明して。そっちの方が早いでしょ？』

「まあ、それもオオだが」

オトアは歩みを止め、辿り着いた答えを言う。

「オメエに調べて貰ったことで分かった事は3つ。一つ目はオメエの聞いたがっていた張空陽介のシナリオの一部だ」

『早く聞かせて』

「まず2年前の張空陽介の死体。あれは魔神が創りだした張空陽介の偽の死体だ。死後硬直が無かった点と『蒼い死神』の力が効かなかったこと。この二点からして魔神の創りだした偽造死体って事で間違いいエ。それによって考察できるのが、張空陽介と魔神とは2

年前コンタクトを取っているという事。そしてこれは勝手な妄想だが、張空陽介は魔神を使用して何かをしようとしている。だから張空陽介の狙いを潰すために相手側が今回の事件が起こしたという風に推測できる」

『待つて篠守君。魔神は8年前に死んで、今は張空小月の中に居る。つまり張空小月もこの事実を知ってるってわけ？』

「いいや、知らないだろオナ」

『それじゃその話は無理が生じる』

「ああ、そオダナ……二つ目の結論。8年前の魔神の死体も偽物であつた。根拠は同様」『それでさっきの話が成り立つと？』

「成り立ちはしねエだろオナ。二つ目の結論で証明出来る事と言えば魔神の本当の肉体が未だにこの世界に存在しているという事くらいだア。ただ三つ目の結論に結びつくだけのものだからな」

『それじゃあ三つ目の結論とやらを聞きましようか』

「三つ目の結論……魔神は力と意識を張空小月に、肉体を別人として変更し、今も生きている」

『……それでも魔神の力を行使するには』

「張空小月の体から一時的に離れて、肉体に戻る事は不可能じゃない」

『断言できるの？』

「力の一部程度なら、無理じゃない。確証はある。言えはしないがな」

『……そう。つまり取り敢えずは、張空陽介の狙いは魔神であるのね？』

「ああ、おおよそだがな」

オトアは後ろを振り返りながら、混濁した話を簡潔に纏める。

「つまり、張空陽介は未だ世界のどこかで生きていて、8年前に死んだとされる魔神……篠守唯音の肉体は張空秋音に変わり今も生きているってわけだ。理解できたか【蒼い死神】？」

「な……んて……？」

オトアの視線の先には、動揺するシキの姿があった。

「おい、大丈夫か秋音？」

オトアの言う通り、鉄骨の山の後ろ側に横たわっている義妹の姿があった。

肩を揺らしながら意識の有無を確認してみる。

「……………ん……………」

ゆっくりと義妹が瞳を開いていく。

「はぁ……………」

何となくだけど、終わったって感じがして思わず安堵の溜息が出る。直後、義妹に殴られた。

「何すんだよいきなりっ！」

「……………ここは？」

「俺へした事は無視かこらぁ！」

「……………うるさい」

「グハッ！！？」

「……………それでココは？」

「遊園地」

「……………もう一発殴りたい？」

「その前に、もう帰るぞ」

「……………へっ？」

「トラブルによって、閉園だ」

「……………そうなんだ……………シキは？」

「あとから合流する。ほれ、立て」

そう言っつて、俺は手を差し伸べ、義妹はそれをしっかりと握りしめる。

結論3つ(後書き)

分かりづらと思いますよ。

だから結局オトアの最後の台詞が全てです

原因？

「……最近、シキの様子が変」

夕飯の後、いきなり義妹がそんな事を話し掛けてきた。

「ああ、そうだな」

「……心配じゃないの？」

「心配だけどさ、俺が話し掛けると、俺の顔見て、顔逸らして盛大に溜息を吐くんだもの。まるで『この男、本当に使い物にならないクズだ』っていう顔をしながらさ」

「……それでも、諦めずに話しかけ続けるべき」

「そしたら、俺のハートがブレイキングされちまう」

「……アンタのハートがクラッシュシングしよう構わないから、頑張るべき」

無茶言うなあ……。

正直、人にはそういう時期だってあると思うんだ。そういう時期を乗り越えて人は大きく成長する。

まあ今は、シキを見守ってやろうじゃないか。

「……ドアホ。死ね」

「酷い言い様だな」

大体シキの元気が無い方が、俺が変な事に巻き込まれる率も減少するから、損はしないんだけどなあ。

「……何が原因だと思う？」

「茶髪だる茶髪。シキを特訓するとか言っただけでシバいてるからな。きつとそれが原因だ」

まあ確証なんてどこにもないが。

「……茶髪？ 誰それ？」

「啞実って奴なんだけど……あれ？ お前知らないの？」

「……何を？」

「そいつ、兄貴の婚約者なんだって」

「……………ええッ!?」

義妹すら知らなかった兄貴の婚約者。本当に婚約者なのか？ それともサプライズで結婚なんてしようとしたのか？

まあ、どうでもいいか。

それにしても、初めて見たな。義妹がこんなに激しく驚く顔なんて。

「……………何それ！ 聞いてない！」

「ああ、俺もだ。つい最近……………始業式あたりに聞いた。ほら、あの時だよ。兄貴が電話掛けてきたうんぬんの時」

「……………なんでその時に話してくれなかったの!？」

「いや、そんな事よりも大事なことがあつたる」

ご本人が電話を掛けてきたっていう、オカシナ事態が。

「……………会いに行きたい」

「誰に？」

「……………亜実つて人に」

「ああ？ また面倒な事をいいだすなあ……………会ってどうするんだ？」

「……………色々とお話をしたいの」

「色々つて……………」

なんか絶対に最初の主旨とからかけ離れたことをお話しするんだろうな。

シキの件じゃなくて、兄貴の件をお話しするんだろうなあ……………。

まあ、仕方が無いか。俺が話しちゃったんだし。

「分かった。茶髪に話をつけてみるけど、断られても知らんぞ。俺は」

なんて会話から19時間後。ようは翌日の午後。

ファミレスにて、義妹と茶髪は会合していた。

何故？ それは、茶髪が良いって言ったからすぐさま義妹を呼んで俺が会合の場を設けたからだよ。

「つーことで、俺はもう帰っていいな」

「……ちよつと待って」

「なんだ？ 『お兄ちゃん、心細くて寂しいから待ってえ』ってお前が言っただって俺は帰るぞ」

「……今すぐナイフとフォークで金属製の造花を作って欲しいの？
自分の体に」

「そんな事されたら嫌だから、もう俺は帰る」

「……くうっ……待ってお兄ちゃん、寂しいから行かないでえ」

「そこまで言うなら、仕方が無い」

「……絶対に後で覚えとけ」

悔しがる義妹の姿を楽しみたかったんじゃないが、割と本気で帰りがたかったんだが、義妹があそこまでいうなら仕方が無い。残ってやるうではないか。

……なんかいつもと立場が違つとここまで心地が良いものなのか。

「茶髪茶髪」

「いい加減、人の名前を覚えたらどうだ？ アタシは亜実だぞ」

「分かつてるって。ええーと、こいつが俺と兄貴の義妹である張空秋音だ」

「……は、初めまして」

「そう言えば、陽介から色々聞いたことがあるが、会つのは初めてだな。よろしく秋音ちゃん」

「うわ、俺の時とは違つてフレンドリー」

「女同士だからか、女同士だからなのか？」

「なんだ張空弟、まだ居たのか？」

「なんやかんやでお前も人の事を言えないよな、茶髪」
分かった。女同士だからじゃない。

茶髪と俺は一生掛かっても馬が合わないんだ。絶対に。

「んじゃ、俺はもう帰るわ」

「……ちよつと待って」

「何だ、何だよ、何なんですか？ さつきから呼び止めて」

「……本物？」

「マジ物だよ。ガチで兄貴の婚約者。OK？」

「……何が？ 一体全体どこを取ったら理解できるの？」

「会いたい言ってきたのお前じゃん。あとは頑張れよ」

「……アンタが言ってる。なんか怖気づいちゃったから」

「バカだ、バカだろ、バカだったんだなお前って」

「……わざわざムカつかせなくても、後できっちり絞めてあげるから」

絞めるって……ロープで縛る気なのか？ 俺の首を。

「まあ、いいや。茶髪茶髪」

「張空弟、喧嘩を売ってるなら容赦なく買っが？」

「お前に喧嘩を売るバカがいるかよ、バーカバーカ。それでさ」

「絞め殺して欲しいなら、正直に申し出れば10秒であの世逝きだぞ」

「シキの件なんだけど。どう？ 修行上手くいってる？」

「上々という所だな。よく分からないが、何より意欲が急に高くな

ったから成長が早い」

「胸の成長は遅いの？ まあいいや。っーことは、そんなにシキ

に敵しくしてないって事なのか？」

「ああ、まあそうだな。キツクしなくても充分強くなっている」

シキの元気が無い原因だと思った、茶髪の特訓は何の問題も無く進んでいる。

じゃあ、一体、何が原因なんだ？

原因？（後書き）

小月が何故やけに調子に乗ってるかといえ、作者が書き方を忘れたからですね。
はい。

要因

「つまり、張空陽介は未だ世界のどこかで生きていて、8年前に死んだとされる魔神……篠守唯音の肉体は張空秋音に変わり今も生きてるってわけだ。理解できたか【蒼い死神】？」

「な……んて……？」

「残念だったな。お前が嫌ってた魔神は死んでいないんだ」

「本当……なのか？」

「ああ、本当だ」

「なら……何でお前はそんなに冷静なんだ！ 魔神は ツ！」

シキの言葉が止まる。一瞬で距離を詰めたオトアが首を掴んだためだ。

「魔神は魔神だ。それ以上でもそれ以下でもイコールでも無いだろオ？」

「オトア………ッ!!」

「この事実を誰に言っただっていい。張空小月だろオが張空秋音だろオが、誰に言っただって構わない」

シキの首を絞める手により一層力を入れ、オトアは言葉の続きを言う。

「だがそれ以上、その言葉の続きを言ってみろ。ブッコロスぞ」

「聞き慣れすぎて、危機感が感じられないな」

「そオか、なら今すぐこの場で塵に変えてやるオか？」

「……………」

しばらく無言で睨み合う二人。互いに何を思っているのか、分からない。

さきに動いたのは、オトアだった。首を掴んでいた手を離し、シキに背を向ける。

「雇い主オーナーが呼びびなんで、オレはもう行く」

「オトア……お前」

「じゃあな【蒼い死神】」
直後、蒼い炎がオドアを包むが《不可視の鎧》インビシブルロックによって直接燃やすことは叶わなかった。

「はあ……」

シキは誰も居ない室内で、盛大に溜息を吐く。
秋音も小月もどこかに外出しているみたいだ。

「……んあ？ シキ、帰ってきてたのか？」
と思つたら、すぐに小月が帰ってきた。

「ああ……今帰ってきた」

最小限で覇気も無い言葉を吐きながら、シキはどこかの部屋へ移動する。

「おい、シキ」

「なんだ？」

「お前、何を悩んでるんだ？ 最近元気ないぞ」

自分呼び止めた小月の顔をしばらく見つめるシキ。

悩んでいた。小月に魔神の件を話すかどうか。

事態に混乱している自分とは違い、小月ならば冷静に状況を整理できると信じている。

しかし、どこか相談できないものがあつた。

秋音も絡んでいる為か、それとも小月の中に魔神がいる為か。それとも他の理由か。

自分でもどれだか分からなかったが、シキはどこか小月に相談するのをためらっていた。

「……いや、何でも無い」

結果、こう言つて、溜息を吐く事しか出来ない。

「じゃあさ」

拒絶されてもなお、小月は引き下がらない。

「溜め息吐くのやめてくれないか？ ちょっとウザいから」

こんな事を言えば、すぐさまシキに小月がボコボコにされてしまう。しかし、シキは小月を睨みつけるだけで何もしない。

「アタシの勝手だろ」

「秋音が気にしてた。お前が何を抱えているかは知らないけど、それで他人を心配させんなよ」

「……………随分、身勝手な事を言うんだな。自分の事だけで精一杯だというのに、他人にも気を遣えと言うのか？」

「そんなに精一杯悩む事なら、俺にも言えよ。そうしたら一杯じゃなくて半分になる」

小月の言い分は、おおよそ正しい。

わざわざ自分一人で悩むことは無いのだ。他人に心配をかけるくらい悩んでいるなら、他人に相談すればいい。

しかしシキはそうしない。理由は自分自身にも分からない。

「……………話はそれだけか？」

無理矢理、小月の話を断ち切り、部屋を出て行ってしまおう。

「…………チツ」

小月は誰も居なくなった室内で、一人舌打ちを打つ。

シキと過ごした時間は少ない。だけど、自分はそれなりにシキに信用されているものだと思っていた。

それがどうだ？

シキは今、何かに悩んでいるというのに、アイツはそれを自分に相談してこない。

自分はシキに頼りにされていない。その事実が、小月をイラつかせていた。

「…………ただいまあ」

ファミレスに置いて来た秋音が帰ってきた。

途中で帰ったことを怒られるのかなあー、という風にぼんやりと小月が考えていると秋音が問い掛けてくる。

「シキ、どうだった？」

玄関にある靴でも見て、小月とシキがいる事は察しがついたのだらう。

「知らねえ。あんな生意気な貧乳女、どこで何してようが関係ねえ」どこか不貞腐れたような感じでいう小月に秋音は溜息を吐いた。

「……今、シキは目も合わせてくれないの。この家で話が出るのはアンタだけなんだから頑張つてよ」

「頑張つてなんて無責任な言葉を投げかけた所で、俺は動かねえぞ」

「……珍しくアンタを頼りにしてるの。シキが多分、一番信頼してるアンタを」

秋音のその一言で小月は余計にイラついた。

もしも本当に自分のことを一番信頼してるというなら、何で話してくれないんだ。

その思いが余計に強く

「……シキが元気になったら、小遣いアップするから」

「どうやって、何処にいるかも分からない両親から貰ってる小遣いをアップするんだよ……で、いくらだ？」

信頼うんぬんでのイラつきを「金」が絡みだした途端に忘れる小月の態度に、秋音は盛大に溜息を吐きながらバカとの交渉に乗り出す。

「……200円アップ」

「こちとら小学生じゃねえーんだよ」

「……1000円」

「5000円」

「……2000」

「3000。これ以上は下げられねえ」

何様だ、と思いつながら小月本人が仕事をしなければ仕方が無い。

「……分かった。3000ね」

秋音は3000円でシキの元氣を買うことに決めたのだった。

要因（後書き）

あとはシキを餌食で釣ったら、予言潰しの始まりですね

死因

夕食時。俺は3000円のために【蒼い死神】攻略作戦を開始した。

「シキシキシキシキシキシ」

「そんなに呼ばなくても聞こえてる」

怒られた。そんなに名前を呼んだか？ たかが数回だろ。

「お前、最近悩み事多いよな？」

「……………？ まあな」

怪訝そうな顔で俺を見るシキ。

何か企んでるな？ そりゃそつだ。3000円のために俺が何もしないとも思ってたか？

「んなら、ケーキ奢ってやるから、その悩み事を俺に話せよ」

「嫌だ、とさつきも言っただろ？」

「そつか……………そりゃ残念だ」

シキが何かを探る様な視線で俺を睨み付ける。

まあ、そうなるだろう。さつきはあれほど食いついてきたのに、今度はこんなにあつさり引き下がるんだから。

俺も、手段を選んでられないんだよ。

卑怯だろうが意地悪だろうが3000円を得る為だったらどんな手段だって取ってやる！

そんな意気込みでお前に挑んでいるんだ。覚悟しておけ。

「前もって買ってきたけどお前が要らないって言うなら俺と秋音の二人で食べるしか、無いよなあ」

「ちよつと待て。誰が要らないと言った？」

「じゃあ喋るのか？」

「誰が喋るか」

「なら食べないってことだよな。仕方が無い。お前が誰にも言えないような相当な事を抱えているのに無理矢理喋らすような真似は非道だと思ったから、わざわざシキが一番好きなケーキ屋のシキが一

番大好きなショートケーキとレアチーズケーキの二つを買ってきてやったのに、お前が喋らないと言うのなら、俺と秋音の二人で食べるしかないよなあー」

「小月の卑怯者！」

お褒めの言葉、ありがとう。

いつものガキっぽい事を言うシキに戻り始めた。作戦の効果ありだ。しかし、まだ足りん。

まだ、シキは涙目ではない！ こいつが泣くぐらいまで追い詰めてから大人しく白状させてやる。

人の顔を見ては盛大に溜息を吐いた仕返しだ。ぐへへへへへへ！！
……いかん、本来の目的を忘れてしまう所だった。

「さあ秋音。夕飯も食べ終わったことだし、デザートとしてケーキを食べようじゃないか。冷蔵庫に冷やしてあるから出してくれないか？」

「……ちょっとやり過ぎじゃない？」

ヒソヒソとした声で秋音が聞いて来る。

「大丈夫だ、問題無い」

「……分かった。皿に移して持ってくる」

即答した俺をまるで下衆を見るような目付きで一瞬見た後、秋音は席を立った。

「……小月、お前ちょっと最近グレてないか？」

「そんな事は無いぞ、貧乳」

「……ほお」

「燃やすのか？ 燃やしたら話す話さない関係無しにケーキは没収だぞ」

「やれるものなら、やって」

「秋音え、ショートケーキの方をゴミ箱にダンクシュートしてってシキが言ってるからそうしてくれないかあー？」

「ちよっと待とう、小月。アタシが悪かった」

分かればいいんだよ、分かれば。

「つたく、こつちは作戦上、シキをできるだけ感情的にさせなきゃいけないのに。」

「こんな調子で喧嘩を吹っかけてたら俺の命が持たない。」

「お前がさつさと悩み事やらを俺に喋っちまえば良いんだよ。さあ、さつさと吐け」

「……………嫌だ」

「ケーキ没収？」

「うう……………小月い、頼む」

「話さなきゃケーキはやらん」

「くうう……………他の条件は無いのかあ？」

「涙目ながら問いかけてくるシキ。作戦成功だ。」

「……………いやだから、それは本来の目的じゃないんだった。」

「しかし、他の条件か……………」

「なら、もうその事で悩むな」

「うう……………また難しい事を……………」

「難しい事なのか？ その悩み事って？」

「うう、まあ」

「シュレーディンガー方程式よりも？」

「しゅれ……………え？」

「相対論的量子力学よりも難しいのか、その悩み事っていうのは？」

「ソウタ……………い？」

「案外、お前が悩んでる事ってとっても簡単だったり、割とどうでも良い事じゃないのか？」

「そ、そんな事は！」

「そうかあ？ 俺はお前が何で悩んでるかなんて知らないけど、どうせ、周りの人間のこととかで悩んでるんだろ？ 多分、秋音のことを」

「な、にやなんでその事を！？」

「やっぱり。」

「どうせシキの事だ。自分の事とかよりも他人の事を考えている。」

無駄に優しい死神さんだからな。

一番相談しそうな秋音に相談しない時点で、少し勘付いてはいたんだけども。

「俺は多分、お前よりも秋音のことを知らないけど、秋音なら自分の問題は自分で解決できると思うし、むしろお前が口出しやら手出しやらしたら余計に混乱するだけだと思うぞ」

「酷い！ そんな言い方しなくなつて」

「事実だから仕方が無い」

「くう……………なあ」

「何だ？」

「もしも、秋音が秋音じゃなくて他の誰かが変身した姿だった、なんて展開が起こつたら小月はどうする？」

「どうもしないだろ」

「え？」

即答した俺の意図が分からなそうに、シキはこちらを見てくる。いやだつて、そもそも俺は秋音について性別と容姿と年齢と誕生日のことしか知らないし。

それが嘘だとしても。

「秋音は秋音だろ。偽物だろうが人形だろうが俺の義妹であることは変わらない。シキの友達であることもな」

「ふむ……………確かに、アタシはくだらない事で悩んでいた気がする」

「そうかい。まあケーキでも食つて冷静になれよ。俺は部屋に戻るわ」

「ちょっと待て。小月」

「ん？ 何だ？」

任務完了したから、俺はこの場からさつさと退散したいんだが。だつて、

「お前まさか、アタシに貧乳やら言っておいて何も無いとは思ってないよな？」

早く逃げないと蒼い炎で燃やし殺されるんだもん。

……さすがに、調子に乗り過ぎたな。反省反省。

後悔先に立たず。俺の先に立っているのは川を渡る白服の方々のみ。

死因（後書き）

タイトル通り、だったでしょ？

起因

某県のとあるアパートの一室にて。

「うにゃああああ！　なんでなの篠守君！！」

赤い猫のような目と無邪気で無垢な顔立ちの少女が青年に叫んでいた。

「何がだよ？」

対して、叫ばれた方の青年……篠守音亜はポテトチップスを摘みながら問い返す。

実を言えば、そのポテトチップスが原因なのだ。

「なんで！　なんでわたしにポテチを分け与えないの！」

「食いたきゃ、勝手に食えよ」

「勝手に！？　どの口がそんな事を言えるの！」

何度、少女がポテチの袋に手を伸ばしその中にあるポテチを取ろうとしたことか。

しかし、結果は袋の入り口で手が進まなくなる。

まるで見えない壁に塞がれているように。

「《不可視の鎧》インビジブルロックを自らのポテチを守るために乱用するとは何事か！　今すぐ能力解きなさい！」

「イヤだ。これはオレが自腹で買ったモンだ。防衛して何が悪い。

よくある袋とかに自分の名前を書くのと大して変わらねエ」

「変わるよ！　ただのサインペンと自分の能力を同等に見ないで！

格が違うから！」

「いや変わらねエ。印をつけるようなモンだ」

「透明な印ってさ、どうなの！？　意味あるの！？」

「ああ、現に今はオメエの窃盗を防いでいる」

「ポテチごときで窃盗なんて、篠守君って細かい男！」

少女はオトアに怒鳴り散らしている間もどうにかしてポテチ強奪を企てていたが全て失敗。ついには諦め、袋を掴んで外に投げようと

する。

その投げようとした腕も《不可視の鎧》の縫い付けによって動きを止められる。

「ねえ、これじゃ首輪の意味ないよね？ 能力乱用しまくりだよね？」

「オレが裏切らねエようにするための保険だろ？ こういう時に効果を発するモンじゃねエよ」

とうとう少女はポテチを諦め、袋をオトアに返す。そして部屋の隅に行き、しょぼくれる。

「わざわざポテチごときで……ガキか？ オメエは」

「ガキはどっち？ そこまで必死にポテチを守る必要あるの？」

別に必死だったのは少女の方だけで、オトア本人はむしろだらけていたのだが。

引き続き、オトアはポテチを摘みながら少女に問う。

「それで雇い主^{オーナー}。お仕事の方がイイのか？」

実はオトアは遊園地の一件以降、このアパートの一室でゴロゴロしていた。

それは雇い主が『お仕事はまだだからここに居て。あ、くれぐれも外にブラブラ出ないでね。探すの面倒だから』と言われたからである。

別にオトアが外に散歩に行こうとも、首輪が付いている限り、どこに居るかは分かるはずなのだが。

「んー、そうね。そろそろ予言潰ししてくれる？」

雇い主は顎に指を当てて逡巡した後、気楽にそう言った。

実に軽い。ポテチの一件の方が必死に思考を回していたんじゃないかと疑うほど軽い。

重要なことじゃないのか？ とオトアは思い、雇い主の態度に溜息を吐く。

「それで、手始めに何をすればイイ？」

「んじゃ、ビル潰しちゃって」

「……………あア？」

雇い主の発言に困惑するオトア。

白昼だろうが夜空の元だろうが、ビルがいきなり物理的に潰れればオカシイと思う人間が大多数である。

そんな事をすれば、狐狩りが即起こる。

裏の世界の大量虐殺がすぐさまに起こってしまう。

「いやもうド派手にビルを丸ごと潰しちゃってよ。あ、夜じゃダメだよ。昼間じゃなきゃビルの中に居ないじゃない？ 人が」

「……………わざわざ狐狩りを誘発させてエのか？」

「全然まったくこれっぽっちもそんな事を思っていないけど？」

雇い主の考えが読めず、オトアは眉をひそめる。

「大丈夫。篠守君が本気を出せばバレないでしょ？」

「んなわけあるか。アホか、テメエは」

「まあ、最悪大勢にバレたら予言潰しのついでに大量に裏の世界の奴をぶつ殺せばいいだけだから」

「やっぱりバカだろ。圧倒的なバカだ」

オトアの罵声を無視し、雇い主は会話を進める。

「ビル潰した後は、こっちで指示するから携帯で連絡寄こして。アドレス帳にあるでしょ、わたしのメアド」

「あア」

「それじゃ、さっそく行ってきて」

「無茶苦茶な」

そう言つてオトアはポテチの袋を潰しゴミ箱に捨てた後、部屋を出る。

「あ、それと」

後ろから声を掛ける雇い主に、オトアは振り返り言葉の続きを待つ。

「くれぐれも表の世界の人達にはバレない様に」

「……………ハア」

そちらから表に確実にバレるような内容突き出して、表にバレない様にと要求を出してくるのは何事か。

確実にバカにされている。オトアはそう思いながら溜息を吐き、

「善処はする」

いくらバカにしてきているとはいえ、自分の雇い主。

ソイツの要求がいくら無謀でも善処はしなければいけない。

より一層、盛大な溜息を吐いて、今度こそオトアはアパートを後にする。

起因（後書き）

月曜から中間テストだよ、死にたい

悪因

『ねえー、今、午後ドラ見てるから後にしてくれない?』

「嘗めてんのか? あア?」

雇い主の言いつけ通り、ビル潰しの直後電話を掛けたオトアは相手の反応にイラついた。

『あ、で結局どうなった? やっぱり大衆にバレちゃった?』

「やっぱりってなア……………最初からバレると思ってたのかよ」

『まあね。それで結果は?』

「数人にはバレただろオが、まあ問題無いレベルだ」

『……………え? マジ?』

「マジだ」

『凄い、篠守君ってホント何者? っていうかどうやったの?』

「何者も何も、ただの裏の世界の人間だオレは。そしてやり方は企業秘密だ」

溜息を吐きながら答え、オトアは次の標的を雇い主から聞き出そうとする。

『ああ、次からは隠れて速やかにズバツと殺してもらっから』

「つまりは暗殺ってことか。人数は?」

『ざっと……………78万つてとこかな、多分』

「78万か……………」

『楽勝でしょ?』

「まアな。だが、時間が掛かる」

『大丈夫だよ。全員、裏の世界の闇の方へ堕ちて行ったクズ共だもん。篠守君と同じ道を歩んでいるから、篠守君には敵わない』

「……………言ってくれる」

『ま、それに全員、居場所は分かっているから篠守君が早く終わらす気があればチャチャッと終わるよ』

「ハア……………それで、最初は誰だ?」

『篠守君、篠守君。起きてる?』

「じゃなきゃ電話に出てねえだろオが」

日本で一番高いとある山の近くの樹海にて、オトアは電話の相手に対して悪態をつく。

「にしても、本当オにこんな場所にいるのか?」

『居るって情報があるんだから、居るんじゃない?』

「なアんで、こんな場所に隠れんのかねエ……?」

雇い主の話では、この樹海内にいるらしいのだ。最後の標的の一人が。

1日約11万人の人を殺してきたオトアは疑問に思う。

約78万人もの味方がたつた一週間で全員殺されている。

次は自分の番だと思うのは自然だろう。そしてどこかに隠れようとするのも自然だろう。

しかし何故、わざわざ自殺スポットじみた場所を隠れ家とするのか?

確かに、表の世界の人間が大量にいるような場所においても暗殺されてしまう。

しかし、こんな人気が無い場所などのほうが誰にとっても殺しやすい。

わざわざこんな場所に隠れる必要があるのか?

『案外、畏だつたりね』

「ああ? オメエはオレにデマを教えたってわけか?」

『違う違う。この情報はここ一週間以内に上がったものだけど、信憑性が低くてね。一番最後に回しざる終えなかったの』

「そりゃ畏だわ。確定だ」

『あちゃー、結構確実にぶち殺しておきたい奴だつたに。篠守君、もうお仕事は終了していいよ。今すぐ戻ってきて』

「善処はするが、まあ無理そオだ」

そうやって電話を切り、オトアは独り呟く。

「んで、オメエはオレに何か用か？」

「ああ、そうだ」

相手の返答を聞いた瞬間、オトアはその場で一回転しながら右手の《処刑刃》^{キロチン}で一带を切断する。

辺りの木々が倒れる中、上から落ちてきた影の方向へオトアは視線を向ける。

「危なっ、死ぬところだったろ」

「別に殺す気は無かったが、オレは上から見下ろされるのが嫌いなんでな」

一歩ずつ、オトアは両手に《処刑刃》を携えながら影の方向へ近付く。

「今度は殺す気でいくから安心しろオ」

「死ぬのはお前だぞ」

「ああ？」

影の言葉に疑問を持ちながら、オトアは片腕を振り下ろす。

途中、ほんの少しの抵抗を感じながらもオトアの腕はしっかりと振り下ろされた。

(……………こいつ……………)

「こりゃア、大口も叩きなるわけだ」

「まあな」

影は立ち上がりながら、オトアの言葉に答える。

《処刑刃》は刃物とは違う。空間断絶で相手を斬るのだ。抵抗なんてあるわけが無い。

つまりこの影は、《処刑刃》を受け止められ、その上、消したという事を行ったのだ。

(……………オレの力を無効化した……………もしかすると……………)

オトアはある思考に行きつき、影の姿をじっくりと観察する。

ボサボサな黒髪でつり上げた目付き。身長はオトアよりも高く、格好はスーツ。

「オレはな、強エ奴を探してんだが……お前、名前は？」

「……………？ 早川だが」

「四文字目でアウトかよ……………ふざけんな、バアカ」

容姿や格好が、自分の記憶とは違うものだった為、端から期待などしていなかったが。

オトアは溜息を吐きながら、消された《処刑刃》を再度創り直す。

「ムカついた。速攻でブチクロス」

「だから死ぬのはお前だって」

早川は黒い炎のようなものを自分の近くに纏わせる。

おそらくアレが《処刑刃》を消したものの正体だろう。

(……………つくづく、炎には縁がある……………)

姿勢を屈め、オトアは一步を踏み込む。

悪因（後書き）

あとはバトって終わり。それ以外には何も無い。

禍因（前書き）

タイトルなんかに意味は無い

禍因

一步目を踏み込むと同時にオトアは踵に作った空気の球を破裂させ、早川との距離を一瞬で詰める。

そしてそのまま繰り出された《処刑刃》^{キロチン}の突きに対し、早川は動ずる事なく、黒い炎を纏った右手を薙ぐ。

二つの衝突後、黒い炎に削り取られるように消された《処刑刃》。オトアはそのまま自身に黒い炎が伝わるのを恐れ、後ろに飛び退き、その途中で指を弾く。

直後、早川の周囲で爆風が吹き荒れる。

「無駄だって」

早川が言うと同時に、黒い炎が彼の周りを旋回し、爆風を消し去る。(……………おそらく炎は【蒼い死神】と同じく媒介に過ぎない。蒼い炎が命を表すのなら、黒い炎は全てを消し炭にするって事を表してるのか……………ふざけてやがる)

「能力を消す炎かと思えば、どオやらその程度じゃねエみたいだな」
立て続けに自らの攻撃を防がれたオトアは、早川を睨みつけながら言う。

「単純な力だが、圧倒的だろ？」

早川は自らの炎を掲げながら応える。

「この前じゃ、《不可視の鎧》^{インビジブルロック}の一切は通用しない。だからお前は死ぬ」

「だろオな。このまま無謀に突っ込んで死ぬだけだ。しかしながら」

再度、両手に《処刑刃》を創り出しながらオトアは言う。

「結果は変わらねエ。死ぬのはお前だ」

「無謀に突っ込んだら死ぬって言ったのは自分だろ……………」

「最後に」

呆れる早川に、オトアは一つ問い質す。

「何故、《不可視の鎧》という名を知っている？」

つい先日の遊園地で、雇い主が勝手に名付けた能力名。

オトアは言わなければ首輪爆発という一方的理不尽条件がつけられているが、広めなければいけない義務はない。

だから、滅多に《不可視の鎧》などという言葉は使わないし、本来広まるわけではない。

しかし何故、早川は知っている。

「んあー……確か、非通知で電話が掛かったんだっけか？ 篠守音亜の力の説明やらなんとかで。そんな時に、やたら強調して言うから覚えちまったんだよ」

「オオケー、あのクソ女はあとでぶち殺せやイイんだろ」

苦笑いを浮かべながら、オトアは空に呟く。

少しばかり緩んだ空気はすぐに緊張へと変わり、痺れるような沈黙が彼らを支配する。

そんな状況は、十秒とも持たなかった。

「ッ！」

オトアは歪め作った空間の球を破裂させ、距離を一気に詰める。

その勢いを利用し、《処刑刃》による突きを繰り出す。

「芸の無い」

先程と同じオトアの行動に、早川は嘆息しながら、黒い炎を纏った右手で《処刑刃》を受け止める。

《処刑刃》に黒い炎が触れた瞬間、オトアは突き出した手を引き、指を鳴らして、早川と自分自身の間を爆発させる。

早川は右手を薙ぎ、黒い炎を盾代わりとして爆風を防ぐ。

《不可視の鎧》によって爆風を防いだオトアは、左側に《処刑刃》を突き出す。

突き出された《処刑刃》を左手で受け止めながら早川は言う。

「まさか右手だけが黒い炎を操れるとも思ったのか？」

「……………」

炎に侵蝕される前に腕を引き、オトアは次の攻撃へと移る。

対する早川も、一方的に防御に回るわけではなく、自らオトアに攻撃を仕掛ける。

《処刑刃》が振るわれ、それを黒い炎が削り消す。

黒い炎が飛散し、球を破裂させて距離を取る。

そしてまた球を破裂させ勢いを乗せた《処刑刃》の突きを繰り出し、それを黒い炎を纏った手で弾く。

黒い炎で消された《処刑刃》を一瞬で創り直し、振るい、また黒い炎によって消される。

防御すらも攻撃となる早川と違い、一方的に削られていくオトア。

黒い炎が体に一瞬でも触れてしまえば、その部分の肉体は丸ごと削られ、もしも燃やされるなんて事態になってしまえば、炭すら残らない末路を迎えてしまう。

一瞬の隙さえ、直接死へ繋がってしまう。

「……………ッ！」

例えそれが、ほんの少し重心が前に行ってしまっただけでも、それが原因で黒い炎に全身を包まれる結果を生んでしまうのだ。

(……………貰ったッ！)

周りに飛散していた黒い炎を全て右手に集わせ、早川はそれを投げつけるようにオトアへと放つ。

《不可視の鎧》で防ぎきることなど不可能。球を破裂させ距離を取るにも、重心が前にあるため小さ目な爆発ではあまり距離が取れない。

いや、そもそも直線状の距離を取ったところで躲しきる事は不可能な攻撃なのだろう。

今すぐ後ろには下がれない、《不可視の鎧》による防御も通じない。しかし体は勝手に前へ進んでしまう。もうどうしようも無い。詰みである。

早川の判断上では。

「ッ!？」

黒い炎が、まるで壁にぶち当たったように空間に弾かれ飛散する。

自らが予期しなかった事態に早川は行動のすべてを止めてしまう。

「裏技だ」

そのオトアの言葉によって意識を覚ました時には、《処刑刃》による突きが繰り出されようとしていた。

(……まだ、この距離なら対処できる……………)

理解不能な出来事について考えるのを後回しにし、早川は《処刑刃》の突きを受け止めようと右手を引く。

そしてオトアは早川が右手を引き終る前に、体を捻り、突きではなく《処刑刃》による斬撃に変更した。

突然のオトアの行動に、早川は左手で《処刑刃》を受け止め、

「だから両手とも黒い炎を操れるって言って」

「奇遇だな。オレの《処刑刃》も両手とも使えるんだ」
脇腹に異物を感じた。いや、異物じゃない。

本来繋がっていないければいけない器官が隔てられているような感覚を、早川は痛みと共に感じた。

空いていた手に《処刑刃》を創り出し、自分を刺した。

そう早川が理解した時には、脇腹に刺された《処刑刃》は垂直に振り下ろされていた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

仰向けに倒れながら早川は苦悶の声を上げる。

それを見下ろす形で、立つオトアは早川の首に《処刑刃》を当てながら問う。

「黒い炎、あれは何だ？」

早川の操る黒い炎。オトアはあれに異常性を感じ、問い質す。

「……………呪いだ」

「呪いだア？」

「そう、これは【虚無の王】の呪い」

どこか狂気じみた笑いを浮かべながら、答える早川。
直後、彼の肉体は黒い炎を発火した。

「ッ……………これも呪いのうちってか？」

「まあな。どうせこのままじゃお前に殺されるんだろっし」

爪先から徐々に塵となり消えていく早川の体。

その有様を見下ろし続けながら、オトアは話し掛ける。

「まあ呪いはあのクソに報告しておけばいい事で、本題はこっちだ」
早川に一つの事を問いかける。

「お前の名前と似た、隼はや総かせという輩を知らねエか？」

「隼はや総……？ ああ、アイツの事か」

「そいつは今、どこにいる？」

「何処も何も、アイツは【虚無の王】と共にいる」

「……………？ おい、それは」

オトアが聴き質すより先に、早川の体は完全燃焼し、跡形も無く消え去った。

しばらく何も考えずに、オトアはその場に立ちつくしていた。

禍因（後書き）

はい、予言潰しは終了いたしました。

次の更新は不定期で、もしかしたら一ヶ月近く更新せずに他の書いてるかも。

何も書かない可能性もあるのだけど……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9019u/>

NOISE.2

2011年11月1日02時26分発行